九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

X

粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

X

粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査

昭 和 52 年

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

本県における九州縦貫道関係の事前発掘調査は，昭和44年度から開始され，昭和51年秋をもって県担当分の現地調査は終了いたしました。引き続いて，これら調査対象遺跡についての報告書を鋭意作成中であります。

これらの多数の遺跡と厖大な出土品に対するには，各方面から御指摘を受けておりますように調査あるいは整理体制が必ずしも十分とはいえず，このため報告書の刊行も遅延を重ねておるのが実状で，本書所収の乙植木古墳群の調査も昭和47年度実施分の一部であります。

当委員会では，関係報告書の作成に努力を傾注して昭和52年度内にて刊行を完了させたいと考えております。以上の実態を御理解のうえで，本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

なお，本調査の円滑な進捗について御配慮いただいた須恵町教育委員会各位ならびに区長稲永勇氏をはじめとする地元各位に対して，心から御礼申し上げます。

昭和52年1月21日

福岡県教育委員会

教育長　森田　實

例　　言

1. この報告書は，九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，昭和47年度に発掘した粕屋郡須恵町乙植木に所在する乙植木1～4号墳の調査報告である。
2. 発掘調査は，日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が下記の構成・期間によって実施した。なお当該年度調査の詳細については，既刊の九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ（本文編）によられたい。

調査担当者	福岡県教育庁文化課　技師	石山　勲
調査補助員		馬田弘稔・上村佳典・土川修平・萩原裕房・稲永真一・丸山康晴・川村　博・小田雅文・井上設男・三好政文
庶務担当者	福岡県教育庁文化課　主事	植田　実
調査期間	自　昭和47年6月15日	
	至　昭和47年8月17日	

3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ	藤方悦子（須恵町立歴史民俗資料館）
Ⅱ・Ⅲ	石山　勲

4. 掲載図の実測分担については，挿図目次に示すとおりである。作成・製図は全て石山が行なった。掲載写真は遺構を石山が，遺物を九州歴史資料館石丸洋，および九州産業大学学生岡紀久夫・松山芳文がそれぞれ撮影した。
5. 出土遺物は全て，須恵町立歴史民俗資料館にて保管・展示されている。広くご活用願いたい。
6. 本書の編集は，石山が行なった。

目　　次

Ⅰ　乙植木古墳群の位置と環境……1

Ⅱ　古墳の内容

1.　古墳の配列……3
2.　乙植木1号墳……5
3.　乙植木2号墳……10
4.　乙植木3号墳……20
5.　乙植木4号墳……36
6.　乙植木5・6号墳……42

Ⅲ　結　語

1.　立地および墳丘について……44
2.　石室構造について……44
3.　葬法について……45
4.　年代について……45
5.　鏡子について……47
6.　「赤焼き」の土器について……48
7.　古墳における古式須恵器のあり方について……49

図 版 目 次

				本文対照頁
PL.	1	(1)	乙植木1～3号墳遠景	4
		(2)	乙植木2～4号墳遠景	4
PL.	2	(1)	乙植木1号墳石室全景（西から）	6
		(2)	乙植木1号墳石室全景（東から）	6
PL.	3	(1)	乙植木1号墳石室左側壁	6
		(2)	乙植木1号墳石室右側壁	6
PL.	4	(1)	乙植木1号墳石室奥壁	6
		(2)	乙植木1号墳石室閉塞石	6
PL.	5	(1)	乙植木1号墳閉塞石遺存状態	6
		(2)	乙植木1号墳石室全景（閉塞石除去後）	6
PL.	6	(1)	乙植木1号墳石室内遺物出土状態	7
		(2)	乙植木1号墳出土遺物	7
PL.	7	(1)	乙植木2号墳石室全景（東から）	11
		(2)	乙植木2号墳石室全景（西から）	11
PL.	8	(1)	乙植木2号墳左側壁全景	11
		(2)	乙植木2号墳横口部閉塞状況（室外から）	11
PL.	9	(1)	乙植木2号墳横口部（石室内から）	11
		(2)	乙植木2号横口部（室外から）	11
PL.	10	(1)	乙植木2号墳左袖石付近（袖石除去後）	11
		(2)	乙植木2号墳左袖石前面土器出土状態	12
PL.	11	(1)	乙植木2号墳全景（南西から）	11
		(2)	乙植木2号墳墳丘南西側土器出土状態全景（東から）	12
PL.	12	(1)	乙植木2号墳南西側土器出土状態	12
		(2)	乙植木2号墳墳丘南西側A群土器出土状態	12
PL.	13	(1)	乙植木2号墳墳丘南西側B群上部土器出土状態	12
		(2)	乙植木2号墳墳丘南西側B群下部土器出土状態	12
PL.	14	(1)	乙植木2号墳墳丘南西側C群上部土器出土状態	12
		(2)	乙植木2号墳墳丘南西側C群下部土器出土状態	12
PL.	15	(1)	乙植木2号墳墳丘南西側鉄製工具出土状態	12
		(2)	乙植木2号墳墳丘南西側D群土器出土状態	13
PL.	16		乙植木2号墳出土鉄製工具	15
PL.	17		乙植木2号墳出土須恵器（1）	15

PL. 18　乙植木2号墳出土須恵器（2）……19

PL. 19　乙植木2号墳出土須恵器（3）……21

PL. 20　乙植木2号墳出土赤焼須恵器・土師器……22～26

PL. 21　（1）乙植木3号墳石室全景（南から）……28

　　（2）乙植木3号墳遺物出土状態（南から）……28

PL. 22　（1）乙植木3号墳遺物出土状態（西から）……29

　　（2）乙植木3号墳鏡出土状態（南から）……28

PL. 23　（1）乙植木3号墳手斧鉄出土状態……28

　　（2）乙植木3号墳刀・剣出土状態……28

PL. 24　乙植木3号墳出土変形文鏡（上　実大，下　拡大）……29

PL. 25　（1）乙植木3号墳出土変形文鏡鏡縁布銹着状態（拡大）……29

　　（2）乙植木3号墳出土変形文鏡鏡面……29

PL. 26　（1）乙植木3号墳出土珠文鏡（実大）……28

　　（2）乙植木3号墳出土銅鈴（実大）……30

PL. 27　（1）乙植木3号墳出土小玉……30

　　（2）乙植木3号墳出土粟玉……30

PL. 28　乙植木3号墳出土鉄器……30

PL. 29　（1）乙植木3号墳出土釘……32

　　（2）乙植木3号墳出土鉄鏃……32

PL. 30　（1）乙植木3号墳出土刀・剣……32

　　（2）乙植木3号墳出土須恵器……33

PL. 31　（1）乙植木4号墳全景（北から）……36

　　（2）乙植木4号墳全景（南から）……36

PL. 32　（1）乙植木4号墳全景（南から）……36

　　（2）乙植木4号墳全景（閉塞石除去後）……36

PL. 33　（1）乙植木4号墳奥壁……36

　　（2）乙植木4号墳奥壁基部根締状態……36

PL. 34　（1）乙植木4号墳閉塞石……37

　　（2）乙植木4号墳閉塞石最下段……37

PL. 35　（1）乙植木4号墳左袖石基部根締状態……37

　　（2）乙植木4号墳閉塞石前面馬鈴出土状態……37

PL. 36　乙植木4号出土遺物……38

PL. 37　乙植木4号墳出土器台……39

PL. 38　（1）乙植木5・6号墳遠景　北から（東側切通し間は縦貫道）……43

　　（2）乙植木古墳群遠景　東から（縦貫道完成後）……

挿 図 目 次

頁
Fig. 1 乙植木古墳群周辺遺跡分布地図（福岡・篠栗，1/25,000）（原図藤口）……2～3
Fig. 2 乙植木古墳群周辺地形図（原図日本道路公団）……3
Fig. 3 乙植木1～4号墳全体図（実測馬田・土川・荻原・石山）……4
Fig. 4 乙植木1号墳全体図（実測馬田・土川・荻原・石山）……5
Fig. 5 乙植木1号墳墳丘断面図（実測土川・荻原）……6～7
Fig. 6 乙植木1号墳石室実測図（実測馬田・井上・荻原・石山）……8
Fig. 7 乙植木1号墳遺物出土状態実測図（実測石山）……9
Fig. 8 乙植木1号墳出土鉄鏃実測図（実測石山）……9
Fig. 9 乙植木1号墳出土須恵器実測図（実測石山）……9
Fig. 10 乙植木2号墳全体図（実測馬田・土川・荻原・石山）……10
Fig. 11 乙植木2号墳墳丘断面実測図（実測馬田・上村・川村・上川・稲永・荻原）…10～11
Fig. 12 乙植木2号墳石室実測図（実測井上・三好，補測石山）……10～11
Fig. 13 乙植木2号墳墳丘南西側土器出土状態実測図（実測小田，補測石山）……12～13
Fig. 14 乙植木2号墳出土工具実測図（実測石山）……16
Fig. 15 乙植木2号墳出土須恵器実実測図1（実測兒玉真・・石山）……18
Fig. 16 乙植木2号墳出土須恵器実測図2（実測兒玉・石山）……20
Fig. 17 乙植木2号墳出土須恵器実測図3（実測石山）……22
Fig. 18 乙植木2号墳出土「赤焼き」の土器実測図（実測石山）……22
Fig. 19 乙植木2号墳出土須恵器実測図4（実測石山）……23
Fig. 20 乙植木2号墳出土須恵器実測図5（実測石山）……24
Fig. 21 乙植木2号墳出土土師器実測図（実測石山）……25
Fig. 22 乙植木3号墳全体図（実測馬田・土川・荻原・石山）……26～27
Fig. 23 乙植木3号墳墳丘断面実測図（実測土川・丸山）……26～27
Fig. 24 乙植木3号墳石室実測図（実測丸山・三好・稲永）……27
Fig. 25 乙植木3号墳遺物出土状態実測図（実測石山）……29
Fig. 26 乙植木3号墳出土珠文鏡拓影（手拓石山）……30
Fig. 27 乙植木3号墳出土変形文鏡拓影（手拓石山）……31
Fig. 28 乙植木3号墳出土銅鋲実測図（実測石山）……32
Fig. 29 乙植木3号出土鏃子実測図（実測石山）……32
Fig. 30 乙植木3号墳出土刀子実測図（実測石山）……32
Fig. 31 乙植木3号墳出土手斧鍬実測図（実測平ノ内幸治・補測石山）……33

Fig. 32　乙植木3号墳出土刀剣実測図（実測宇野慎敏）……33
Fig. 33　乙植木3号墳出土鉄鏃実測図（実測石山）……33
Fig. 34　乙植木3号墳出土釘実測図（実測石山）……34
Fig. 35　乙植木3号墳出土甕実測図（実測児玉）……35
Fig. 36　乙植木3号墳出土器台形土器実測図（実測石山）……36
Fig. 37　乙植木4号墳石室実測図（実測馬田・福永・萩原）……36～37
Fig. 38　乙植木4号墳全体図（実測馬田・土川・萩原・石山）……37
Fig. 39　乙植木出土鉄地金銅張金具実測図（実測石山）……38
Fig. 40　乙植木4号墳出土紡錘車実測図（実測石山）……38
Fig. 41　乙植木4号墳出土馬鈴実測図（実測石山）……39
Fig. 42　乙植木4号墳出土土器実測図（実測石山）……40
Fig. 43　乙植木4号墳出土器台・壺実測図（実測石山）……40
Fig. 44　乙植木4号墳出土器台鋸揺文様集成図（手拓石山）……41
Fig. 45　乙植木5・6号墳墳丘測量図（実測川述公紀・日高正幸・石山）……42
Fig. 46　乙植木4号墳石室プラン割付復元図（作成石山）……45
Fig. 47　蒲田遺跡D地区第2号住居跡出土土器（作成石山）……46

I　乙植木古墳群の位置と環境

福岡平野を囲繞する山々のうち，東方には宝満・三郡・砥石・若杉の各山が南から北へと連なり，その裾野に表粕屋の字美・須恵・志免・粕屋・篠栗の町が広がる。西側は四王寺山脈や月隈丘陵に遮断され，地理的にやや孤立した感を与える。乙植木古墳群のある須恵町は若杉山の麓に開け，町内を流れる須恵川は粕屋町・箱崎を経て多々良川に流れこむ。農地は狭く，昭和39年の閉山までは炭鉱に依存する面が大であった。

表粕屋のこの一帯は粕屋炭田の名で有名である。地質（註1）は古第三紀層の志免層群に属し，須恵層は250*m*もの厚さで堆積し，凝灰質砂岩を主とし，凝灰質頁岩や薄炭層を含んでいる。新原層は頁岩主体で厚さ30*m*，7枚の炭層があり，志免・新原・仲原付近で発達する。これらの基盤岩は花崗岩・三郡変成岩類でかんらん岩や蛇紋岩・滑石の露頭がみられ，各所に滑石の採石場跡が残る。

乙植木古墳群の所在する粕屋郡須恵町大字植木字山城戸（通称乙植木区）の天神山（標高37.3*m*）は乙犬山の西麓より伸びた独立丘陵で，一昔前までは狐の出没する寂しい山であった。この丘陵の西側には乙植木部落の氏神を祭る天満宮があり，さらに緩く伸びた丘陵の西北に林松庵が位置し，南に部落が開けている。本古墳群は東半分の丘頂近くに営まれ東より1号～4号墳まで調査され，さらに東に少くとも3基（5号～7号墳）存在する。これより西側では天満宮の周辺を開墾した時に須恵器が出土しており―天神山遺跡（Fig.1―29），宮の西10*m*付近や林松庵裏に計3基の古墳がある―天神山1号～3号墳（Fig.1―30）。又，丘陵の西半分の南側斜面には戦時中防空壕に再利用するため手を加えられた横穴があるが，これは古墳時代の横穴墓の可能性がある。この丘陵の北東400*m*の所に柿元池があり，渇水期には北側池畔に弥生式土器や須恵器等がかなりの時期差をもって多数散布し，滑石製の管玉，勾玉，紡錘車その他未製品や石片が，採集され玉生産の工房跡と思われる――柿元池遺跡（Fig.1―16）。さらに北の才木池の西斜面には黒曜石やサヌカイト製の石鏃が表採された―平原サイケ尻A・B遺跡（Fig.1―32，註2）。

ここで周辺の環境を概観すると，乙植木の北の台地は乙犬山より伸びた，新旧大間池・鴛興丁池を包括する比較的広い地で，鴛興丁池周辺の先土器時代から鴛興丁廃寺（Fig.1―10）に至るまでの各時期の遺物の散布（註3），長者原岩崎神社境内の甕棺墓地（Fig.1―33），弥生時代の住居跡群である古大間池遺跡（註4），新大間池周辺の弥生式土器散布地，古大間の

玉造遺跡（Fig. 1—13，註5），焼地山（Fig. 1—11）や井山古墳群（Fig. 1—12） やや西に寄るが弥生中期の甕棺7基と獣首鏡を出土した箱式石棺等4基を調査した酒殿遺跡（Fig. 1—20，註6）など多くの遺跡が存在し，古代の人々の生活を知る。

粕屋地域の発掘調査は近年道路建設に伴い実施されるようになったが（註7），未だ遅れており，分布調査の結果，遺跡数も著しく増加してきたが，消滅遺跡も又多く，その実体は明らかにしえない。

山麓のこの一帯には多数の溜池を築き水利の悪さを補っている。最大の篤輿丁池は元和二年（1616）の記録に残るため，江戸前後の築塘か。新大間池は戸原村庄屋・長卯平の尽力で文化十二年（1815）仕掛水路の普請に着手し文政七年に完成，表粕屋の村々の水田に恩恵を与えている。これら大塘は比較的早く，小塘も江戸後期から明治にかけて築かれ開田が進み，収穫高も大幅に伸びたと思われる。反面この築塘で多くの遺跡が破壊されている。

米作が開始された弥生時代には川に面した丘陵を適地としたようで，例えば須恵町大字旅石の篠堀遺跡は須恵川に面した西側の丘陵端にあり，黒曜石の破片が多数散布する他，弥生時代の土器片や石斧等が採集され，円形住居跡も存在したが，開墾や宅地化で破壊が進んでいる。西端近くで甕棺2基，土壙墓1基が調査された（註8）。須恵町大字須恵の天神畑遺跡（Fig. 1—25）は丘陵の西側斜面にあり，道路工事中甕棺数基が出土したし，現在も弥生式土器の散布がみられる。このほか，箱式石棺墓もかなりあるが時期決定は困難である。続いて丘陵や山麓には多数の古墳が築造され，内部主体は箱式石棺・横穴式石室・横穴に分類される。箱式石棺では平塚古墳（Fig. 1—3，註9）や名子道古墳（Fig. 1—1，註10）がある。 大部分は横穴式石室をもつ小円墳であるが，焼地山には前方後円墳があり，部木八幡宮古墳は前方後方墳（Fig. 1—2，註11）である。横穴はこの辺りでは報告例がなかったが，須恵町大字植木字尾黒から大塚にかけて，ちょうど尾黒古墳群（Fig. 1—17）の南の台地に大塚古墳群（Fig. 1—18）があった。 数基の円墳の外，斜面に何段にも横穴を掘り，その数は数十以上といわれるが，西側にやや離れた数基を残して鉱害復旧のための土取りで破壊されてしまった。副葬品の一部は須恵町立歴史民俗資料館で保管している。この横穴はもろい砂岩層（通称地獄盤）に営まれ，天井等には削った跡がきれいに残り，軟く加工が容易だったようだ。先述した大神山遺跡も横穴らしく，篠栗町和田の蒲田池東岸などにも横穴の存在が確認され（註12），横穴墓の分布地域が広がったことが注目される。

註 1　松本達郎他，「北部九州の地質」『日本地方地質誌　九州地方』1962

2　昭和42年2月，中原志外顕，石井忠両氏分布調査

3　中原志外顕・渡辺正気「福岡県粕屋郡篤輿丁池池畔の石器文化」<九州考古学5・6>1958。福岡県教育委員会<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ>

4　粕屋町浄水池の拡幅工事のため，昭和51年8月～9月にかけて緊急発掘調査。調査主体粕屋町

Fig. 1 乙植木古墳群周辺遺跡分布図（福岡・篠栗，S＝1：25,000）

註 5 4に同じ。昭和51年3月～4月にかけて緊急発掘調査

6 渡辺正気氏発掘調査

7 福岡市教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 蒲田遺跡』<福岡市埋蔵文化財調査報告33>1975

8 昭和50年10月，須恵町教育委員会発掘調査

9 森貞次郎『福岡県粕屋町上大隈平塚古墳』<九州考古学11・12> 1961

10 福岡市教育委員会調査『名子道遺跡』1972

11 福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編』<福岡市埋蔵文化財調査報告書12> 1971

12 篠栗町，本河内乙氏の御教示による。

Ⅱ 古墳の内容

1．古墳の配列 (Fig. 2)

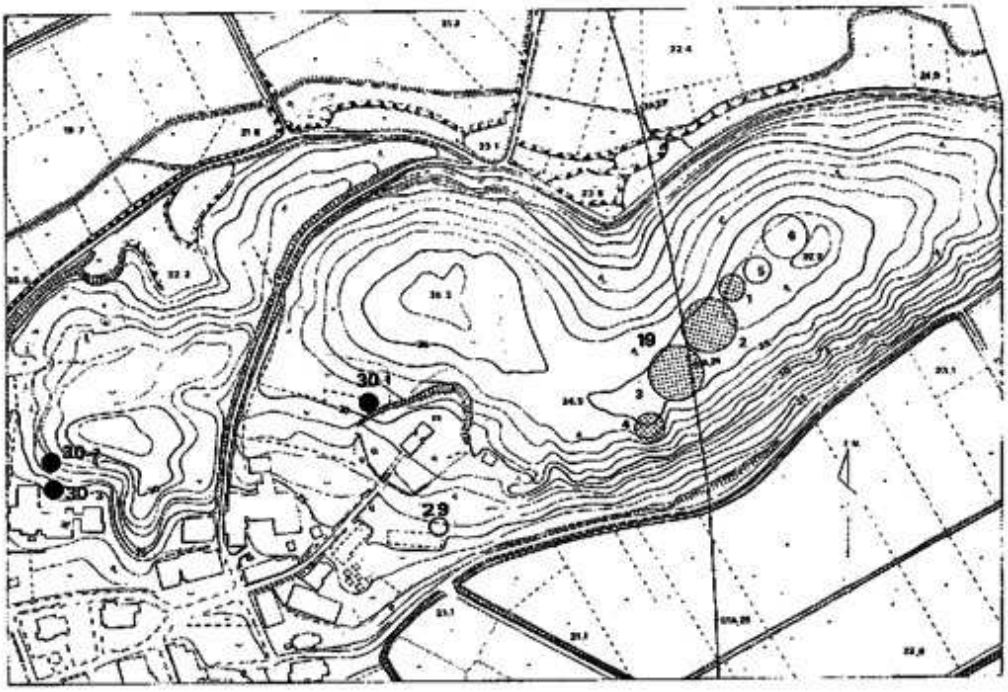


Fig. 2 乙槻木古墳群周辺地形図（S＝1：3,000）

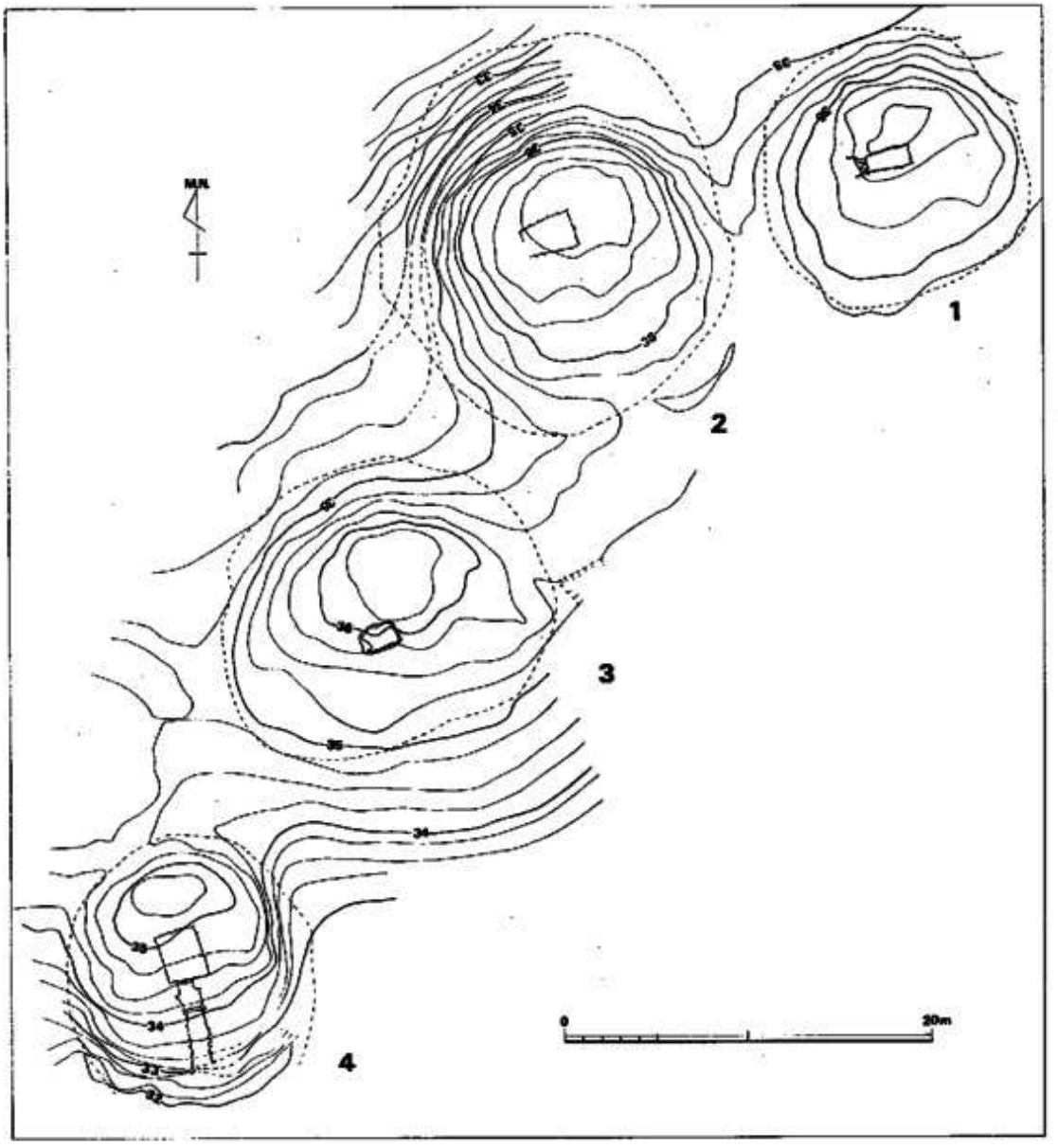


Fig. 3　乙頭木1～4号墳全体図（S＝1：400）

本群には，7基以上の円墳が含まれる。高速道路建設予定地内に所在する4基を東から1～4号墳とし，東側隣接地の3基を西から5～7号墳としている。西側の尾根筋・斜面にもなお数基の横穴式石室を主体とする円墳が知られている。これらは後述するように営造時期上2群に分れる。

2．乙植木1号墳

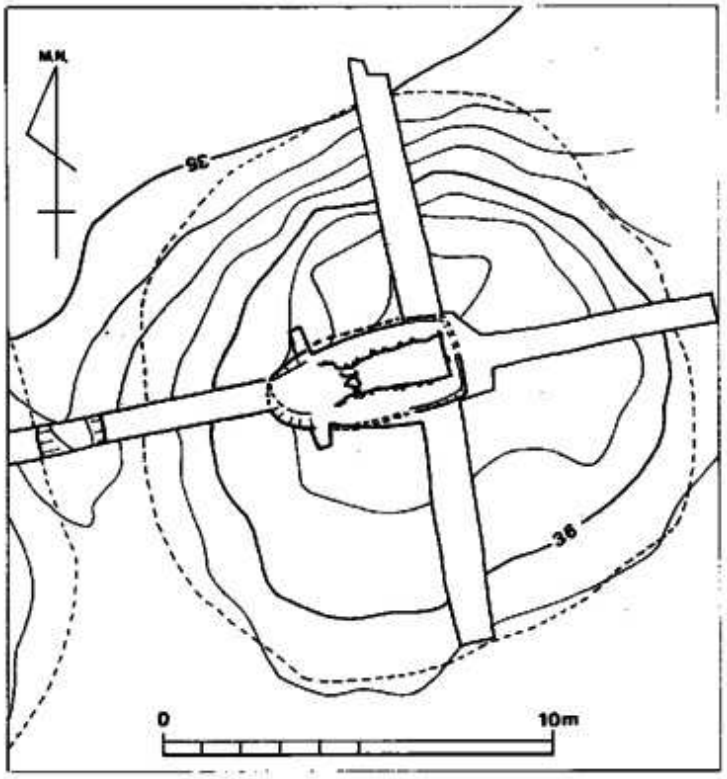


Fig. 4 乙植木1号墳全体図（S＝1：200）

墳　丘（Fig.3・4・5）

尾根筋より少しく北側斜面に寄っており，後述する2・5・6号墳と共通する。盛土に先行して墳丘範囲設定のため裾部を溝状に掘り，東から南にかけての四半分は旧表土の黒褐色土層（Ⅰ――斜線部分）をも除去している。 斜面にからの見かけの高さは約1.9*m*であるが，盛土は1*m*の厚さに過ぎない。盛土は石室構築と平行し，B点を北端としてカルデラ状に土止めを設け，石室を念入りに裏込めし，これらの間は稍大まかに盛っている。北限はC点とみられ，ACは14*m*強。東限はF点に求められ，西限はD・E点のいづれかとなる。E付近では3層に盛り上げた後これをカットとした感をも受けるが，EFは13.5*m*強となる。DEは自然堆積ではなく，明らかに盛土であり，ここでは見かけの点ではあるがDをとり，東西径約15.1*m*とする。

A　現表土（黒褐色土）
B　暗赤褐色土
C　黄褐色土
D　赤黄褐色土
E　明黄褐色砂質土
F　黄赤褐色土
G　赤褐色土
H　茶褐色土（漸移層）
I　黒褐色土（旧表）
J　茶褐色土（漸移層）
K　灰黄褐色土
L　暗赤色土
M　褐色土
N　暗黄褐色土

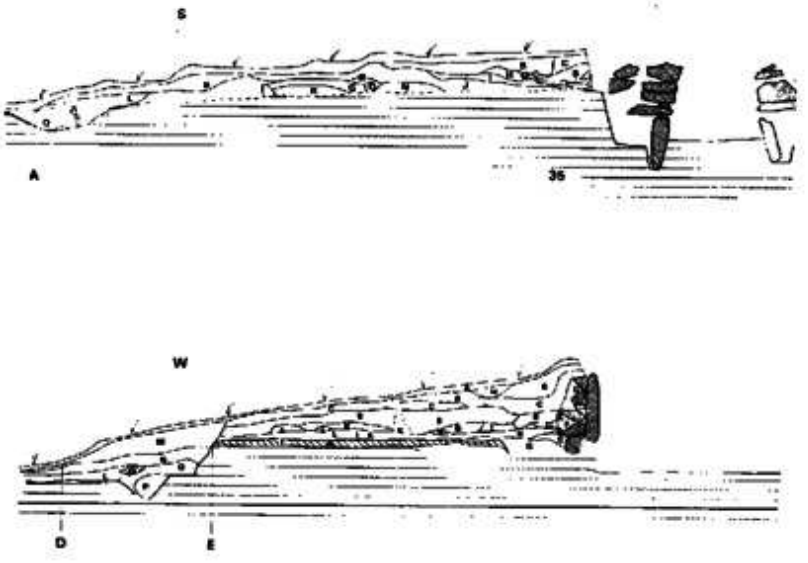


Fig. 5　乙植木1号墳丘断面図　S＝（1：80）

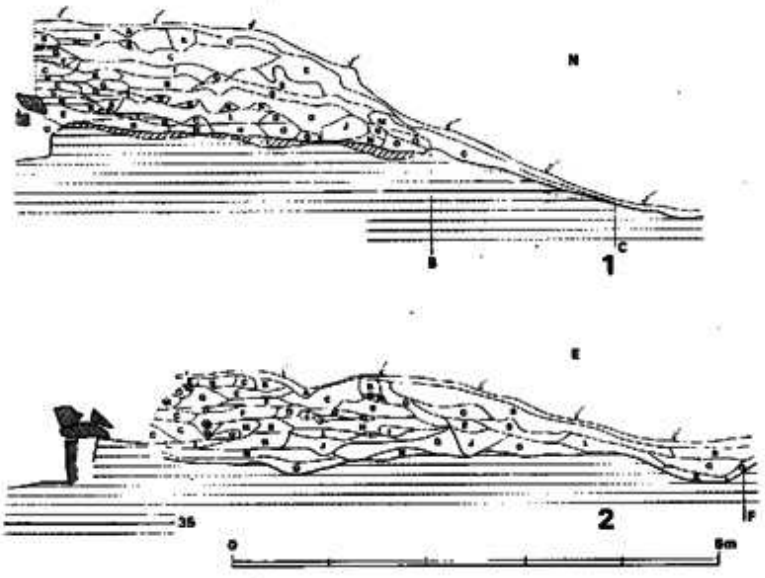
石　室（Fig. 6）

地山を0.5*m*前後穿った墓壙底に営なまれた小型単室横穴式石室で，略南西に向って開口する。墓壙は不整長方形プランを呈し，上端の巾は奥壁寄が2*m*強，横口寄は広まって2.4*m*強となり，長さは約3.8*m*。

玄室は狭小な長方形プランで，長さ2.4*m*強，巾は奥壁部で1.05*m*，横口部で狭まって0.8*m*強。天井石は全て除去されているので高さは不明であるが，現存最高は左袖石天端にあり，1*m*である。

全体に石材はこぶりであるが，奥壁と側壁奥壁寄に大き目の石を腰石とする配慮が窺える。腰石は立てられるが，高さの過半を埋めこんでおり強度に充分な注意が払われている。以上は各所に小割石を充塡しつつ天石を小口積とし，みかけはともかく，かなり手慣れた仕事ぶりである。控え積みは，上段のみに認められる。これは用意した石材の残量と石室完成度との関係によると思われ，石室当初の高さが左袖石天端をそう大きく超えるものではないことを示唆する。玄室床面は，横口部に向って緩やかに下降し，約6㎝の差がつく。床には角礫が敷かれたが，現存するのは奥壁寄の一部のみである。

横口は，玄室内よりも一段高く約25㎝の差があり，基部には周壁同様に板石が立てられ，この上に平石が外側に稍高く傾斜しながら敷かれている。左から突出する袖石は，この敷石上に立てられているが同高ではなく，左袖石の方が約10㎝高い。横口部の巾は，上で47㎝，下で



56cm，高さは現存で82cmと極めて狭小な空間である。この外側に短簡な羨道部側壁が0.6～0.7mの長さにわたって設けられ，先端は広がって1m強の巾となる。この前面には，墓壙の一端を浅く切通した短い墓道がつけられている。巾は上端で約1.7m，下端で約1.2m，長さは1.1～1.2mで，外側へ行くにつれて緩やかな上り勾配となる。

閉塞は，両袖石にもたせかけるようにして板石を置き，さらに土砂で裏込を行なっている。

遺物出土状態（Fig.7）

徹底的に盗掘されており，奥壁左隅近くから須恵器壺1（TUI）・人骨片，奥壁前面から鉄鏃片数片・歯・人骨片，右側壁沿いから歯および人骨数片を採取したにとどまる。壺が盗掘を免れたのは不可解の感を受けるが，2号墳でも同様であり，盗掘者の習癖とも推定される。

遺　物

鉄鏃片（PL．6－2，Fig.8）

いづれも茎の一部であり，全体の形制を復元するには至らない。棘篦被ぎは認められず，大きさからみて，2種以上と思われる。

須恵器壺（PL．6－2，Fig.9）

口頸部の一部を欠失する。口径10cm，頸径6.4cm，胴部最大径14.3cm，器高14.6cm。頸部は少しくひずみ，中段には波状文を付す。体部は全面にわたって叩かれ，底部以上は更にカキ目調整を施し，内面も上半は綺麗にナデられるが，下半は内外ともに器具の痕跡を残したままである。口頸部から体部上半にかけては暗緑色の自然釉がかかり，成形・調整・胎土・焼成の全

てが良好な優品である。

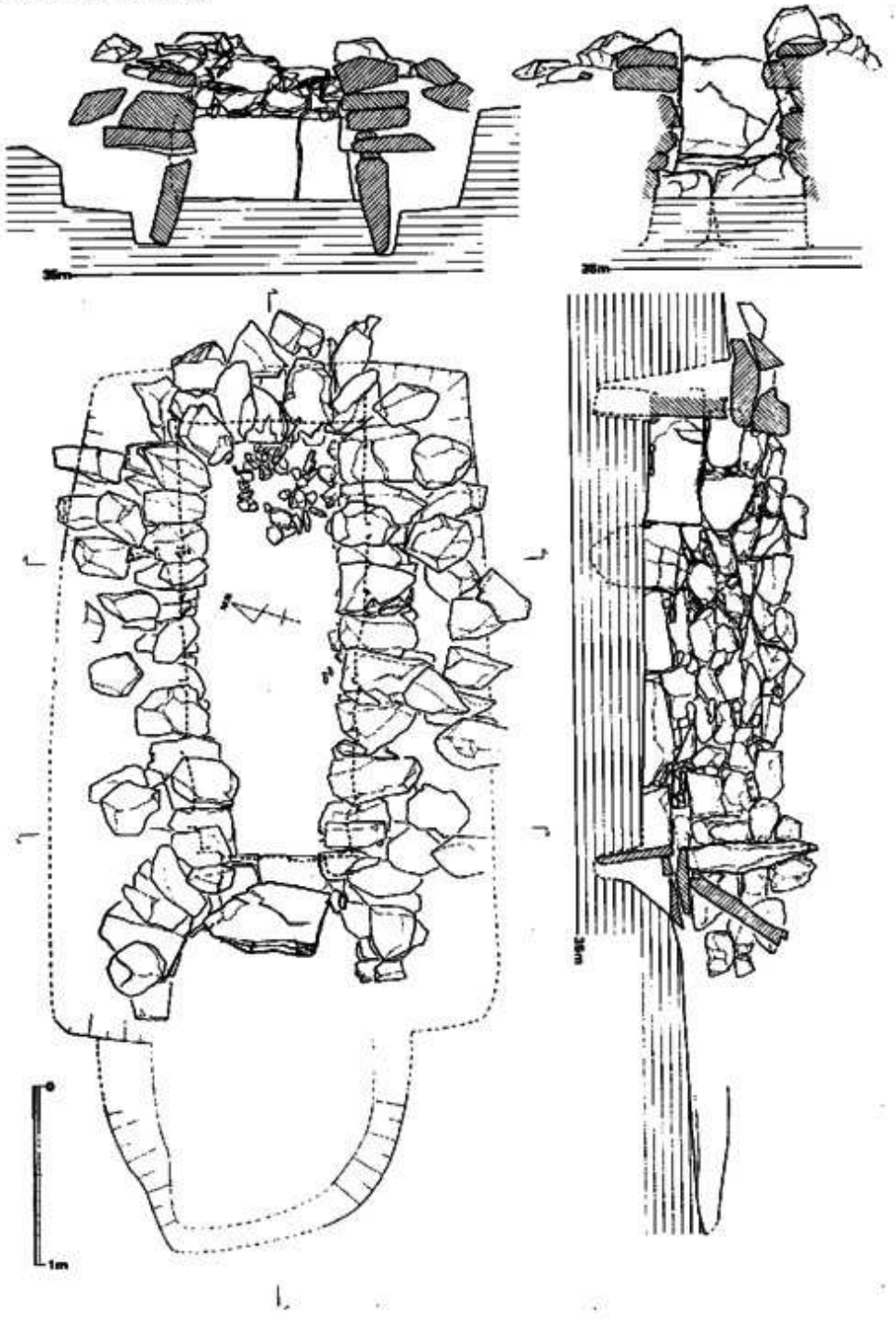


Fig. 6　乙植木1号墳石室実測図（S＝1：40）

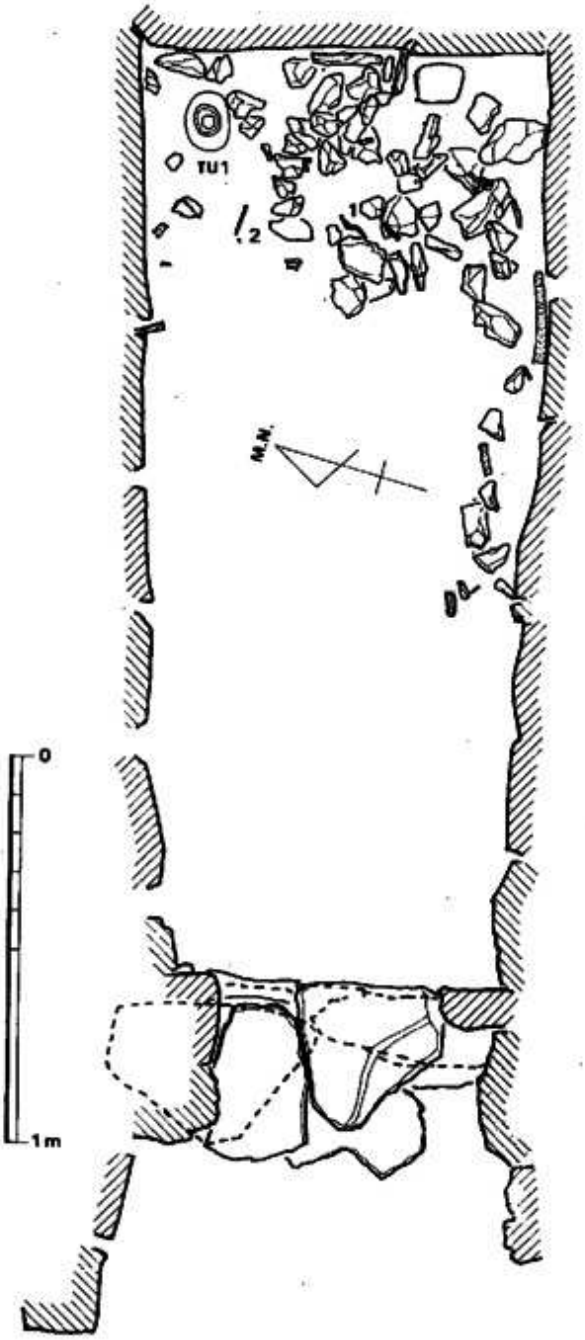


Fig. 7 乙植木1号墳遺物出土状態（S＝1：20）

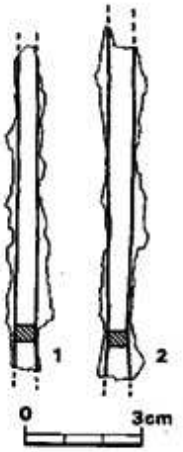


Fig. 8 乙植木1号墳出土鉄鏃実測図（S＝1：2）

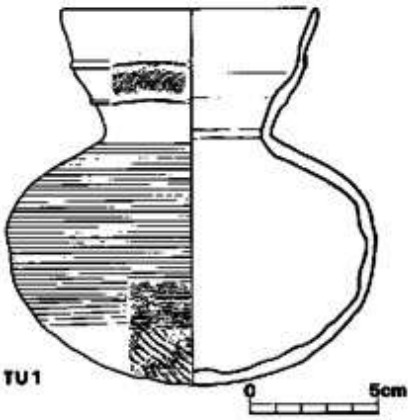


Fig. 9 乙植木1号墳出土須恵器実測図（S＝1：3）

3．乙植木2号墳

墳　丘 (Fig. 3・10・11)

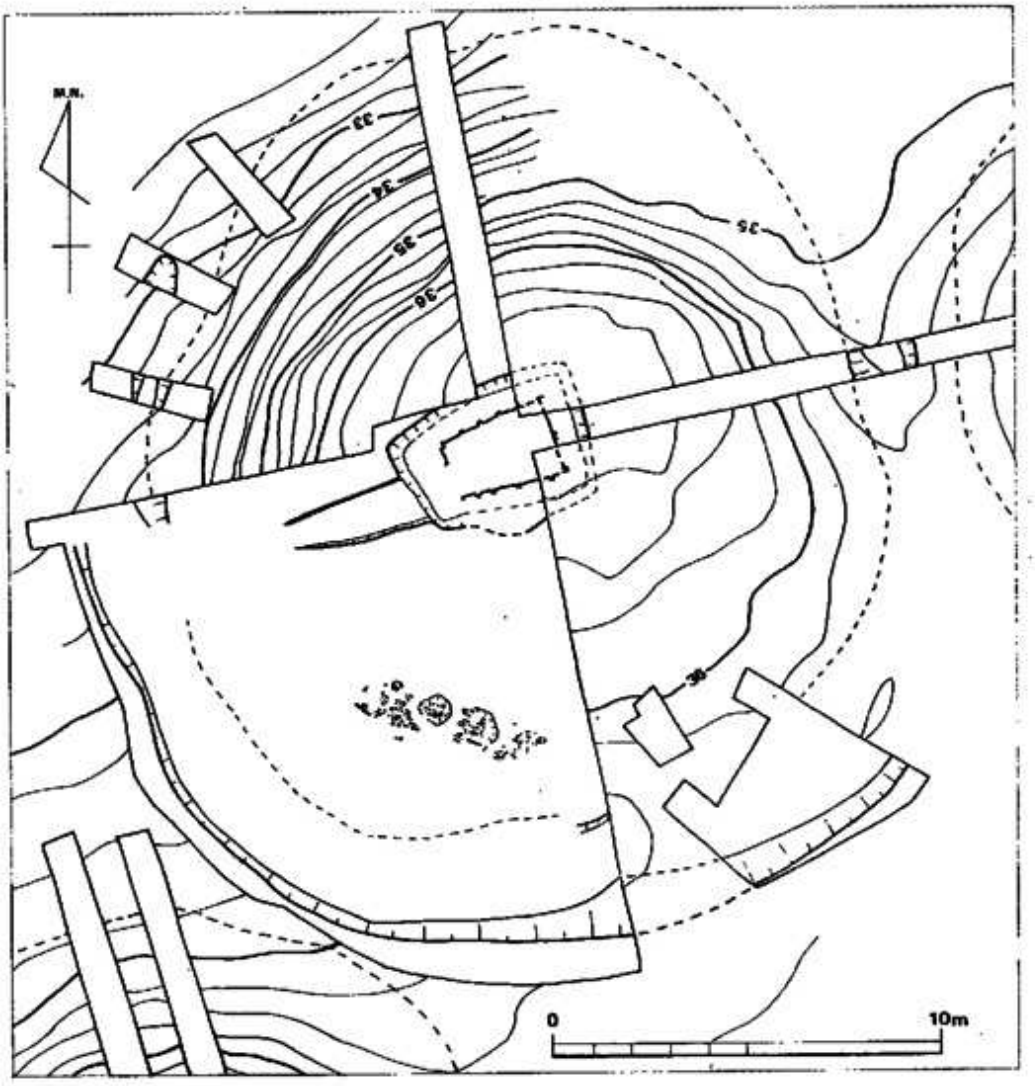
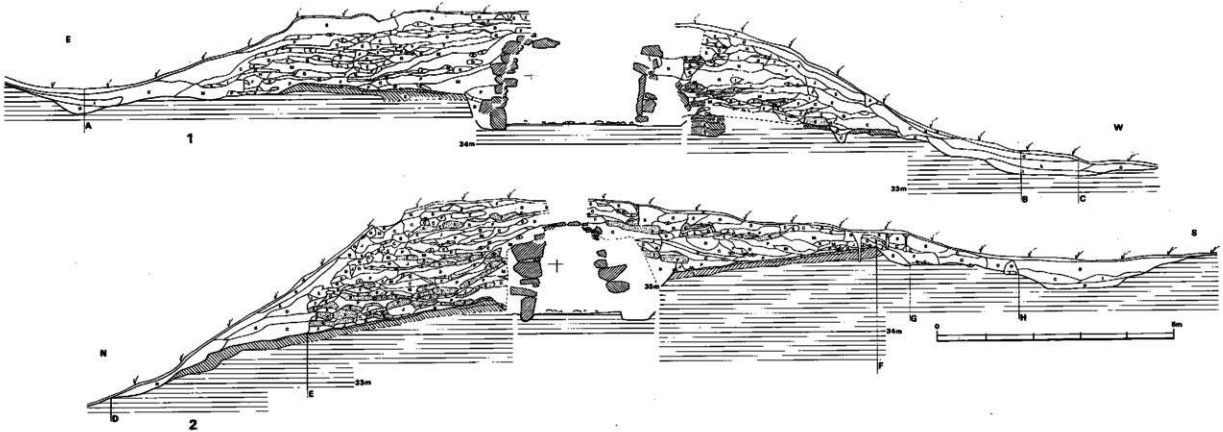


Fig. 10　乙植木2号墳全体図（S＝1：200）

1号墳と同様に尾根筋より少し下った北側斜面に築かれ，みかけの高さは約4*m*もある。築造に際して，石室位置決定後，裾部全周に地割溝を掘り割り，盛土範囲を設定している。地割溝掘削により生じた排土は直ちに盛土就中北側基礎に意識的に多用されている（註1）。盛土作業は石室の構築と平行し，斜面特に北側に入念な配慮が払われ，最も厚い所で約2*m*であ



A　現表土（黒褐色土）
B　混赤褐色土褐色土
C　赤褐色土
D　混明褐色土褐色土
E　褐色土
F　混黒色土暗褐色土
G　混黒色土暗褐色土
H　褐色土（軟）
I　暗褐色土
J　黄褐色
K　地山（赤褐色土）
L　灰暗褐色土
M　明赤褐色土
N　混赤褐色土ブロック暗褐色土
O　黒褐色土
P　混褐色土ブロック赤褐色土
Q　旧表土（黒褐色土）

Fig. 11　乙植木２号墳墳丘断面図（S＝1：80）

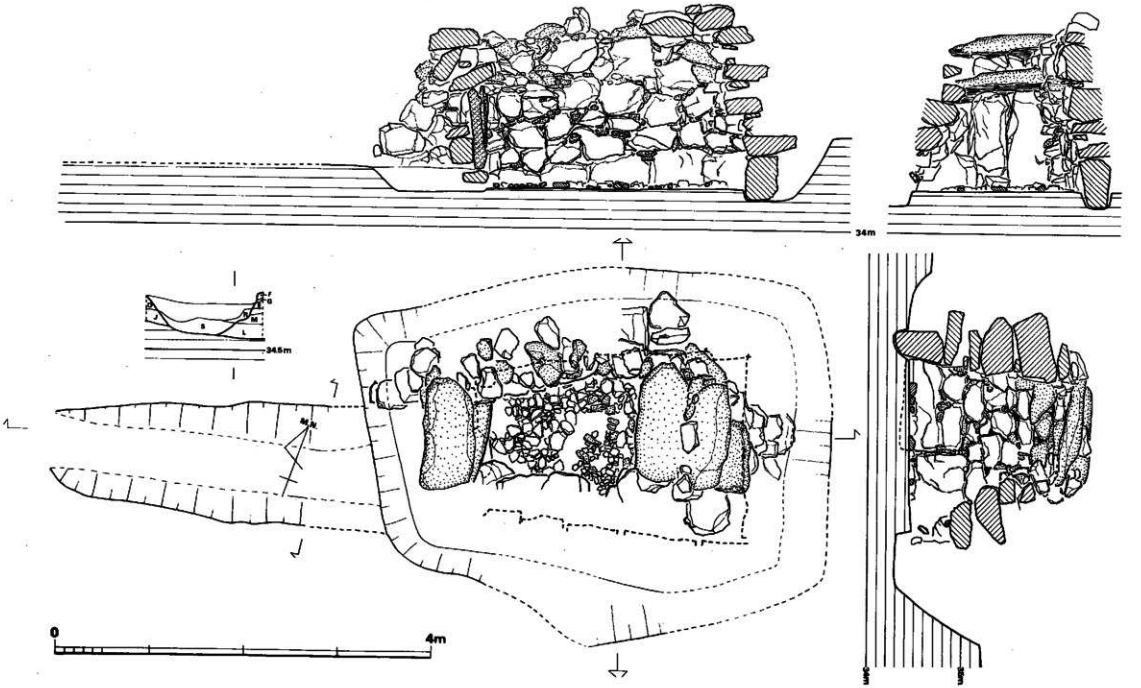


Fig. 12 乙榎木2号墳石室実測図（S＝1：40）

る。北側では石室裏込に先行して予め崩壊防止に必要な土量とひきとが計算されて一次墳丘（E点が北端）が設定され，常に外縁と石室との間がスリ鉢状にくぼむように作業されている。従ってこれより以北は，墳丘規模および外形の調整として盛られている。かかる傾向は，西側でも認められ，既述1号墳のそれと基本的には同一手法である。

墳丘の東限はA点とみられ，西限はB・C点のいづれかであろう。ABは19.9m弱，ACは21.1mの水平距離となる。北限はD点に求められ，南限をH点とすれば，DHは19.3mとなる。ただしDG（約17m）とGHとでは築造時期に明らかな時間差が認められる。後述するように本墳では墳丘中から大量の土器類が出土したが，これらは位置的にはGHの間にあたるのである。つまり，地割時にF点以南が掘り割られ，石室とF点以北の盛土完成後にその南側裾部（G点以南）に土器，工具類が置かれ，この後にこれらを覆う形でGH間の盛り土がなされたとみられるのである。

石　室 (Fig.12)

略南西に開口する単室横穴式石室であるが，盗掘により天井石，右壁横口寄の各過半を失っている。墓壙は地山を浅く穿った4.9m強×4m強の不整長方形プランを呈する。略水平位に仕上げられた壙底をさらに一段掘りこんで腰石を据えている。腰石は最大手で高さ0.7m前後と総じて小ぶりで，立てて用い，奥壁寄により大き目の石を配する点は1号墳と同様であるが，埋めこみ分は少ない。周壁は控えを長くとり，要所に小石を充塡し，除々に内傾させながら積み上げている。内傾度は奥壁及び左側壁が30cm前後であるのに対し，右側壁では80cmにも達し，イビツである（注2）。高さは，左側壁で1.7m前後であるが，右側壁は1.5mと一段低く，従って奥壁寄天井石は水平位にはない。側壁石積の起点は奥壁側にあるが，左側壁の四段目過半を積み上げた時点で所定の位置に袖石が立てられ，これを固定・強化する形で横口寄と羨道側壁とが構築されている。袖石に接する部分は，各石とも側壁面よりも10～20cm程度突出している。床面には礫が敷かれ，長さ2.75m，巾は奥壁部で1.95m，横口部で1.45mと狭まり，羽子板状のプランを呈する。

横口部天井の梱石にあたる部分には，袖石上に板石を置き，この上に数石を積み，さらに板石一枚を平積みしており，通例とは異る手法が採られており，適材の入手難に起因するものと思われる。従って盤石一石を架構する場合に比して当然安定感を欠き，事実板石は水平位を保っていない。両袖間には，厚さ15cm前後の仕切石が置かれ，天井までの高さは85cm，巾は右袖石を欠くので不明であるが，40cm前後と推定される。

羨道部は，長さ1.1m前後の極めて短簡なもので右側壁は全壊している。既述したように袖石方向に重量がかかるように意図された石積であり，天井石は架構されない。床は仕切石上面と略同高。

閉塞に際しては，仕切石上に板石1枚を袖石にもたせかけ，数石をもって裏込としている。

本石室は，古式横穴式石室としての構造的特色を有するが，さらに特異なものとすべきは，石英岩質材の多用である。板状大形材およびパッキング材（Fig.12でドットを付す部分）以外の殆ど全てにこれが使用されており，この結果石室全体が白っぽく異様な感を受けた。県内では他に類例を知らない。

遺物出土状態

石室内

左袖石附近を中心とする一帯から，須恵器（直口壺—TUI，同蓋—TUI…F）片を検出したにとどまる。

石室外（Fig.13）

一部南東におよぶが，南西寄の四半分を中心とする墳丘中から69個体以上の多量の土器と鉄製工具一群が出土した。土器群は，南西側の5×1.6mの範囲に密集状態にあるが，位置的には概ねA～Dの4群に分れる。A・D群は大略平面的な出土状態であるのに対して，B・C群は浅いピット内に堆積した状態にある。後述するように，異る群に属する破片が接合する例もあるが，以下，遺物採取時に設定した群別を使用して述べることとする。

A群

一括状態にあるものはなく，散乱状態にある。D群と共通して土師器は僅少で，須恵器甕（KA3）の破片が大部分を占め，かつ口頸部の殆どが本群に属す。聴胴部（HA2—D）は，D群の口頸部（HA2—K）と接合する。甕（KA5）は，本群にのみしかも口頸部と肩部のごく一部の破片しか採取されていない。

B群

土師器を主体とし，須恵器KA3の破片も多い。摺鉢状のピットの壁底に土師器杯群（H15～26）を一括して重ね，この周囲及び上部にKA3片，有蓋台付壺の脚・頸部片（DT1—A・K）等を置く。上面の土師器杯群は，いづれも内面を上にしており，H10・11は重ねられ，H12～14は並置されている。規則性を有するこれら土師器の出土状態に対して須恵器のそれは，全くの散乱状態にある。なお，ピットの上・下部には間層は認められず，これはC群とも共通する。

C群

土師器杯・須恵器甕を中心とし，KA3の破片を除けばいづれも略原位置を保つ一括状態にある点が特色である。まずピットの孔底に土師器杯（H4・6）を置き，これらに被せるように甕（KA2）を重ねており，KA2の周囲にはKA3の破片が差しこまれたような状態にある。上面石室寄には，土師器杯・須恵器杯蓋・同高杯が相接するように並置され，これらのうちH9と須恵器杯蓋（TF4）の2点は伏せられている。KA1・2は，いづれも「赤焼き」と呼ばれる（註3）もので，本群では純正な須恵器は杯と高杯に限られる点，意識的な組合と

Fig. 13 乙植木2号墳墳丘南西側土器出土状態（S＝1：20）

思われる。

KA2の前面，一段低い位置から，鉄製工具6点が一括出土した。鑿形鉄器（T7），鎌（T6），鉈（T5），鑿（T2），不明鉄器（T3）が横方向に重ねられ，鎌の上には更に手斧鍬（T1）が置かれている。柄が着装されているのはT·2のみである。

D群

全体として散乱状態にあるとしてよく，僅かに杯蓋（TF1）が伏せられ，同3・5・6が蓋内面を表にして積み重ねられて一括状態にあったに過ぎない。土師器は，B・C群におけるあり方とは異なり，3個体と少なく，原位置を保つのはHIのみである。KA3の破片は皆無で，小形器種のみに限られる。

群毎の出土土器の器種は

A群

須恵器	甕（HA2—D）
	甕（KA3—K・S・D，KA4—K・S）
	台付有蓋壺（DT1—K・D）
土師器	杯（2個体以上）
	壺（H18—K）

B群

須恵器	甕（KA3）
	有蓋台付壺（DT1—A・K）
「赤焼き」	甕（KA2—K）
土師器	杯（H10～16，18～26）
	壺（H17）

C群

須恵器	杯蓋（TF4）
	杯身（TM4）
	高杯（TT4）
	壺　（TU4）
	甕　（KA3）
「赤焼き」	甕（KA1・2）
土師器	杯（H4～9）

D群

須恵器	杯蓋（TF1・2・3・5・6）
	杯身（TM1・2・3・5）

高杯（TT1～3）
甕（HA1－D，2－K）
壺（TU3－D）
脚付有蓋直口壺（KT1－D）
土師器　杯（H1～3）

注
- A－台あるいは脚部
- S－肩部
- D－胴部
- K－口頸部

である。

以上を要約すれば，まず土師器の出土状態は量的にはB・C2群に集中し，しかも一部を除けば同一個体の破片は略一括状態にあり，置かれた原位置を保つ。また器種は，杯と壺とに限定され，前者が大多数を占める。一方須恵器は，甕（KA3）・甕（HA2）の破片接合状況で知られるように概して雑然とした散乱状態にあり，一括出土は，TF1・4，TM3・5・6，TT4に限られる。器種は極めて豊富であるが，A・B群は甕・壺等の中・大形容器を中心として飲食器を含まず，C・D群は飲食器を主体とし，容器としては前者が壺1個，後者が同2個を伴うのみという差異がある。「赤焼き」の甕2個体は，土師器と同軌の出土状態を示し，また工具類の出土をも勘案すると，メインをC群と想定できる。

上記の他に，石室閉塞石外側の堆積土中からKA3の頸部片1が，また南トレンチをはさんだ南東側墳丘からは，鈴付高杯（TT5），二重甕？（HA1），壺（TU2）が出土している。後者では，特殊な器種を含み注目されるが，小トレンチを設定したにとどまった。ただいづれも数片づつを採取し得たにすぎず，前述の南西側に比すれば密度はずっと劣り，埋置とするよりも破片が投棄されたとの感が強い。

遺物

石室内

有蓋直口壺	1	

石室外

工具	鎌	1	鉋	1
	鑿	1	不明鉄器	1
	鑿形鉄器	1	手斧鍬	1
土器	杯蓋（TF）		9＋α（「赤焼き」1）	
	杯身（TM）		11	
	高杯（TT）		6（鈴付高杯1）	

有台蓋付壺（DT）	1	
有蓋脚付短頸壺（KT）	1	
壺（TU）	4	
蓋（FU）	1	（以上須恵器）
甕（KA）	4（「赤焼き」2）	
杯（H）	22＋α	
壺（H）	4	（以上土師器）

工具（PL. 16, Fig.14）

手斧鍬（T 1）

鋳造品。全長9.6cm，刃部最大巾5.6cm。縦断面は二等辺三角形。錆化著しく進行。袋部は2.7×3.9cmの長円形で，柄は装着されていない。

鑿（T 2）

茎先端を欠き，現存長15.4cm。身長13.8cm。巾は5mmと一定し，厚さは先端近くが3mm，基部は少しく厚味を帯びて4.5mmとなる。木柄の一部が現存する。

不明鉄器（T 3）

一端を欠き現存長22.3cm。巾は1cmで略一定であるが，欠損部は僅かに広がる傾向にある。断面は長方形で厚さ5mm。刃部は現存部分には認められず，欠損部が僅かに尖る傾向にあるようであるが確言できない。

鉋（T 5）

完存し，全長16.1cm。穂先は強く反り，裏面は浅くすかれている。巾は，刃部が最も広く9mm，以下漸次狭まり茎先端では7mmとなる。側面の一部に木質が遺存する。

鎌（T 6）

全長21.6cmで略完存。先端は鈎形に曲り，巾は3.3cm前後で，基部近くは稍広く3.6cm。棟厚は3.5mm前後で断面は略二等辺三角形。基部は直角に折り曲げられて8mmの立ち上りとなる。柄の装着はなく，研ぎ減りも認められず，新品あるいは同様品と思われる。

鑿形鉄器（T 7）

全長22.6cmの完形品で，一見矛を思わせるものがある。頭部は中実で径2.9cmの円形断面。先端近くは長方形断面となり，刃先は二等辺三角形に近い。

須恵器

杯蓋（Fig.15）

9個体以上で，3類となる。Ⅰ類は，稜がシャープで，口縁は垂直に近く，径は12cm強。Ⅱ類は，稜が稍鈍く，口縁は少しく外開きとなり，径も13cm前後とひとまわり大きい。Ⅲ類は，明瞭な稜はなく，焼成もⅠ・Ⅱ類が堅緻であるのに比して極めて甘い。また，Ⅰ類とⅡ類とで

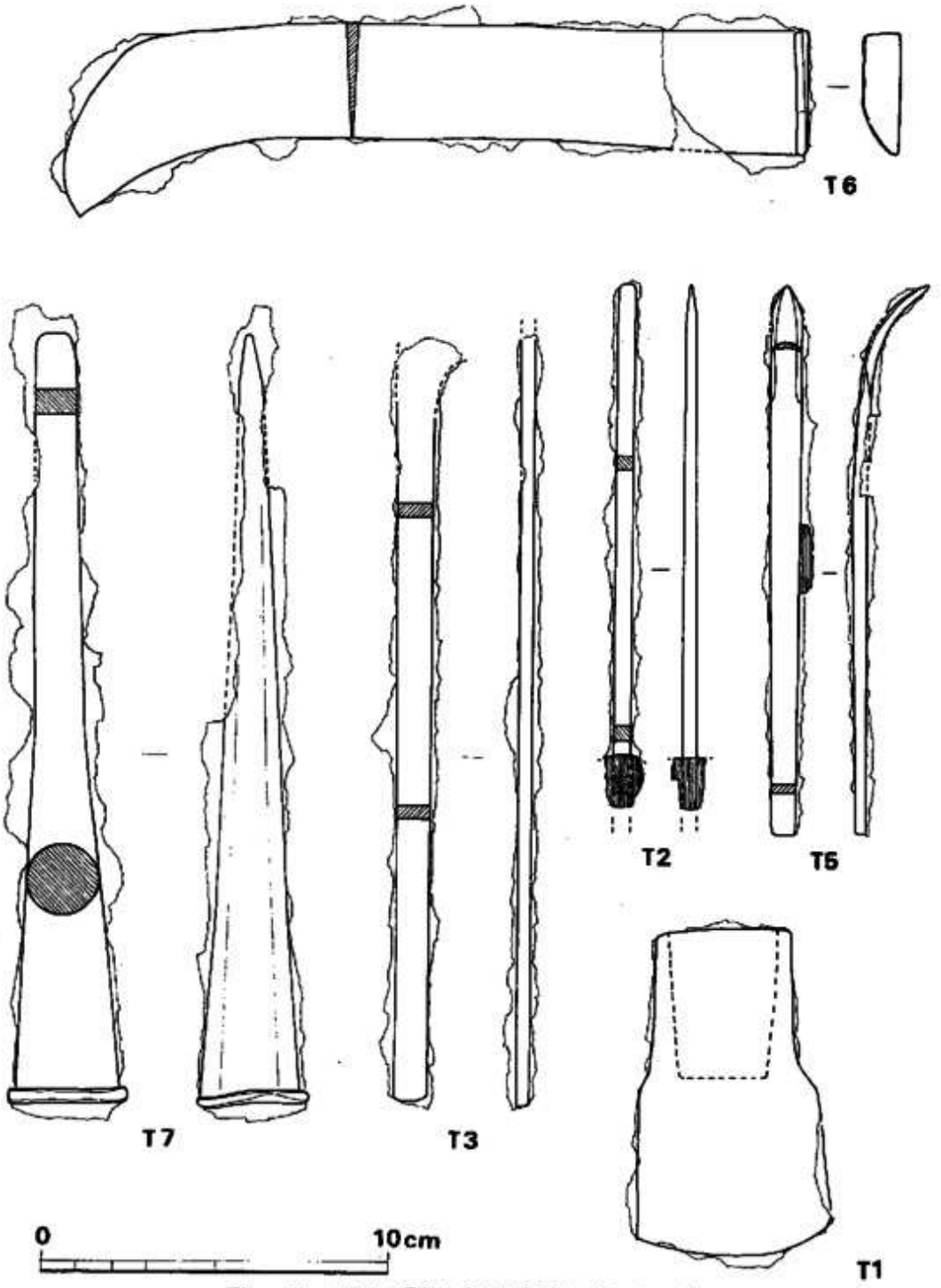


Fig. 14　乙植木2号墳出土工具実測図（S＝1：2）

は天井部の篦削りにも若干の差異がある。ロクロの回転方向は逆まわりであり，杯身・高杯と共通する。なおいづれもが，セットなるべき杯身に被せた状態で焼成されている。

Ⅰ類（TF1・2・6・7・8）

1は，略完存する。口径12.3cm，器高4.7cm。稜から頂部にかけて広く篦削りを施し，本類の特徴の一つとなっている。ただし，篦削りによる条痕の巾はⅡ類の3・5の半分程で，これは6とも共通する。2は，復元口径12cm，器高4.4cm。稜はシャープ。口縁から稜にいたる各所に焼きブクレがあり，内外面ともにクレーター状に弾く（註4）。6は，口径12cm，器高4.5cm。焼成良好で灰青色を呈し，仕上りは良い。頂部に一条の篦記号を，稜直上付近に5条の平行する短沈線がある。

Ⅱ類（TF3・5・9）

3は略完存。口径12.9cm，器高4.9cm。口唇部は弾かれてクレーター状を呈す。稜はつくが稍鈍い。天井部の篦削りは2回転程度で，ザックリ行なっている。灰青色を呈し，焼きムラがない。5は，復元口径13cm，器高5cm。肩から頂部にかけて，凹凸が目立つ。頂部に篦記号あり。

Ⅲ類（TF4）

略完形。本器のみが稜を持たず，灰白色を呈し，焼成また甚だ甘い。口縁は稍内傾気味となり，最大径12.2cm，器高4.6cm。

杯身（Fig. 15）

11個体以上で，形態では5類に分れる。Ⅰ・Ⅱ類共に口唇・蓋受け部がシャープであるが，Ⅰ類の立ち上りの方が強い。Ⅲ類は前2者同様シャープであるが，立ち上り基部に差がある。Ⅳ・Ⅴ類は稍鈍くなり，特にⅤ類が著しい。底部の篦削りは，蓋のⅠ類に近いものに3～5が，Ⅱ類に近いものに8があるが，形態上では各タイプにまたがり，蓋における程には判然としない。形態と口径とには明確な関連は認められず，1・3・4がひとまわり大きく，他は12cm強である。

Ⅰ類（TM1・7）

1は復元最大径12.6cm，器高4.8cm。蓋受部は4と同様平坦に近いと思われる。器表蓋受部から体部にかけて全面クレーター状となり，一部内面にも認められる。底部に二条の沈線からなる篦記号がある。7は，最大径12.2cm，器高4.8cmで稍歪み，シャープさはない。内面は稍弾く。

Ⅱ類（TM4・6・10）

4は，歪んでおり，最大径は12.5cm，器高4.9cm。底部を中心として各所に焼きブクレを生じている。蓋受部は平坦。シャープ。篦削りの具合は蓋杯Ⅰ類に近い。底部に重ね焼の際使用したワラの痕跡が残る。6は，最大径12.5cm，器高5.4cm。稍歪む。シャープな造りで，蓋受

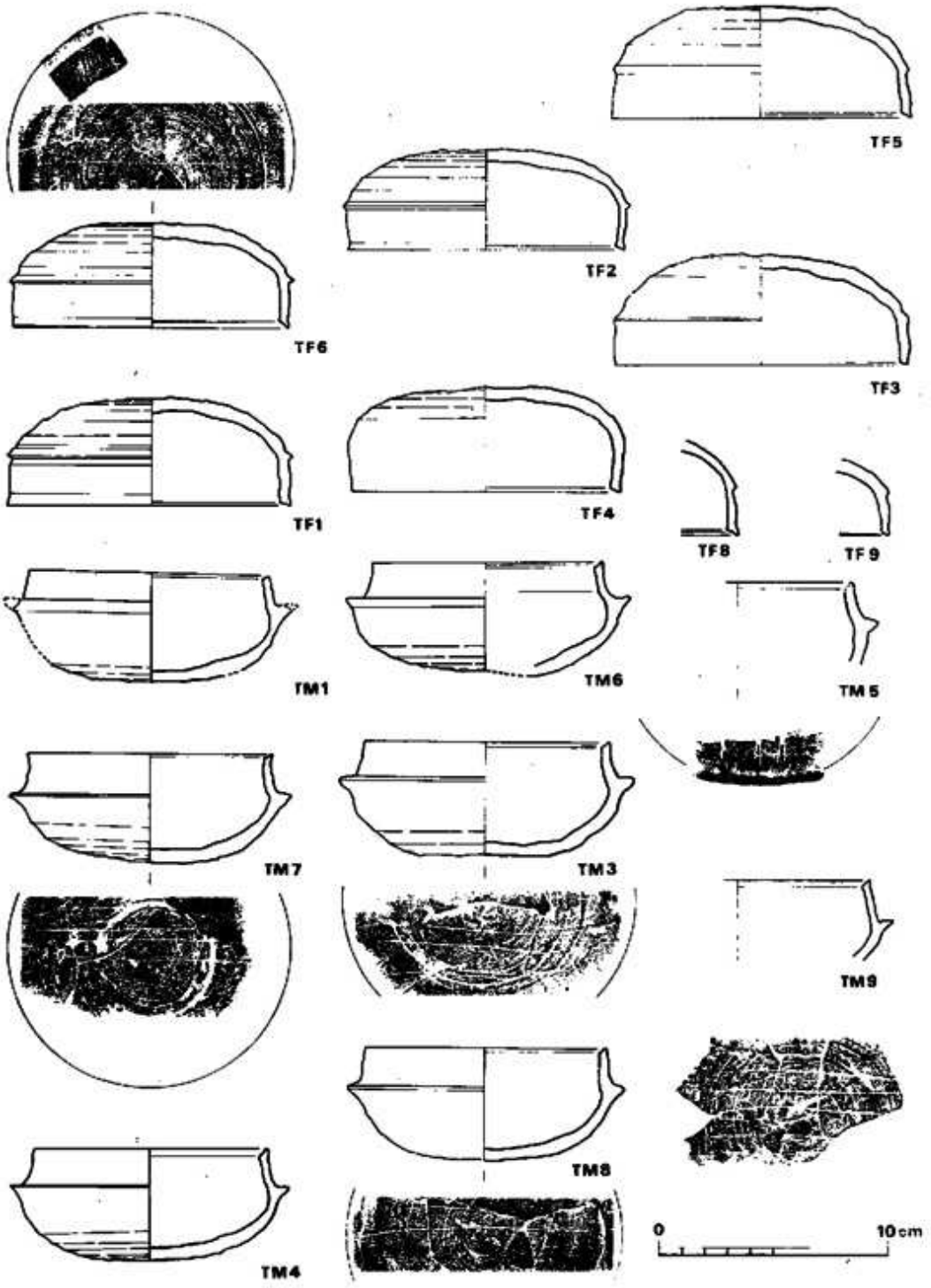


Fig. 15　乙植木2号墳出土須恵器実測図1（S＝1：3）

部は内側が稍低くなる。底部の篦削りは丁寧で，4～5回転させている。底部内面に穿孔した際の剝離痕と思われるものがあり，とすれば本墳出土土器中で唯一例となる。

Ⅲ類（TM3・8・11）

3は，復元径12.8cm，同器高5cm。蓋受部は平坦。篦削りは体部下半までで，蓋に比して狭く，高杯杯部のそれに近い。底面に篦記号がある。 8は，復元最大径12.1cm，器高4.9cm。底部に篦記号を付す。

Ⅳ類（TM5）

蓋受部から体部にかけての一部を残すのみ。復元口径12.3cm。稍厚手で，立ち上りから受け部はなだらかで，他例とは異なり明確な稜線はつかない。篦記号の一端をとどめている。

Ⅴ類（TM9）

小破片。立上り基部が沈線状となる。シャープであるが，稍焼成が甘い。

高杯（Fig. 16，TT1～6）

1は杯部を欠く。底径9.9cm。透しは4ケ所，等間隔。 成形・調整・焼成いづれも見事でシャープである。透しのうち1ケ所は，篦削りの際生じた器表へのメクレを削り落し，調整に意を用いている。2は，杯部の¾を欠く。脚の形状は，杯部からとは異る印象を受ける。復元口径14.9cm，底径9.5cm，器高11cm。 杯部の中程にシャープな稜がつき，上半に波状文がつけられ，下半は篦削り。口唇には，浅い沈線がまわる。 脚部は稍歪み，透しはない。 灰青色を呈し，焼成は良好。4は，C群から出土した唯一例。口縁の一部を欠くのみで，略完存する。口縁が波打ち，脚部との接合も少しく狂うが優品に属する。口径15.7cm前後，底径10.5cm，器高11.8cm。杯部は深さ5.4cmあり，上方寄に明確な稜がつき，この直下に波状文をつける。 施文後，体部下半は篦削り，上半は指ナデにより調整。透しは三ケ所で，灰青色を呈する。5は，南東側墳丘から出土。脚部の⅓程度が現存するのみ。脚内側が円板により密閉され，鈴付高杯の可能性が強い。復元底径12.8cmと大形で，脚高6.8cm。透しは3ケ所。 6は，杯部の一部のみ。鋭い稜が2段にわたって巡らされ，波状文もシャープである。焼成堅緻。4と略同大とみられる優品である。

壺（Fig. 16，HA1～5）

1は二重壺と思われ，TT5同様南東側墳丘から出土し，胴部の一部を残すのみ。復元最大径11.9cm。透しは，肩部の沈線をはさんで上下に各8ケ所あり，長台形。肩以上は黄灰青色，以下は灰青色を呈す。焼成，胎土ともに良好。2は，大部分の破片はA群から，口頸部の一部がD群から採取されている。口径及び胴部最大径はともに10.4cm，器高またこれに近く10.2cm，頸高3.3cm。 体部下半は静止状態で篦削りが施され，3ケ所に小粘土塊が融着しており，緊詰法を暗示している。胎土に細粒を多く含み，自然釉がかかり，黒青色を呈する部分が多い点は，3・4と相通ずる。歪みを生じてはいるが，薄手の優品である。3の属する群は現認さ

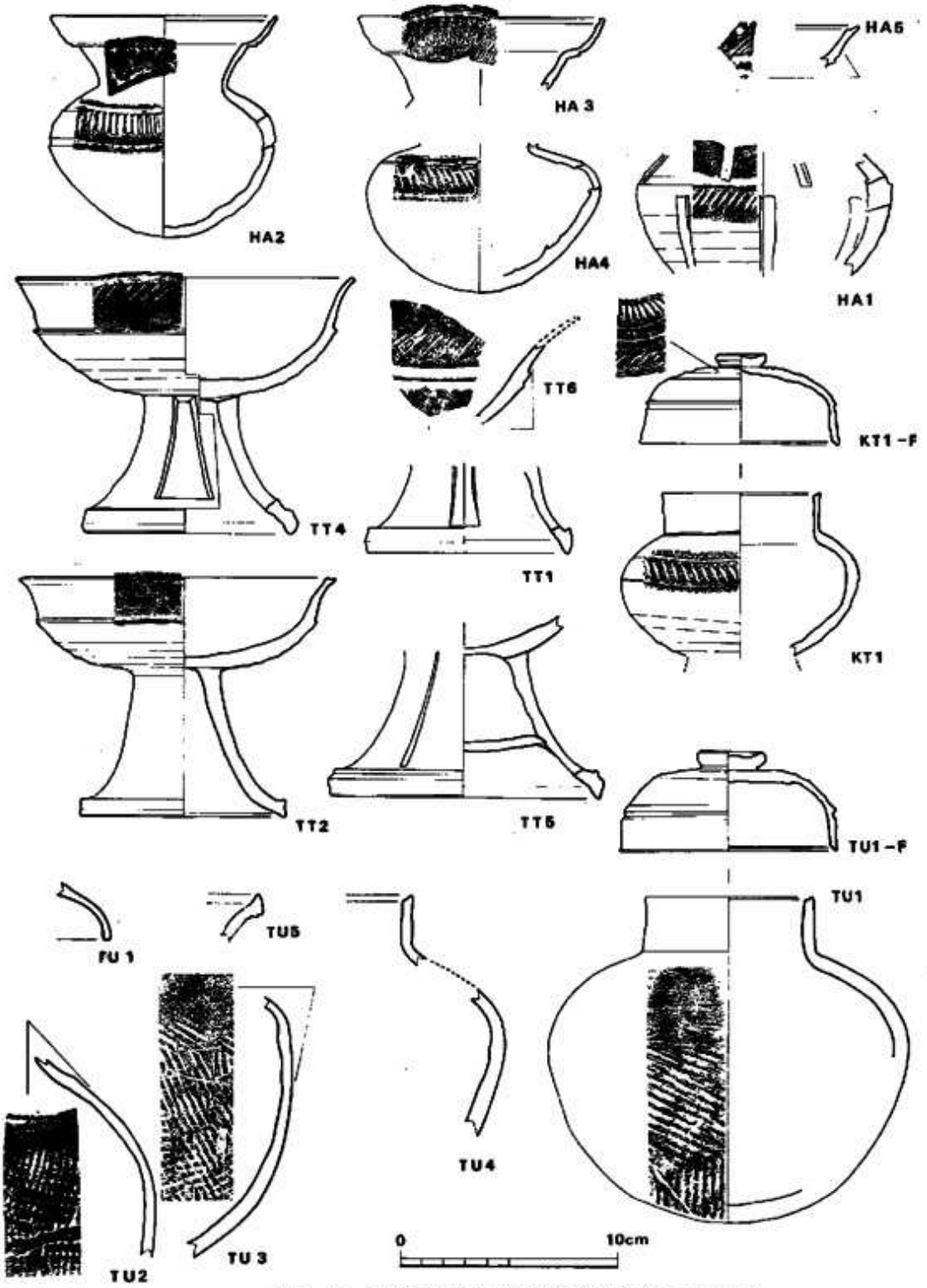


Fig. 16　乙植木2号墳出土須恵器実測図2（S＝1：3）

れていない。次に述べる4と酷似するが，別個体である。体部を欠き，口径10.8cm，頸高3.8cm。口唇内面の刳りは沈線状となり，2とは異なる。胎土への細粒の混入が著しく，内面はクレーター状となる。4は，胴部のみ。本器も所属群は不明である。胴部最大径10.7cm，胴高6.8cmであるが，復元頸径は5.3cmで，3よりひとまわり小形である。体部下半を叩き締めた後，肩部までカキ目調整を施し，2とは手法上で相違がある。文様帯の一部に，他の壺の口縁の一部が融着している。

有蓋脚付短頸壺（KT1，KT1－F）

蓋の所属群は不明。稍歪み，口径約9.3cm，器高4.1cm。2段にわたり櫛歯文を巡らす。口唇内面は壺部と同様に薄く削がれている。内面肩から頂部にかけては篦によるナデ調整。壺は蓋を被せて焼成されており，口径7.3cm，胴部最大10.9cm，高さ7.6cmで，脚部を欠く。体部下半は篦削り。両者とも細粒を多く含み，焼成は堅緻であるが，器肌はザラつく。

有蓋直口壺（Fig. 16，TU1，TU1－F，TU4）

1はともに略完存し，石室内から出土。蓋は口径10cm，器高4.6cmで，稍ひずむ。口唇部はシャープ。壺は，口径7.8cm，胴部最大径16.6cm，器高15.1cm。口唇内側は削がれているが鈍い。体部を叩き締めた後過半にナデ調整を施すが，底部は部分的に縦ナデを行なうのみ。底部を厚くとり，成形，調整ともに見事であり，安定した感を受ける。蓋を被せての焼成によるが，底部のサポート位置は心より少しく外れる。暗灰青色を呈する。4は，1と酷似するが，口頸部と肩の一部を残すのみである，口唇部の刳りは明瞭ではない。

壺（Fig. 16，TU2・3）

蓋の有無は不明。2は，薄手で胎土も良好であるが焼成度は稍甘い。3の肩の張り具合は，1・2・4とは異なる。体部下半に窯詰時に用いたワラの痕跡を残す。焼成は頗る堅緻。

蓋（Fig. 16，FU1）

所属群は不明。外径は7.6cm前後とみられDT1の蓋とはなり得ない。内外面は共に黒色を呈し，温度が上り過ぎている。

有蓋台付壺（Fig. 17，DT1）

脚端が歪み，壺部と台部とが正接していないが，それがたくまぬ良さを生みだしている。蓋は採取されていない。総高34cm弱。壺部口径9.6cm，頸径8.5cm，頸高4.4cmで，蓋受部は稍下向き。胴部最大径19.8cm，壺部高は20.7cm。頸部の蓋受以下に波状文，肩部には浅い沈線をはさんで斜行櫛歯文と波状文とを付す。波状文の振幅は，肩部と頸部とでは異なる。底部近くは，叩いた後に篦ナデを施す。底部内面は，指・工具により強くナデられて凹凸著しく，以上は指ナデ調整により綺麗な仕上りとなっている。脚部底径は18.6cmで，沈線により三段に分けられ，各5個の三角形透しがあるが等間隔ではない。脚端内側の一部には厚さを調整した粘土の貼付がみられる。胎土に細粒を多く含み，肩から脚部上半は灰青色を呈して器肌も滑かであ

るが，以外では焼ブクレとクレーターが散見されてザラつく。

甕（Fig. 18～20，KA1～4）

4個体。1・2は「赤焼き」。1～3は，破片の大部分が採取されているのに対し，4は口縁と肩部のごく一部しか採取されていない。

3は，復元総高113cmに達する超大甕であるが，底部で15mm，肩から体部にかけては僅か3mmの厚さに過ぎず極めて薄手であり，成形技能の確かさを偲ばせる。口径54.3cm，頸径40cm弱，頸高16cm，復元胴部最大径86cm強。頸部には2段の沈線と波状文とをめぐらす。4は，復元口径16cm，同頸高4.7cm。頸部は直立し，口唇内面は削がれる。器表の叩き板痕は顕著で，内面はナデられるが青海波文をとどめる。胎土良好で，焼成堅緻。一部に自然釉がかかる。

1・2は，いずれも白灰色ないしは黄灰色を呈し，焼成は極めて軟質で，接合に困難があり全形を復元するには至っていない。成形は，表裏に工具痕をとどめて須恵器のそれと変らない。1は，口径20.8cm，頸径15.6cm，頸高3.7cmで，頸部には波状文をめぐらす。

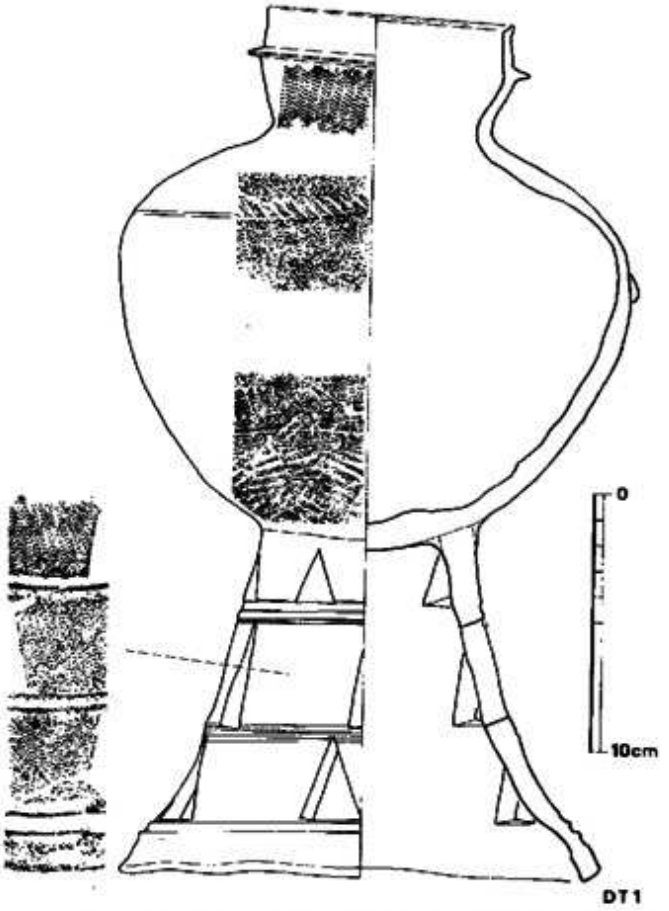


Fig. 17　乙植木2号墳出土須恵器実測図3（S＝1：3）

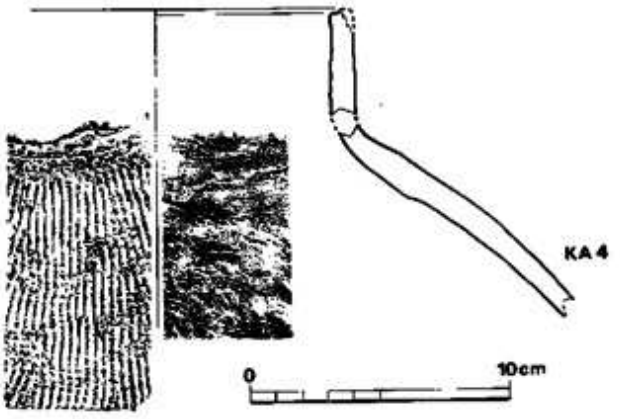


Fig. 18　乙植木2号墳出土須恵器実測図4（S＝1：3）

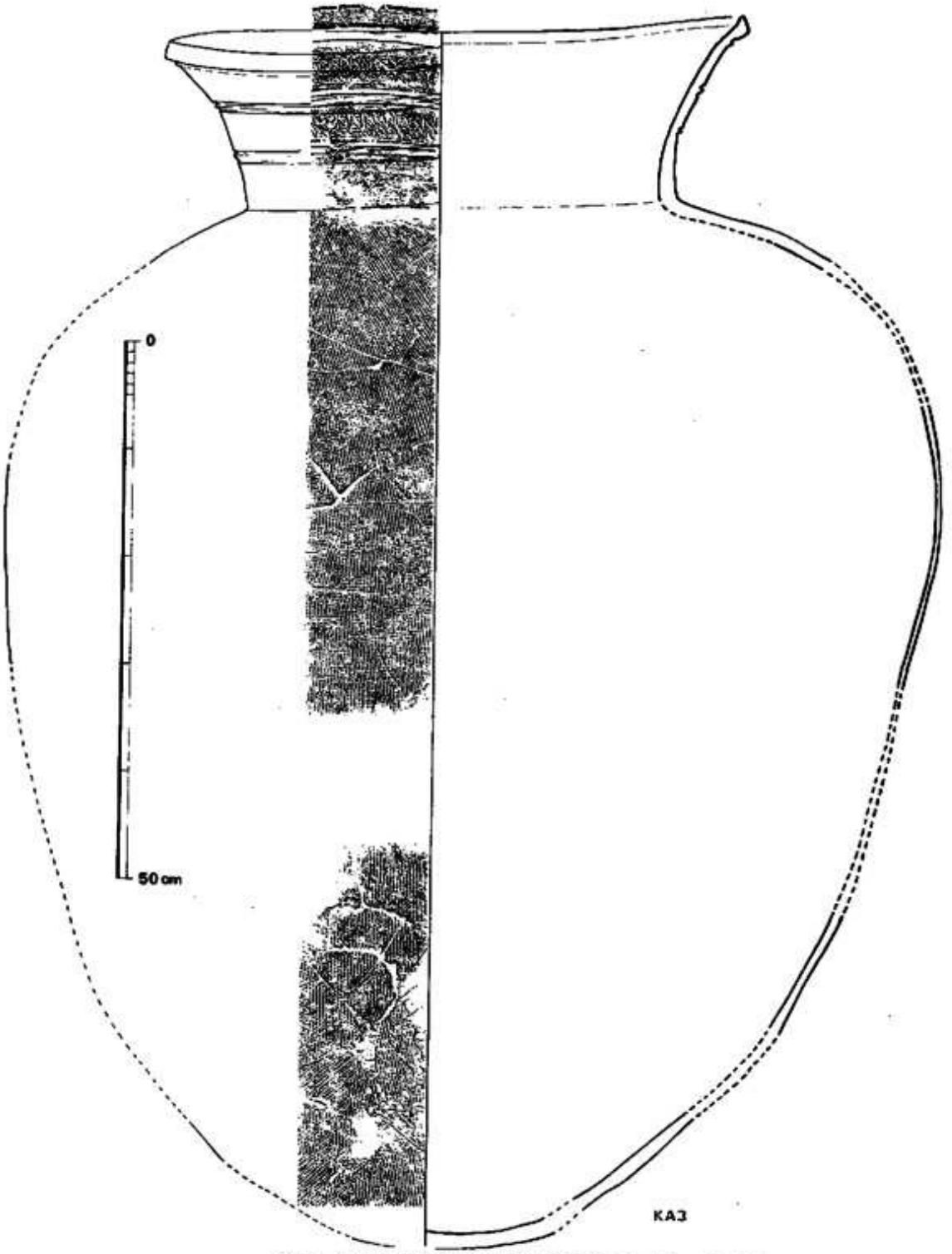


Fig. 19 乙植木2号墳出土須恵器実測図5（S＝1：6）

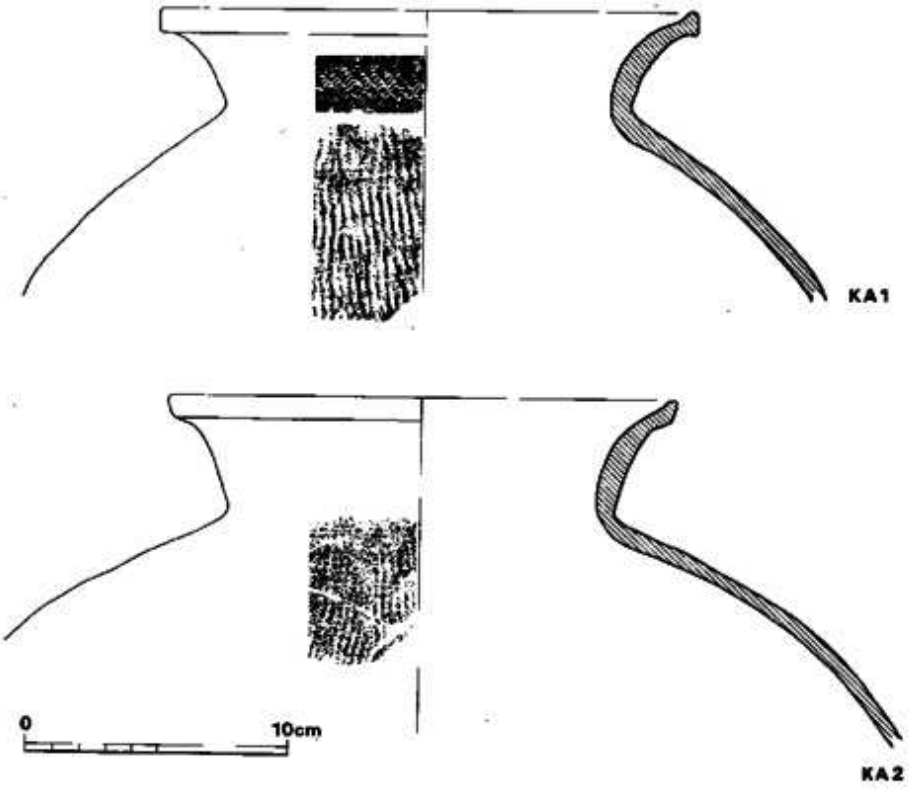


Fig. 20 乙植木2号墳出土「赤焼き」の土器実測図（S＝1：3）

この波状文はＤＴ１のそれに酷似する。２は，口径19.6cm，頸径14.8cm，頸高4.4cm。頸部への加飾はない。

上師器（Fig.21）

26個体が確認されており，当初は30個を超えたと推定される。器種は，杯が大多数を占め，少数の壺形土器がこれに加わる程度で，須恵器に比して貧弱といえる。杯は形態上３類に分けられ，Ⅰ類は，口縁部が外反し，口径と胴部最大径とが略同じ。Ⅱ類は，Ⅰ類と同様に口縁部は外反するが，いったんすぼまっており，胴部最大径が口径を上まわる。Ⅲ類は，口縁部が内反する。Ⅱ類は深く，Ⅰ・Ⅲ類は略同大であるが後者が稍大きく深い傾向にある。また，Ⅰ類とⅡ類とでは，口縁部の成形・調整上でも差異がある。Ⅰ類は各群にわたるがＣ・Ｄ群に多く，Ⅱ類はＢ群にのみ，Ⅲ類はＢ・Ｃ・Ｄの３群にわたるがＢ群に特に多い。Ⅰ・Ⅲ類は略同数か。

Ⅰ類（Ｈ１・４～６・９・13）

１の器高は6.5cm。４は，復元口径13cm，器高６cm。底部近くは黒変。底部は荒く箆削りさ

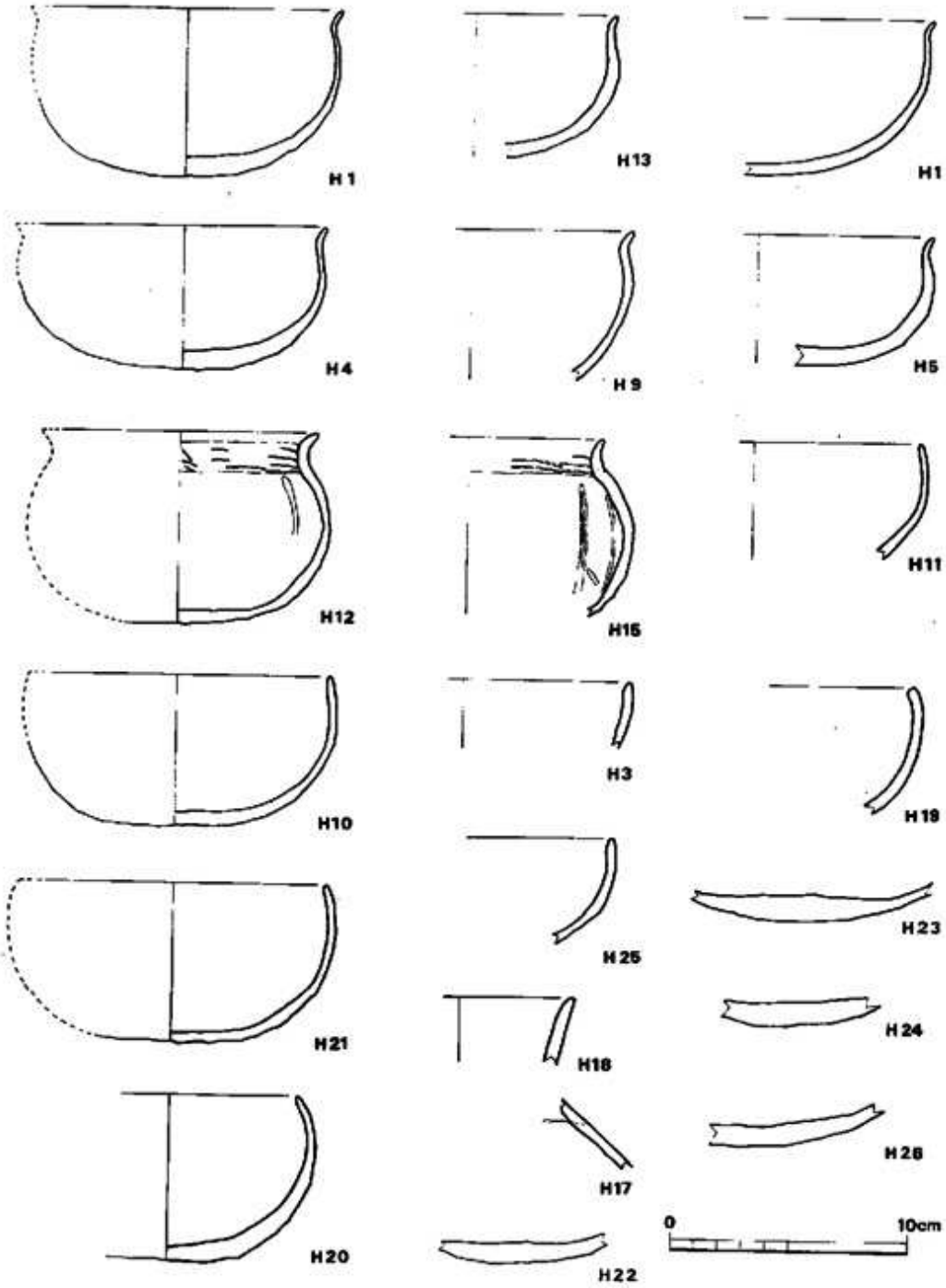


Fig. 21 乙植木2号墳出土土師器実測図（S＝1：3）

れ，体部上半から口縁にかけては篦による丁寧なナデ調整が施され，器肌は光沢を有する美しいものであるが，焼成が甘いため現状は部分的にその俤を留めるに過ぎず，これは本墳出土の全ての土師器に共通する。5は，復元口径14.6cm，同器高5.5cm。内面の器肌は比較的良く残り，丁寧な仕上げが認められる。6は，復元口径13cm，器高7.1cm。底部の黒変は著しい。他の土師器の大多数が赤褐色を呈するのに対して，本器は黄褐色の器肌である。9の復元口径は13.6cm。13は，復元口径12cm，器高6.1cm。赤褐色を呈し，器肌をよく留めている。底部から体部上半にかけての篦によるナデ調整は内外とも極めて緻密に行なわれている。

Ⅱ類（H12・15）

12は，復元口径11.6cm，同最大径12.7cm，同器高8.1cm。体部下半から底部にかけては稍荒く篦削りされ，以上は篦によるナデ調整。内面には縦方向の篦によるナデも施される。口縁部は，指頭と内側からの篦による抑えとを併用して外反させており，15とも共通する。15は，復元口径11.3cm。成形・調整は12と同様であるが，口径内側の篦による抑えはより整然と行なわれている。

Ⅲ類（H3・10・11・19～21）

10は，復元最大径13.2cm，器高6.5cm。本器も6と同様黄褐色を呈する。20は，復元最大径12.4cm，器高7cm。体部下半から底部にかけての器肉が他に比して厚手となる。底部は荒く，以上は稍丁寧に篦を用いて，ナデかつ削る。一部に調整し残しによる凹凸がある。21は，復元最大径13.7cm，器高6.6cm。底部は荒く篦削りされ，以上は篦によるナデ調整が施され，仕上りは良い。底部は黒変する。

壺（H17・18・22～26）

18は，口縁の一部のみ。復元口径9.6cm。篦ナデは丁寧に行なわれ，光沢がある。

H22～24・26は，1cm前後の厚さがあり，杯に比して内外の調整は粗雑であり，壺等の底部と思われる。これらの胴・体部片は採取されていない。

4.　乙植木3号墳

墳　丘（Fig.3・22・23）

尾根筋に占地し発掘前の見かけの規模は，19×16mの長円形を呈し，墳丘北半の遺存度が良好と思われた。盛土に先行して，裾部の表土除去と削り出しが行なわれたが，後者の東側のCD間を除けば顕著ではない。

盛土手法は2号墳のそれと基本的には同一で，東側を例にとれば石室の裏込め，C点を東端

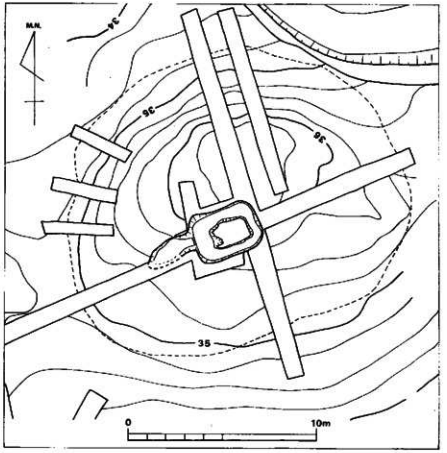


Fig. 22 乙植木3号墳全体図（S＝1：200）

A 現表土（黒褐色土）
B 暗褐色土（下部に旧表の黒色土を含む）
B′ 暗褐色土（上部に旧表の黒色土を含む）
C 褐色土（下部に旧表の黒色土を含む）
D 褐色土
E 暗褐色土
F 黄褐色土
G 暗茶褐色土
H 黒褐色土
I 暗赤褐色砂粒状土
J 赤褐色土
K 淡黄色粘質土赤褐色土
L 茶褐色土
M 黄褐色砂粒状土
O 旧表（黒色土）
P 地山（赤褐色土）

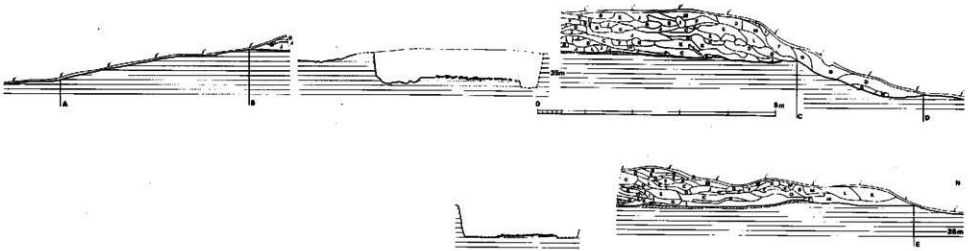


Fig. 23 乙植木3号墳墳丘断面図（S＝1：80）

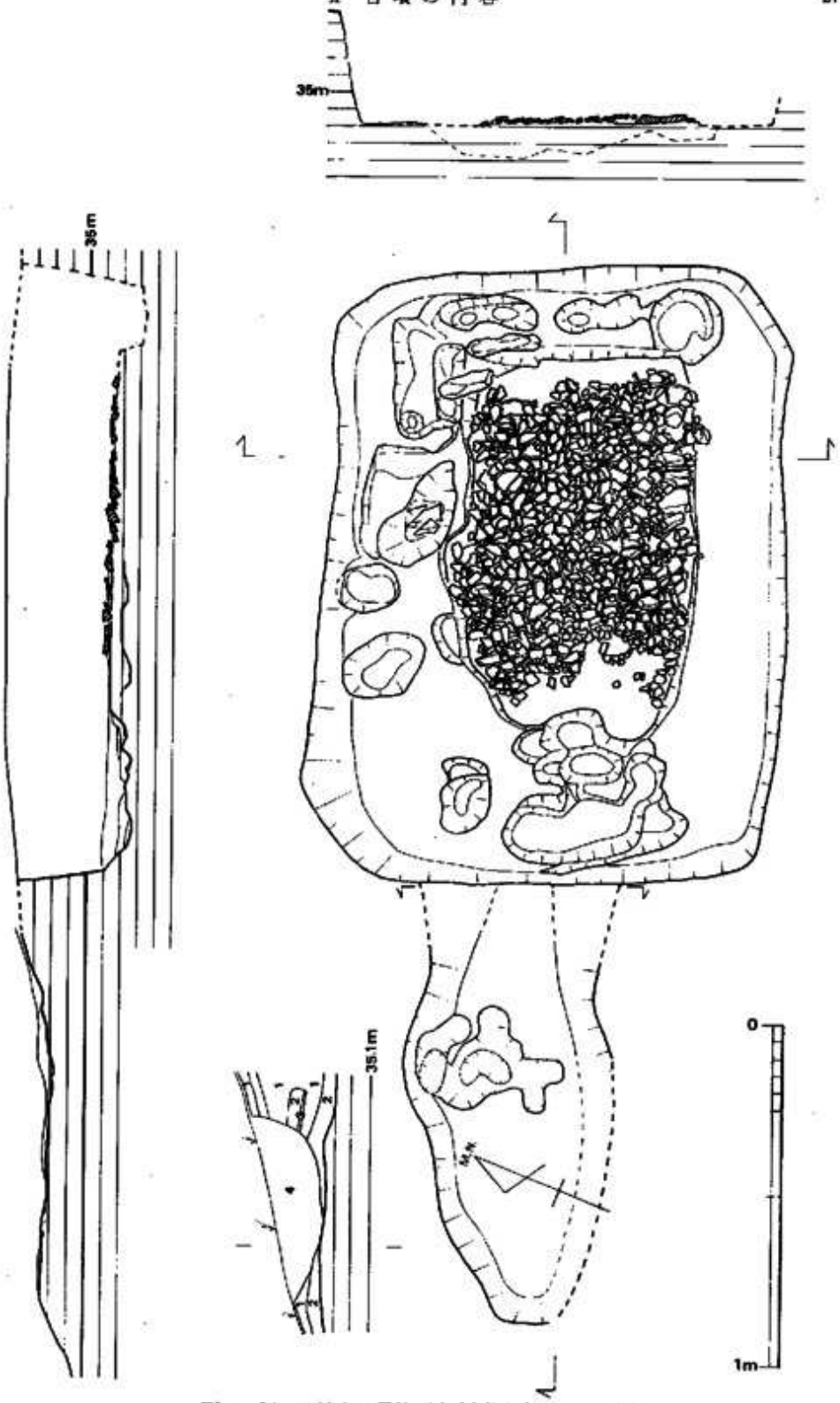


Fig. 24 乙植木3号墳石室実測図（S＝1：40）

とするカルデラの築成，これらの間の充塡を経て，墳丘外観を整えるためにＣＤ間に盛土するという工程である。北側からの見かけの高さは約1.5*m*で，このうち盛土分は１*m*である。墳丘の東限はＤであるが，西限はＡ・Ｂの二通りが考えられ，ＡＤは18.4*m*弱，ＢＤは12.4*m*となり，ここではＡＤをとる。北限はＥとみられるが，南限は明らかではない。因みに，石室中軸からＥまでは8.3*m*である。

石　室 (Fig.24)

破壊を受け，徹底的に石材が搬出されており遺存するのは床石のみであるが，略南西に向って開口する単室横穴式石室とみられる。墓壙は地山に0.6*m*程の深さに穿たれており，上端で長さ約3.5*m*，巾約2.7*m*の不整長方形プランであるが，１・２号墳のそれらに比すれば整斉な感を受ける。２号墳石室と同様に腰石の埋めこみは浅く，従って裾付穴による復元は難しい。床石は完存せず，現存最大巾1.5*m*強，同長さ２*m*弱で，奥壁部で顕著なように腰石抜き取りに際してある程度が除去されたとみられる。上記を勘案し敢えて石室の規模を推定すれば，巾1.5*m*強，長さ最大で2.5*m*前後とみられ，２号墳石室よりひとまわり小形と思われる。

羨道部は，墓壙端との関係からみて１・２号墳石室と同程度の天井石が架構されない短簡なものと推定される。墓道は，墓壙南西端を浅く切り通して設けられ，主軸と稍斜交するかのようであるが，仮に正面にあったとすると，石室床面は奥壁寄が巾広の羽子板状プランとなろう。舌状の不整形プランで，最大巾1.2*m*で約2.6*m*の長さを有する。なお，墓道は石室床面よりも約25cm高位にあり，この点１・２号墳のそれとは異なる。

遺物出土状態 (Fig.25)

本石室の破壊は，石材入手を目的としてなされたと思われる。刀剣類の全てが井桁状に組み合わされてこれらの間に人骨が集められ，石材抜き取りの過程でそれと気づき，せめてもの供養がなされたと見られるからである。物盗りを目的とした破壊ではなかったため，予想に反して，奥壁前面を中心として略原位置を保つ各種遺物を採取し得たのは幸いであった。

粟玉群（13）および骨歯が奥壁前面から検出されて頭位を示唆する。粟玉の一部は奥壁石材抜き取り跡からも若干採取されている。右側頭近くから，珠文鏡（１）・変形文鏡（２）各一面がいずれも鏡背を表にして出土。左側頭斜上方からは，鹿角装刀子片（３）が，右側頭付近からは刀子片（５）・鑷子（６）・不明鉄器（４）・鉄鏃片（７）が出土。ガラス小玉群（13）および銅釧（８）は，それぞれ左右両手首への着装位置にある。これら以外は，全て石材抜取跡にあって原位置を失っている。

出土遺物を列記すると

石室内

１．珠文鏡	６．鑷子	11．手斧鉄
２．変形文鏡	７．鉄鏃片	12．ガラス小玉群

3．鹿角装刀子片　8．銅鋺　13．ガラス粟玉群
4．不明鉄器　9．鉄鏃片　14．刀・剣群
5．刀子片　10．手斧鍬　15．赤色顔料
その他　釘，鉄鏃片，須恵器片

墓道

器台形土器

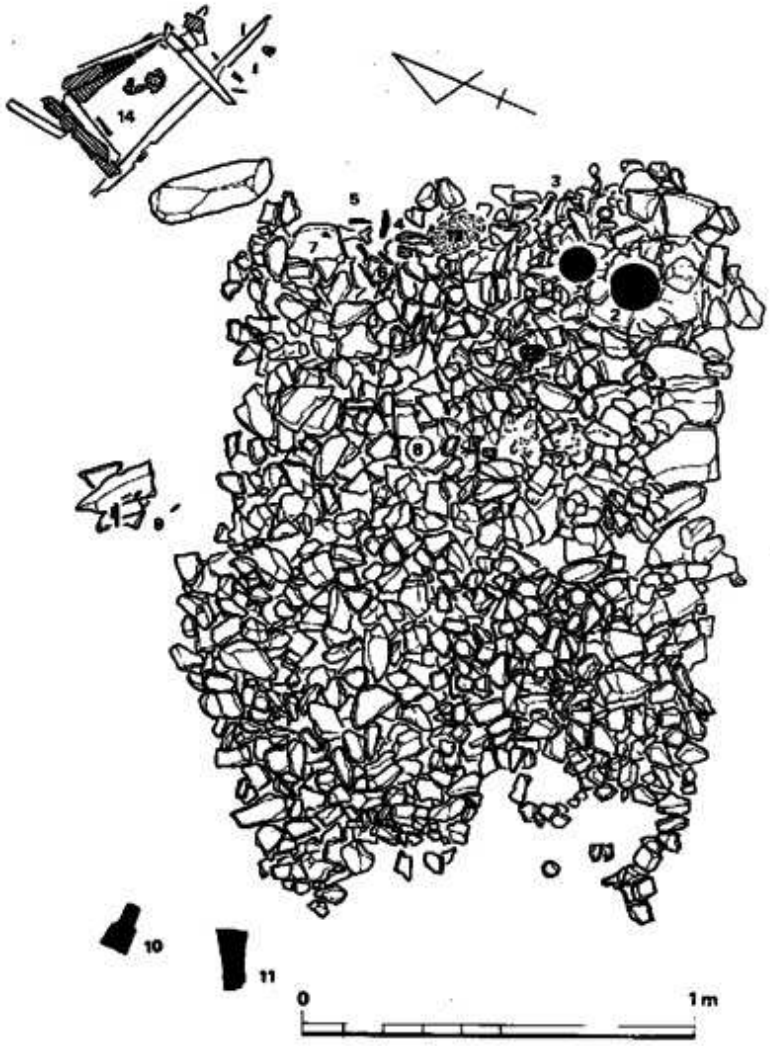


Fig. 25　乙植木3号墳遺物出土状態（S＝1：20）

遺　物

珠文鏡（PL.26—1，Fig.26）

径8.4㎝。土圧により2片となっている。外向鋸歯文・複線波状文を外区にめぐらす。内・外区の陰部全面に赤色顔料が付着しており，意識的なものとみられる。

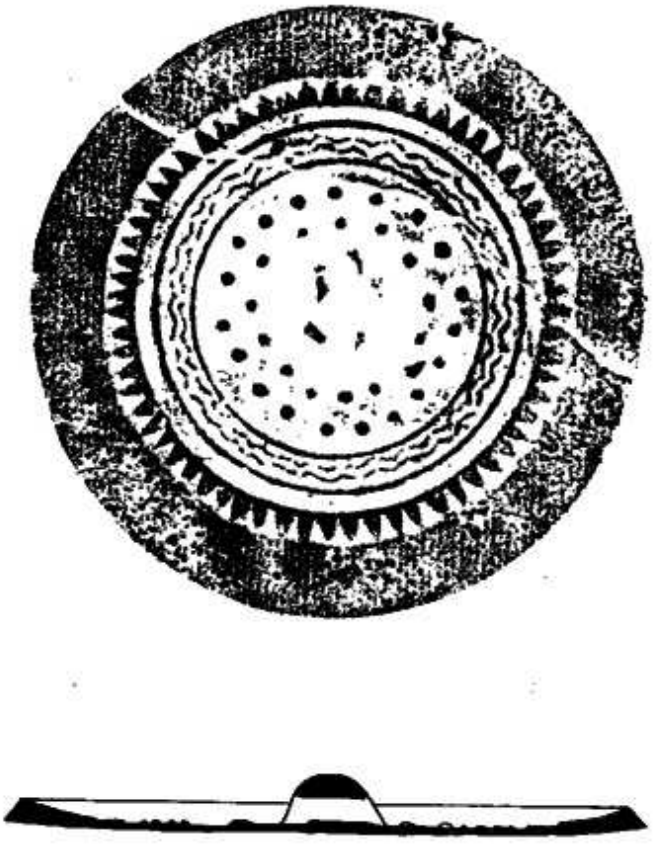


Fig. 26　乙植木3号墳出土珠文鏡拓影（S＝1：1）

変形文鏡（PL.24・25，Fig.27）

径11.7㎝。土圧により一部に歪みを生じている。外・内区の界線もなく，縁に沿った内側に櫛歯文がめぐらされているのみである。紐を囲んで3単位の文様が付されている。このうちの2つは竜を模したかとみられる同一モチーフであるが，細部に小異がある。残りの1単位は，勾玉文2個が連接したかのようなS字形文と形容し難い文様との2つから成る。鏡縁の一部に布が，また鏡面に人骨片（註5）が銹着している。本鏡が原位置にあったとすれば，装身具出土位置から推定される埋葬遺体の位置からみて，人骨片の銹着は不可解である。

ガラス粟玉（PL.27—2）

採取し得たのは296個で，総延長323.5㎜の超小形で，木綿針は貫通しない。形状にかなりのバラツキがあり，明緑色を呈し，濃淡二種がある。

ガラス小玉（PL.27—1）

28個で，43.5㎜。青とライト・ブルーの二色があり，後者は5個。前出粟玉と一連を成す。

ガラス丸玉（PL.27—1）

49個で，30㎝弱。径7～9㎜前後（1個のみが5.5×2.5㎜の小形品）で，濃紺色を呈するが，風化の進行度により2群に分れる。摩耗著しく，常用されていたと思われる。

銅釧（PL.26—2，Fig.28）

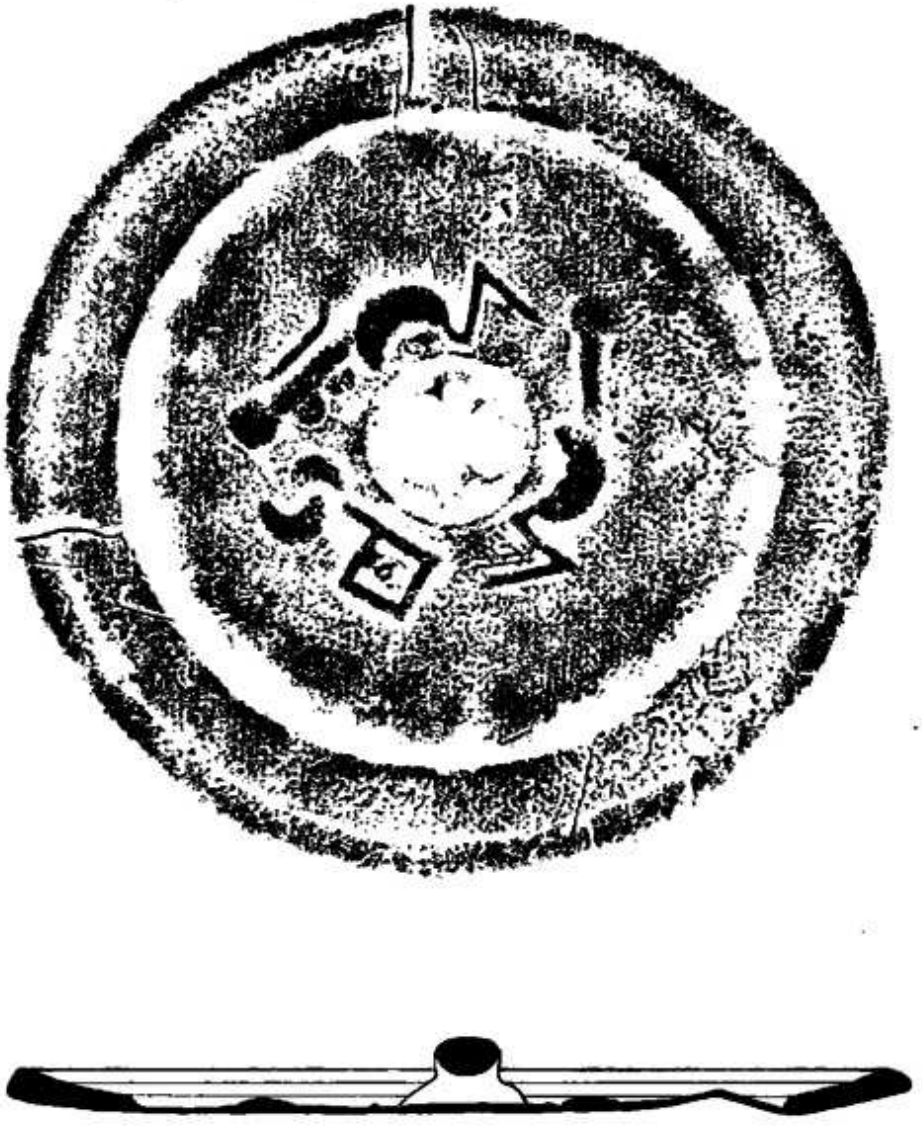


Fig. 27 乙城木3号墳出土変形文鏡拓影（1：1）

2か所で折損している。中実で，光沢ある肌をとどめている。71×73㎜で，完全な正円ではない。

鑷子（Pl.28, Fig.29）

全長9.1㎝。巾は頭部で5㎜，中程で稍広がり7㎜，脚端はまた狭まって6㎜となる。頭部にはリングの一部が残る。最先端は少しく丸味を帯び，片刃であることが看取される。なお一

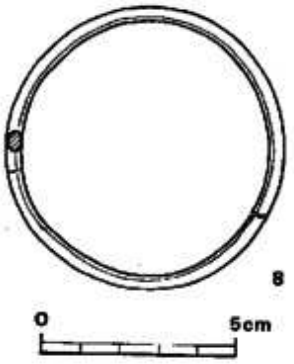


Fig. 28　乙植木3号墳出土銅釧実測図（S＝1：2）

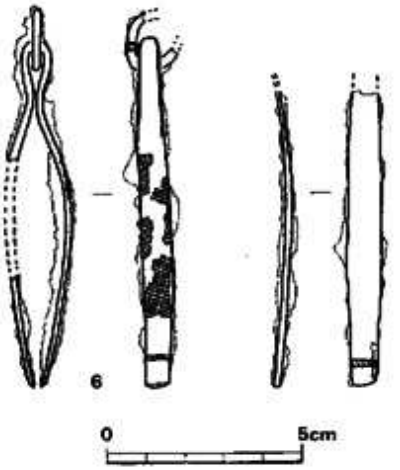


Fig. 29　乙植木3号墳出土鏃子実測図（S＝1：2）

脚の表面と側面の一部に布が銹着している。

不明鉄器（Fig.29）

現存長7.6cm。一端は巾6mm，他端は欠失し，最大巾9mm。側面は少しく彎曲している。図示した上部は下端に比して薄くかつ上半は片刃状となっている。一部に骨の極小片が銹着しているが，埋葬遺体の一部であろう。差異はあるが，形状は鏃子を思わせるものがある。

刀子（PL.28, Fig.30）

2口が出土。3は鹿角装で，鋒と茎の先端を欠き現存長5.7cm。身現存長は3cmにすぎず，研ぎ減りが著しい。両関式で，鹿角は片側のみ現存するが，加飾は認められない。4も鋒を欠き，現存長10cm強で，研ぎ減りあり。両関で茎長は3.6cmで，巾は関部で1cm，先端は狭まり，断面は台形。

手斧鍬（PL.28, Fig.31）

10・11のいずれも，袋部合せ目が認められず鋳造品と思われる。10の袋部の一側は，相対する側よりも一段低く，11の一側もまた刳りこまれて一段低い感を受ける。これが当初の姿であるとすれば，木柄の着装法・用途の想定上極めて示唆的である。10は両肩を持ち，復元全長11.9cm。復元刃部最大巾6cm。袋部は3.8×2.2cm。11も僅かではあるが肩をもち，復元全長16.8cm。刃部最大巾は先端近くで6.5cm。袋部は5.4×4cm。両者とも柄は着装されていない。

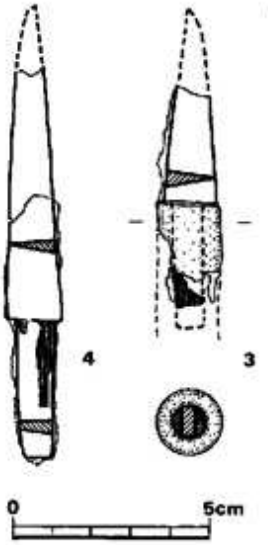


Fig. 30　乙植木3号墳出土刀子実測図（S＝1：1）

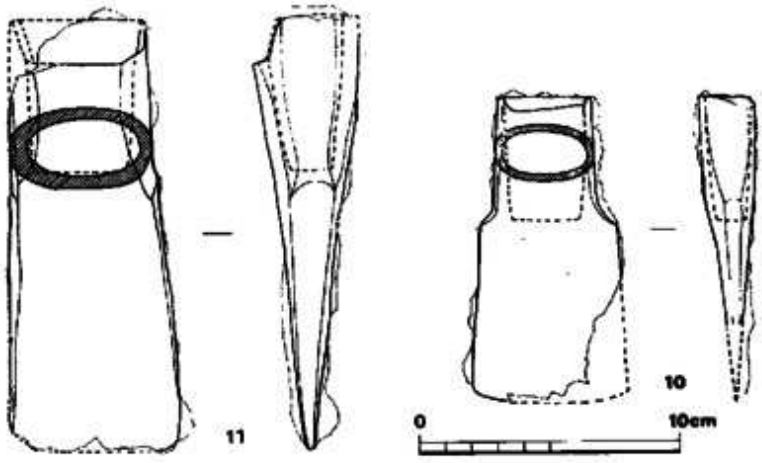


Fig. 31 乙植木3号墳出土手斧鍛実測図（1：3）

Fig. 32 乙植木3号墳出土釘実測図（S＝1：2）

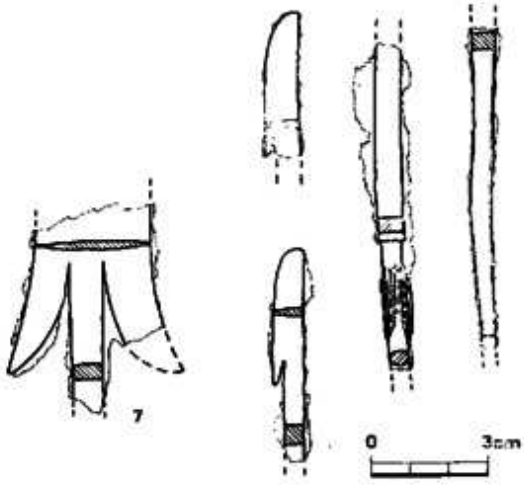


Fig. 33 乙植木3号墳出土鉄鏃実測図（S＝1：2）

釘（PL.29－1，Fig.32）

いずれも頭部を少し折り曲げた，全長3㎝に満たぬ小形の角釘で，計12個体分を検出。木目の走向状態に2種あり，これを渡辺正気氏の分類（註7）にならい，上半横走，下半縦走をAとし，上・下半ともに横走するものをBとすれば，前者6本，後者3本，不明3本となる。上半を板の厚さとすると，Bタイプは8㎜と薄く，Aタイプでも9～12㎜に過ぎず，木棺に使用されたとは考えにくい。採取時に鉄鏃茎片と誤認したため，出土位置が不明であることが悔まれる。

鉄鏃（PL.29—2，Fig.33）

7は，復元最大巾4.5㎝と大形で，両丸造腹抉柳葉式（註6）。腹抉部は非相称。他は全て

腹挟片刃箭式に属し，鋒片13，茎片15等で，15本以上が副葬されている。また鋒・茎の形状・大きさに差異があり，2種以上と思われる。

剣（PL.30—1，Fig.34—12～14）

3口分の破片がある。14は，刃巾4cm，同厚8mm，刃部長66cm前後とみられ，最大である。13・15の刃巾は，各3.2cm，3.6cm。鎬高であるが，いずれも鋒部は丸味を帯びる。

直刀（PL.30—1，Fig.34—1～3・7～11）

5口以上とみられる破片がある。刃巾は，1が3.2cm，2が3.1cm，3が2.8cm，10が2.8cm，11が2.9cm。7～9は，いずれかに属する茎片である。

短刀（Fig.34—4～6）

2口分とみられる。5と6とは棟のつくりからみて同一個体に属する。

須恵器甕（PL.30—2，Fig.35）

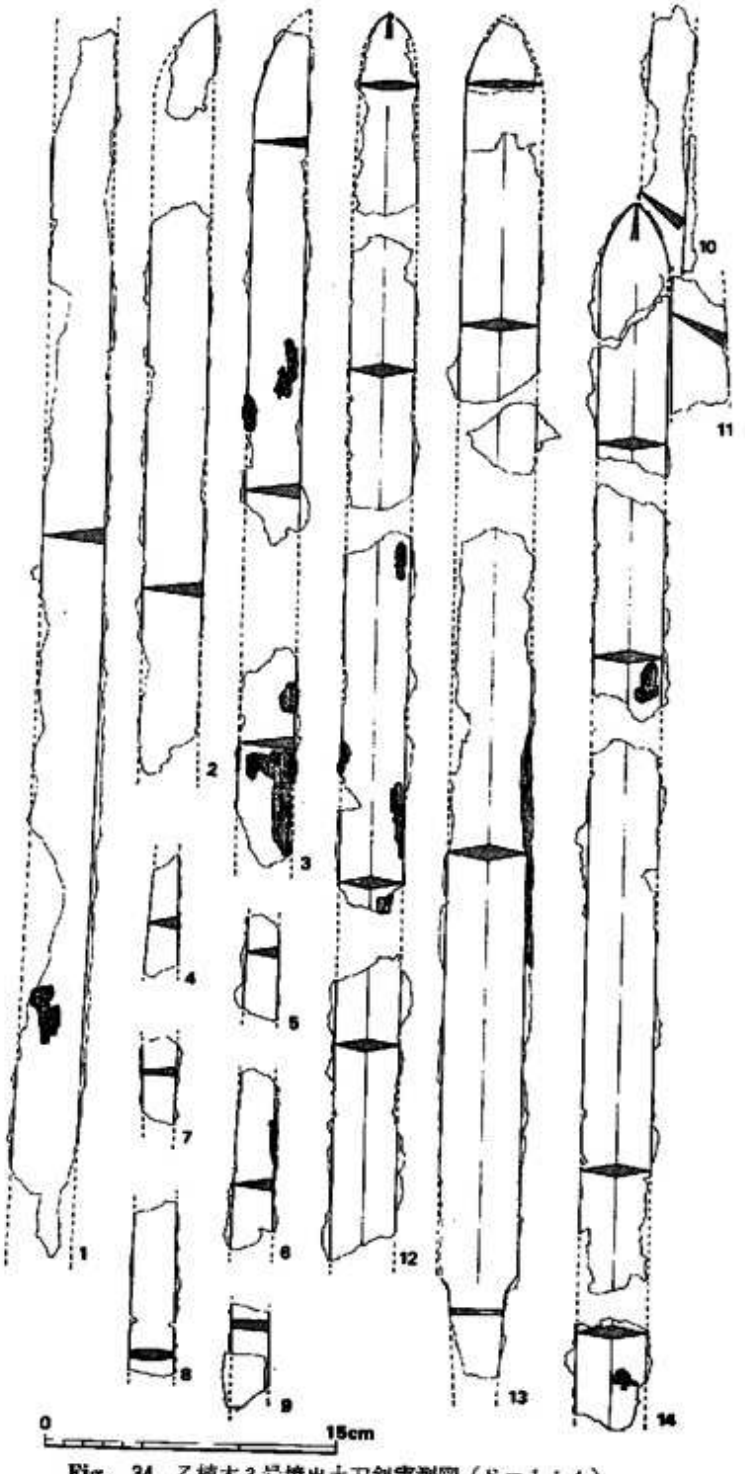
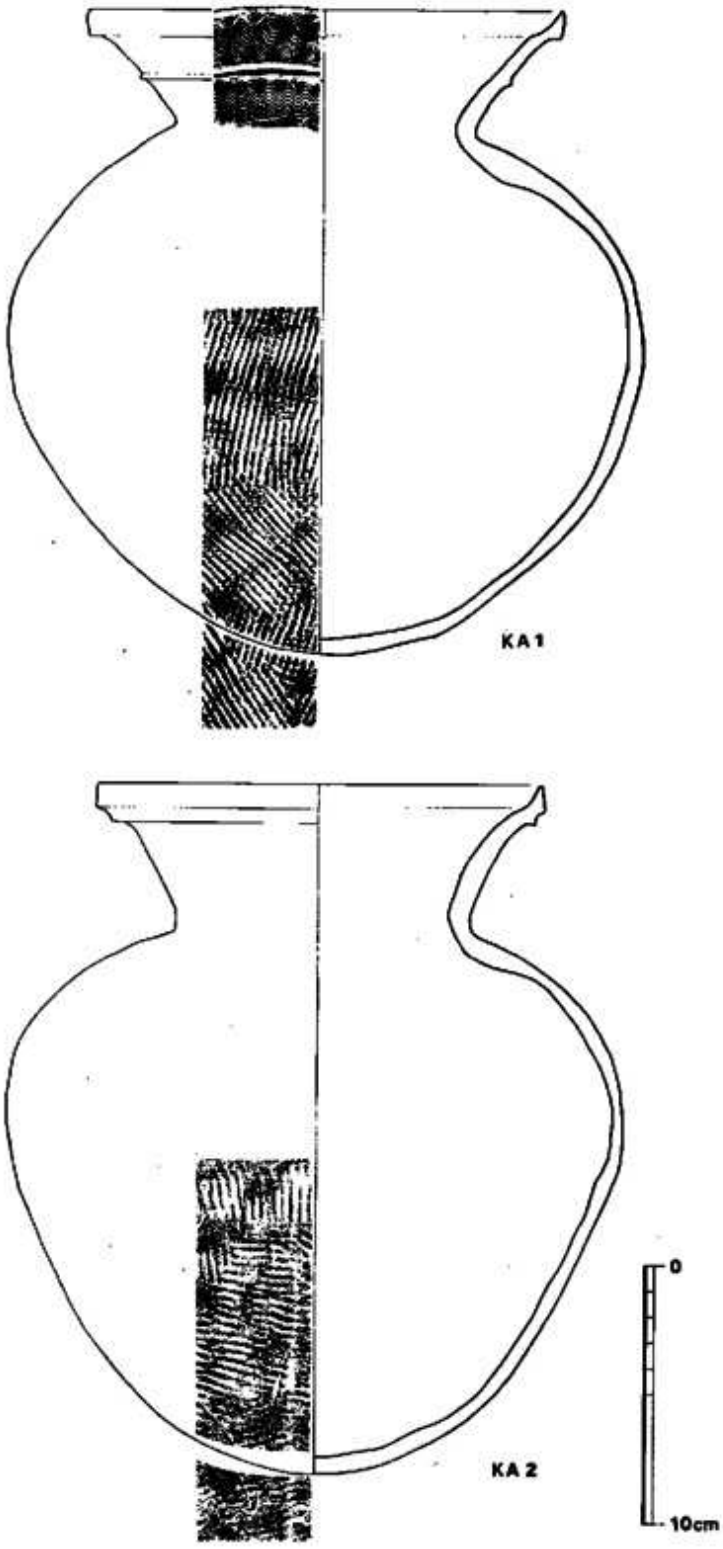


Fig. 34　乙植木3号墳出土刀剣実測図（S＝1：4）



ＫＡ１は，稍ズングリとした感があり，底部から体部下半に焼き歪みがある。口径18.3㎝，胴部最大径 24.4㎝，高さ29.9㎝。頸部には小突帯をはさんで波状文が施される。底部から体部下半は各方向から，上半は斜め横から叩き締める。内面は綺麗にナデられるが，器表は頸部との接合部を除けば調整を施していない。窯詰時の詰台の痕跡は心を外れており，内部への熱の通りを意識したことが窺える。胎土・焼成ともに良好。ＫＡ２の頸部は全く加飾されていない。口縁が稍波打つが，全体的に均整のとれた優品である。器高26.7㎝，復元口径17.3㎝，胴部最大径 23.8㎝。底部から体部下半は各方向から，上半は横から叩き締められて

Fig. 35 乙槙木３号墳出土甕実測図（S－1：3）

おり，後に上半を中心として荒くナデ調整を施す。内面はナデられて平滑で，肩部には器具による条痕が残る。1とは異なり略直立状態で焼成され，灰青色を呈する。胎土は良好。

器台形土器

(Fig.36)

墓道堆積土中から出土。器形は不明であるが，4号墳のKI3（Fig.43参照）と酷似するので脚として図示している。器表には叩き目が残り，内面は器表に比して焼成よく，叩いた後にナデ調整。叩き目は丸く凹み，棒状器具か。復元底径28.5cm，現存高14cm。成形法は須恵器のそれであるが，焼成は土師器に近い。焼成時には倒立させられたと推定される。あるいは，4号墳に属するかとも思われる。

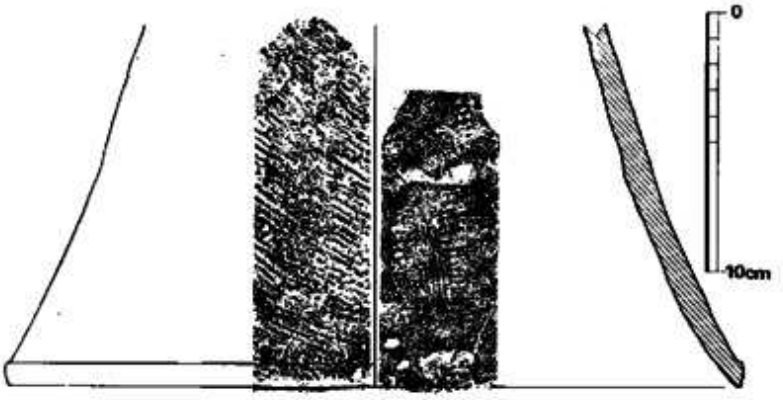


Fig. 36　乙植木3号墳出土器台形工器実測図（S＝1：3）

5.　乙植木4号墳

墳　丘 (Fig.3・37・38)

他の5墳の立地とは全く異なり，尾根筋を僅かに下った南斜面に位置し，みかけの規模は13.5*m*×15.2*m*の長円形で，南からの高さは約3.5*m*であった。

石室位置決定後に裾部の削り出しを行っており，北・東側では墓壙上端から略等距離の地点から始められている。盛土は現存1*m*強であり，奥壁背後の北側では石室の裏込めを行なう形で作業されるのに対し，傾斜のきつい東側では周縁をカルデラ状とし，作業工程は既述2号墳北側のそれに近い。盛土範囲は以北にも及ぶがみかけの北限はAとみられ，南北径は14～14.5*m*前後，東端はBと考えられ，石室中軸から6.9*m*弱である。従って本墳の規模は，径14*m*前後と思われる。

石　室 (Fig.37)

天井石の全てが移動・除去され，大破しているが，大要は窺える。略南に開口する全長8*m*

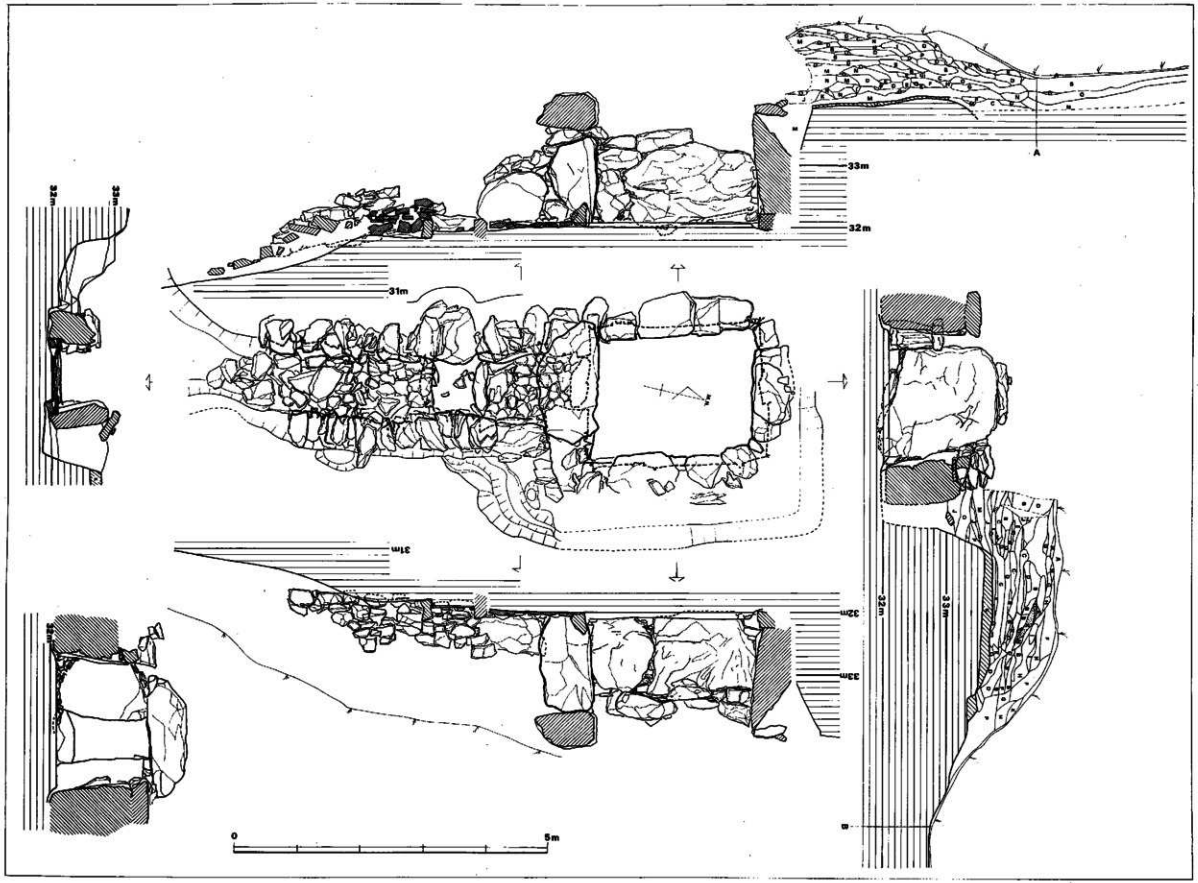


Fig. 37 乙植木4号墳石室実測図（S＝1：60）

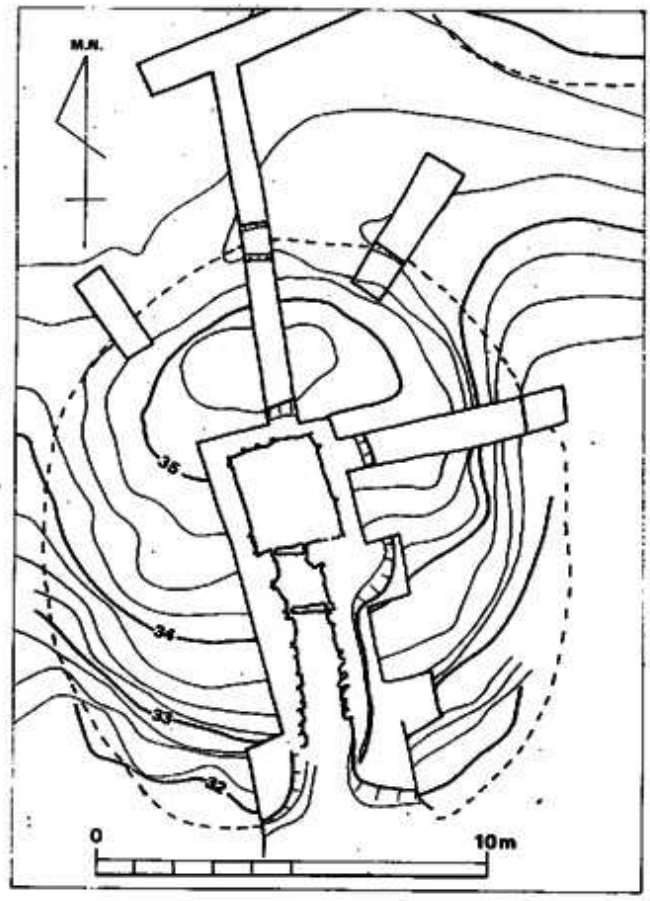


Fig. 38 乙槙木4号墳全体図（S＝1：200）

強の複室式横穴式石室で，従って，本墳と既述3墳とは立地・石室構造・営造時期上に明確な相違がある。墓壙は北側で1.85*m*もある深いもので，石室がこの中央にあると仮定すれば，上端巾4.9*m*，同長 6.1*m*弱となり，前面は石積範囲を考慮して狭めている。玄室部の壙底は略水平位に保たれ，凹凸ある腰石のすわりを良くする程度にさらに一段浅く掘りくぼめている。周壁腰には，奥壁を最大とする盤石を置くが，各壁とも2石を用いる。腰石以上は控えよりも面を長くとり，「あぶり」築きとなる（註8）。これは1*m*以上の面をもつ石のみならず以下の石までが含まれ，本石室でも玄室のみに限定される。巾は2.15～2.2*m*，長さは左壁沿いで2.7*m*，中央部（Fig.46のA～B）で同じく2.7*m*，右壁沿いでは少し長い2.9*m*となり，長方形プラン。床面には，前室同様角礫が敷かれ，前室床面よりも幾分か高位にあったと思われるが現存しない。前壁は，左右に袖石を立て楣石を置く。左袖石は楣石の架構に備えて敢えてすわりの良い面を上にしている。両袖間には仕切石を置く。入口は，高さ約1.2*m*，巾は上で0.6*m*，下で0.76*m*で，正面から稍西に偏在する。

前室には，通有のように立てた袖石は用いられず，巾が1.3*m*と羨道より稍広い程度の狭小な空間であるが，Bから1.82cmの地点（Fig.46のC）に仕切石が置かれ，かつ，腰石が立てられている点で羨道部側壁とは明瞭に区別される。羨道は，巾1*m*前後で，左右で側壁長が異なり，左は奥壁から8*m*強，右は短かく7.5*m*強。壙底両側は，側壁最下段にあたる部分を予め浅く掘り下げているが，腰石は使用されない。

奥壁から5.4*m*弱の地点（Fig.46のD）に3個目の仕切石が置かれ，これと前室仕切石との間の一部に小角礫からなる敷石の一部が遺存する。この仕切石を最下段として，面を合わせた

閉塞石の基部が，長さ1m，高さ0.4～0.6m程度現存している。側壁使用材よりも総じて小ぶりであるが，基底部には大き目の石が使用されている。基底の石は地山には密着せず間層をはさむが，前述仕切石と地山との関係から裏込めと見なされ，従ってこれらの基底石は初葬時のものと推定される。閉塞石よりも外側の石材は，羨道底に堆積した土砂上にあり，小ぶりの石は閉塞石，大ぶりのそれは側壁材と思われる。羨道先端には浅く切通した墓道が中軸線を南西に外れて続く。

遺物出土状態

玄室は徹底的な盗掘を受けており，金銅張金具と紡錘車各1個を採取したにとどまる。前室および閉塞石前面からは馬鈴各1個が出土。器台を含む土器群は，羨道および墓道から出土している。いずれも原位置を移動している。

後室内

鉄地金銅張金具	1
滑石製紡錘車	1

前室

馬鈴	3

羨・墓道

須恵器	短頸壺
「赤焼き」の土器	器台
	壺

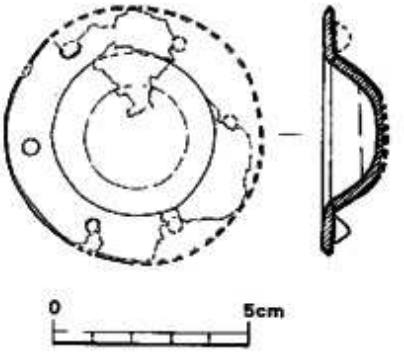


Fig. 39 乙植木4号墳出土鉄地金銅張金具実測図（S＝1：2）

遺　物

鉄地金銅張不明金具（PL.36, Fig.39）

無脚で，外径6.6cm，半球径4.2cmで，僅に歪む。復元総高1.7cm，半球部同高1.3cm。金銅張後外縁に鋲を打ち皮革等に固定したとみられるが，1鋲のみ六等分する位置からずれる。鋲頭は径7mm，高さ3.5mm。破損状況は，外縁と半球部とは別材であることを示すかに見える。

滑石製紡錘車（PL.36, Fig.40）

底径4.2cm，厚さ1.8cm弱。上面は3.2×2.8cmの長方形となる。両側からの穿孔。

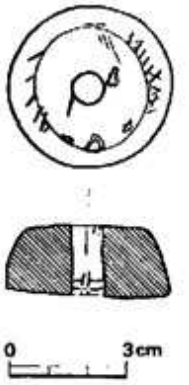


Fig. 40 乙植木4号墳出土紡錘車実測図（S＝1：2）

馬鈴（PL.36, Fig.41－1～3）

1は，総高5.6cm，紐高1.3cm，同厚3.5mm。体部は4.3×4.5cmの不整八角形。鈴子は鉄で，完形品。内面にも明確な稜がある。紐の長辺をはさんで相対する肩部に各一孔を穿つ。

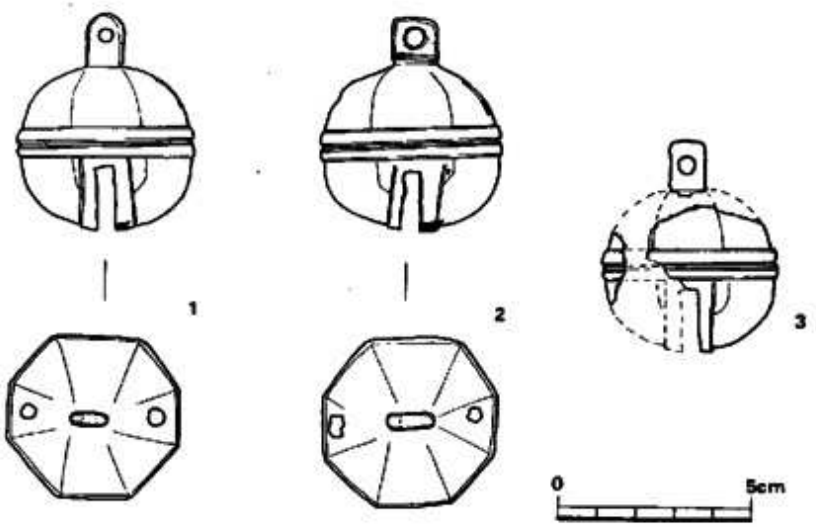


Fig. 41 乙植木4号墳出土馬鈴実測図（S＝1：2）

2は，1と同工であるが法量等に僅かな差がある。総高5.5cm，紐高1.2cm，同厚3.5mm。体部は4.3×4.5cmと同大。紐の根元に，仕上時の工具痕を残す。一部が割れている。3は，1・2と同工であり，同一鋳型による鋳造と思われる。

短頸壺（PL.36, Fig.42）

底部を欠くが，過半が現存する。黒青色を呈し，焼成堅緻，胎土良好。復元器高10.4cm，口径7cm，頸高2cm，復元胴部最大径13.3cm。肩部に2条の沈線をめぐらし，体部下半にはカキ目調整を施す。

壺（PL.36, Fig.42・43）

3個体。いずれも成形法は須恵器，焼成は土師器に近く，赤褐色を呈して特徴的である。1は，略完形で，口径15.8cm，胴部最大径17.2cm，器高17.8cm。頸部から肩部はナデられているが，以下は叩き板の痕跡をそのまま残して対照的である。内面の肩から体部にかけては当板痕をとどめるが，波文ではなく細い平行線で，断面からみて棒状の器具と思われる。2は口縁部の一部のみ。黄褐色を呈し焼成は甘いが胎土は良。3の底部とは別個体。3は，赤褐色を呈し，底部近くの破片のみ現存する。内側は綺麗にナデられている。

器台（PL.37, Fig.43・44）

TU1～3と全く同様な成形・焼成上の特色を持ち，5個体分とみられる破片が採取されている。いずれも赤褐色を呈し比較的硬質で，器表に叩き板，内面に当板の痕跡をとどめる。全形を復元し得る個体はないが，上・下両端が外反する筒状の器台と考えられ，形態が各々少しづつ異る。

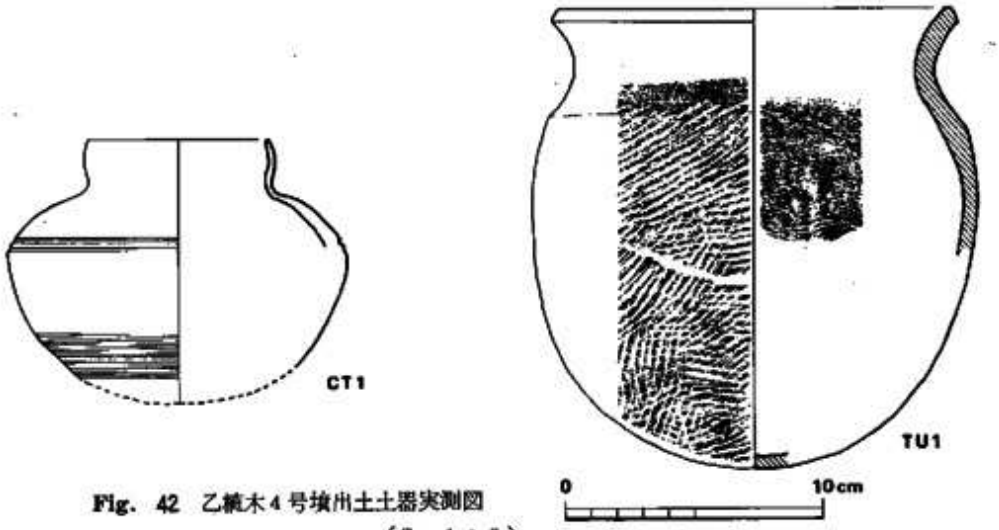


Fig. 42　乙植木4号墳出土土器実測図
（S＝1：3）

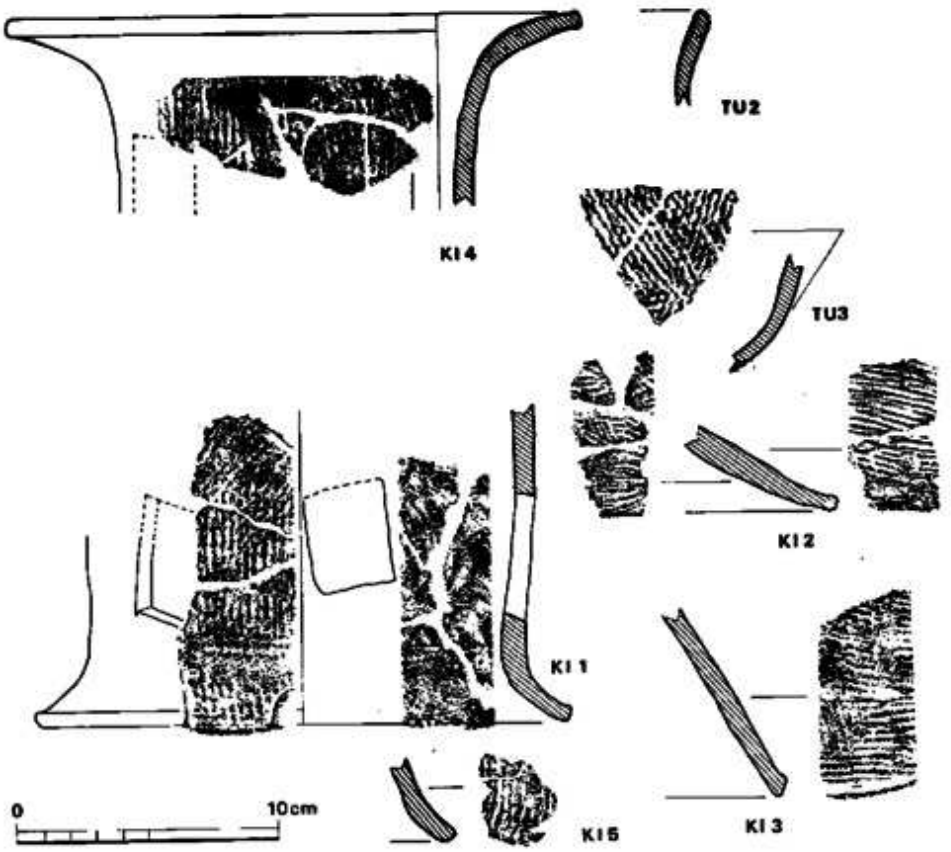


Fig. 43　乙植木4号墳出土器台・壺実測図（S＝1：3）

ＫＩ１は，底径20.8㎝で部分的に黒変。三ケ所に不整長方形の透しを穿つ。内面は荒くナデ調整。ＫＩ２はＫＩ１と略同大と思われるが，脚端の形状が異なる。焼成堅緻。ＫＩ３は，復元底径23.7㎝で，３号墳出土の器台形土器と良く似た形状・成形法である。内面は綺麗にナデられている。ＫＩ４は復元底径22㎝，ＫＩ１と胎土・成形ともに酷似するが，筒部は稍細身で隅丸長方形の透しが４ケ所と異なる。２段にわたって篦描による文様がある（Fig.44—Ａ）。透しが２段にわたると仮定すれば，ＫＩ１と同一個体の可能性を残す。ＫＩ５は小片であるが，本例にのみ口縁（あるいは脚端）に篦描文様をもつ。

文様のうち，Fig.44のＢ・Ｃは，あるいはＫＩ４に伴なうかとも思われるが明らかでない。ＢはＡ上段の三角形文に近いが，よりシャープである。

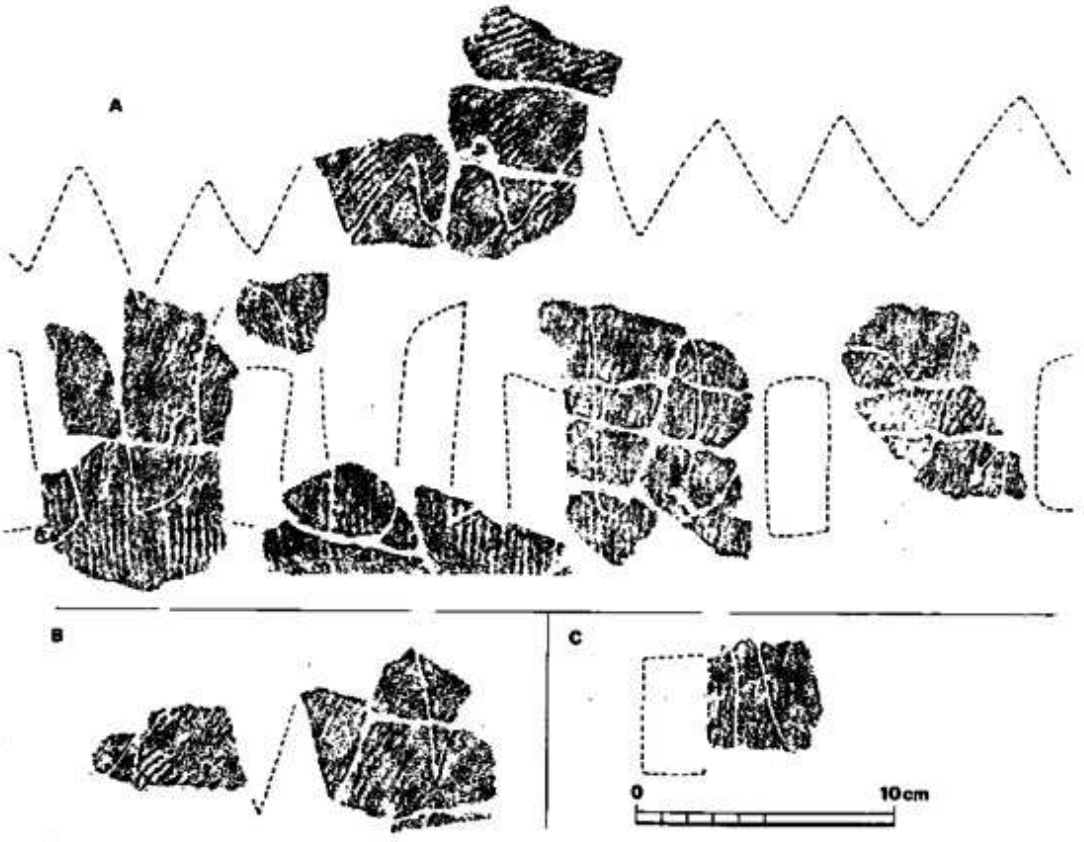


Fig. 44 乙植木４号墳出土器台篦描文様集成図（Ｓ＝１：３）

6.　乙植木5・6号墳 (Fig.45)

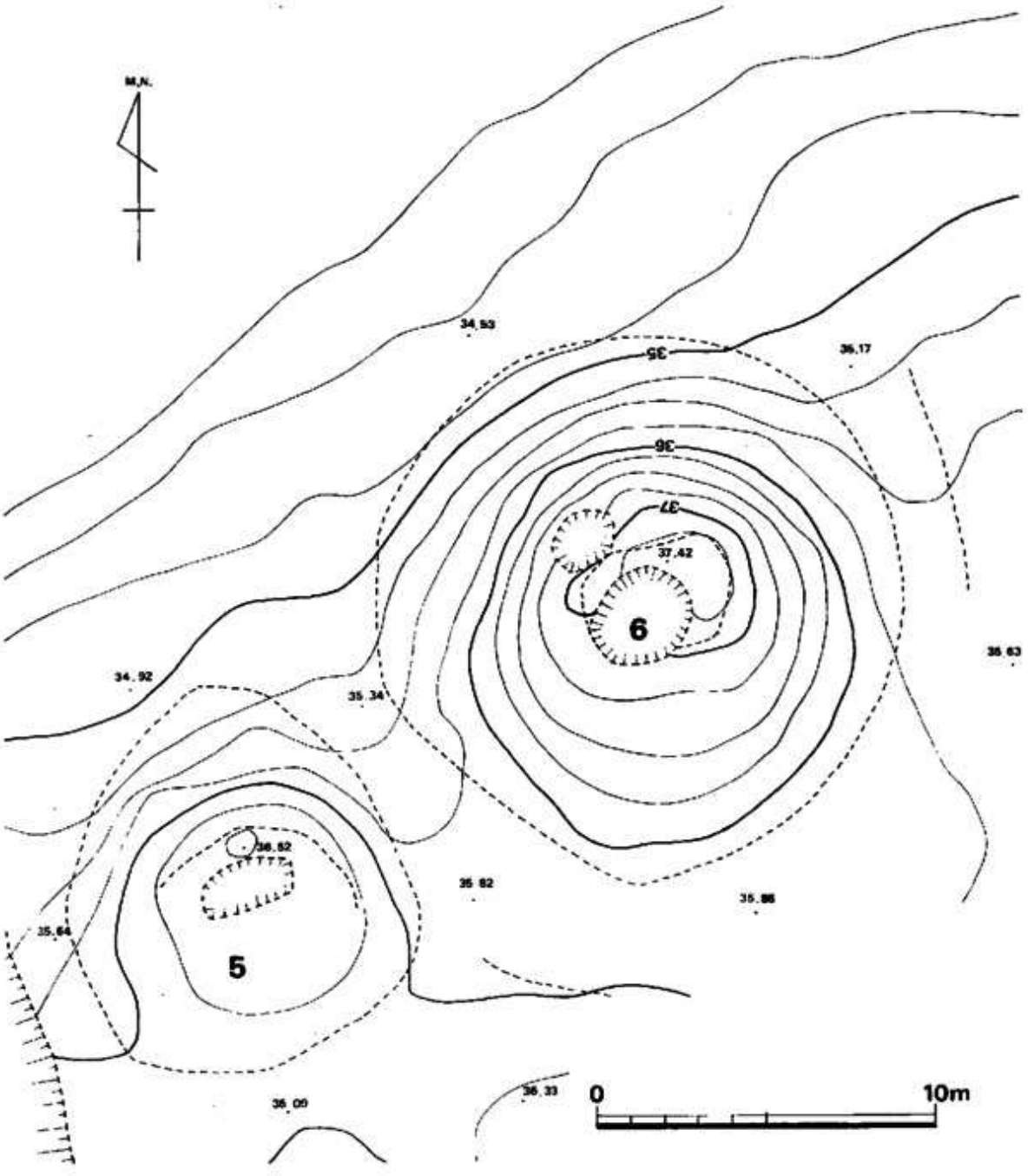


Fig. 45　乙植木5・6号墳丘墳実測図（S＝1：200）

これら2墳は1号墳に東接するが，高速道路建設予定地外にあるため，今回の発掘調査の対象とはならなかったが，皮肉にも完成した高速道路を走行中に該地域が伐採され植樹された直後であるのに気づき，昭和50年に急遽外形測量を実施した（註9）。同調査に際しては，B.M.確認，土地所有者との折衝等に須恵町立歴史民俗資料館の藤口悦子氏に御尽力いただいた。氏に対して心から御礼申し上げます。

両墳とも，尾根直上ではなく，これより少しく北側斜面にかかる位置にあって，1・2号墳と全く軌を一にした占地状態にある。

5号墳は，東西径10.5m，南北径11.6mで，北側からのみかけの高さは1.3m前後と小形である。

6号墳は，東西径15.6m，南北径16.5mで，北側からのみかけの高さは2.8m前後。東側裾部周辺には，尾根を断ち切ったとみられる痕跡をとどめいる。墳頂部は4.5×3mと狭く，浅い盗掘孔がある。

Ⅲ 結　　語

今回の調査によって，4基の古墳が石室構造・出土遺物の両面において著しい特色をもつことが明らかとなった。以下これらについての所見を述べ，合わせて二三の問題について検討を加えたい。

1　立地および墳丘について

1～3，5・6号墳と4号墳との間には，大きな差がある。前5者は概ね尾根筋から北斜面にかけて位置し，北側からのみかけを重視しての築成であるのに対し，後者は南斜面にあって北側山麓からはその墳丘を望めない。4号墳と他とが，別群に属することは明らかである。

墳丘規模は，主体の構造・規模と関連しており，2・3・6号墳が相対的に大形で主たる地位にあり，1号墳と5号墳は略同大でこれらよりひとまわり小形である。4号墳墳丘は，石室を覆い外形を整えるに必要最小限の規模といってよい。

1～3号墳が北斜面へではなく西に向けて開口するのは，一見矛盾するかのようであるが，盛土の厚い北側に向けて短簡な羨道前面に切通状の墓道を付設してこれを維持すことは困難であるという，石室構造に制約された結果による。

2　石室構造について

既述したように，石室構造上でも1～3号墳と4号墳との間には明瞭な差異と懸隔が認められる。前3者はいずれも古式横穴式石室に属し，1号墳石室はその構造上の諸特色から竪穴系横口式石室の範疇に含まれる（註10）。2号墳石室は，短簡な羨道部の構造に1号墳石室との系譜を辿れるが，前壁構造をもち巾広となっている点で通有の横穴式石室へ一歩近づいており，少しく後出するものと思われ，後述する出土須恵器の型式もこれと矛盾しない。3号墳石室は大破しているが，2号墳石室と大略同構造とみてよい。

これら石室の墓壙は，いずれも掘りこみが極めて浅い。これは墳丘における石室の位置および尾根・斜面に対する開口方向と不離の関係にあり，6世紀後半代の斜面に位置する群集墳が尾根筋側の地山を深く穿った墓壙を掘って斜面に向けて開口する，換言すれば意図する方向に自在に築造しているのとは際立った相違があり，この点でも上記3石室が古式であることを示している。

4号墳主体は，調査した古墳の中では唯一の複室式横穴式石室である。同一古墳群に含めてはいるが，構造上別系統に属し，時期的にも上記3墳とは半世紀以上の時間差が認められ，営造主体が異ることを想定させる。石室プランのうち，長さについては Fig. 46 で明らかなよう

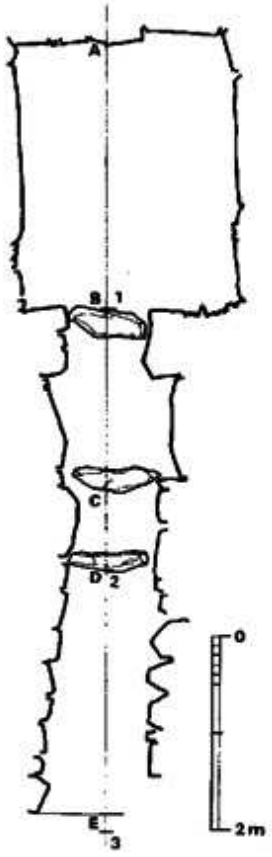


Fig. 46 乙植木4号墳石室割付復元図（S＝1：40）

に，AB：BD：DE＝1：1：1換言すれば石室全長は玄室長の3倍となっている。また，墳丘14m前後は，AB（2.7m）の5倍（13.5m）に近い。玄室長が墳丘・石室築造に際しての基準長となっているとみられる例が増加しつつあり，これらの比率関係に充分な注意を払う必要がある（註11）。

5・6号墳については未調査であるが，墳丘規模からみて前者は1号墳石室と，後者は2・3号墳石室と大略同構造と推定される，従って本丘陵上では総体的に東側にある古墳が先行して営なまれ，以後造営場所は次第に西方へと移動していったと考えられる。

3　葬法について

遺物の出土状態からみて，3号墳への埋葬遺が1体に限られることは明らかである。2号墳の葬送儀礼は後述するように1回限りであり，墓道での堆積状況にも追葬を積極的に示すものはなく，単次葬と思われる。従って，2・3号墳は，石室構造上では竪穴系横口式石室から一歩前進しながらも，葬法上では先行する墓制から脱皮しておらず，葬制上でも古式とすることができる。1号墳は，積極的証拠はないが，石室構造・築造時期からみて，単次葬一体の可能性が強い。

4　年代について

本群の調査によって，良好な須恵器・土師器の資料を採取し得たので，以下これらによって各古墳の年代を求めたい。

1～3号墳出土の須恵器は，その形態・成形・調整法からみて古式に属することは明らかで，1号墳出土の壺がこれらの中でも最も時期的に遡り得る。田辺昭三氏によれば「五世紀前半から五世紀後半までの最初の四・五十年間は，陶邑のほかに須恵器をつくっているところはなかった。つまり陶邑は日本で唯一の須恵器生産地として地方への製品を一手に供給していた」（註12）のであり，該器はTK208型式（註13）に該当し，同地からの将来品とみられる。2号墳出土須恵器は，器種によっては古・新の二相を示し，例えば甕および壺には比較的古式の様相が認められる。このうち甕は薄手でシャープな成形で，口径・胴部径と器高とが略同一という形態的特色を示すが，陶邑でも前出TK208型式では口径が胴部最大径よりも小さい（註14）が，TK23型式ではこれと口径が胴部最大径を上まわる（註15）ものとがあり，従って形態的には，TK208型式よりは新しく，TK23型式よりは古式との感を受ける。これに対して杯・高杯特に前者は体部の張りおよび蓋受部に立上り等に形態的に新しい様相が認めら

れて，地方窯出現期のＴＫ23型式（註16）にあたると思われる。このように器種間には古・新の二相を示し型式差を思わせるものがあるが，同一器種の中では特にそれと指摘できる程のものはない。

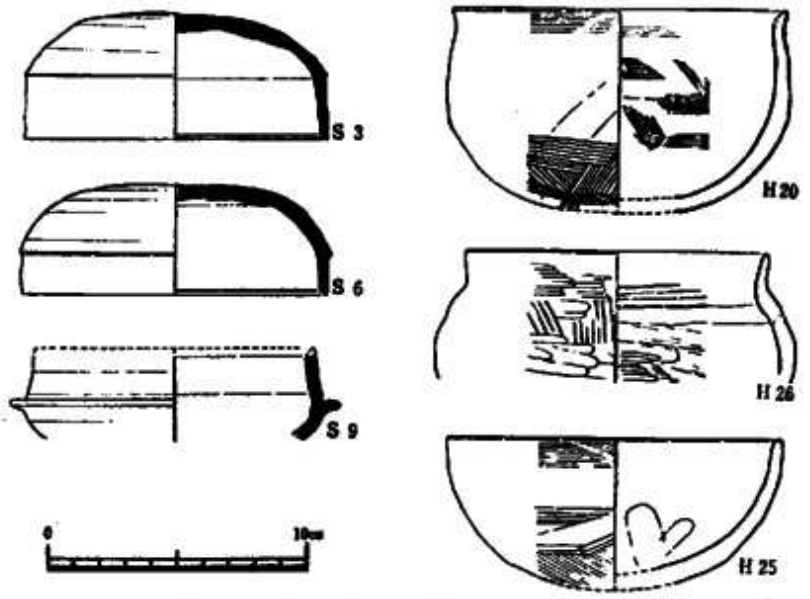


Fig. 47　蒲田遺跡Ｄ地区第２号住居跡出土土器
（同報告書から転載）

一方２号墳出土土師器杯が３タイプに分れることは既述したとうりであるが，福岡市東区蒲田遺跡Ｄ地区２号住居跡（註17）からは，これら３タイプを含む土師器群が出土している（Fig.47参照）。H20がＡ，H26がＢ，H24がＣタイプにそれぞれ該当し，特にH26は口縁内側に残る工具痕までソックリである。同住居跡からは本墳出土品よりも形態的には古式の様相を帯びる須恵器杯が共伴しており，「須恵器では，遅くとも５世紀終末から６世紀初頭」に比定されている。多少の先後関係はあろうが，本墳出土須恵器との間に大きな時間的差はない。

本墳出土の土器群は，いずれも１回の埋葬に伴なうことは明らかである。その理由は，一つは石室内出土の直口壺（ＴＵ１）と墳丘南西裾Ｃ群出土直口壺（ＴＵ４）とが酷似しており時期差が認められない，二つは重複して出土したＢ・Ｃ群のいずれにおいても間層が認められない，三つは墳丘南西裾土器群を土砂で覆うことによって墳丘の築成が完了したとみられる，四つは南東側から出土した須恵器群も墳丘盛土中にある，とみられることによる。従って２号墳の築造時期は，大略ＴＫ23型式の年代（５世紀末）に比定されよう（註18）。

３号墳出土須恵器は器種が甕に限られ，２号墳出土須恵器との比較に稍難点があるが，これ

より少しく後出すると思われ，4号墳出土須恵器はＴＫ43型式（註19）に略該当するとみられる。

従って4基の古墳の年代は，1号墳が5世紀後半，2号墳が5世紀末，3号墳が6世紀初頭，4号墳が6世紀後半代に，それぞれ比定される。この結果，1～3・5・6号墳は，当該地域およびその周辺では最古の横穴式石室を主体とする古墳と意義づけられ，前方後円墳および大形円墳に先駆けて新しい墓制を導入した被葬者達のよって立つ基盤の解明が急がれる。

5　鑷子について

この種の鉄器については，既に三島格氏の詳細な論考があり（註20），このうち古墳時代出土例に関する部分に限ってそれを要約すると

1. 「鑷子形の品が，発見されているのは，古墳時代後期およびそれ以後の遺跡においてである。」
2. 3型式に分類され，古墳出土例は「頭部に突起を形成する……甲型」である。
3. 「甲型は南鮮例とは，基本的な類縁は認めるが，直結するものではなく，彼の地における流行の投影によるものであろう」

となる。氏によって大綱が尽くされているが，近年の資料の増加もあり，九州出土例を中心として三補足してみたい。

用途については，氏が指摘されたように「抜毛に使用されたということを，考古学的に証明することはなかなか困難であるが」，出土位置に化粧具であることを示唆する例――遺体の頭部あるいは胸部付近出土例があり，また先端の形状からみて毛抜に用いたと考えられる。前者の例としては，氏の取り上げられた臼杵市・下山古墳（註21）の他に大分県下海部郡佐賀関町・築山古墳南棺南棺出土例（註22）・乙植木3号墳出土例があり，後者には山口市・朝田第2号円形周溝墓出土例（註23）がある。従って，小稿では「毛抜形鉄器」ではなく鑷子として扱った（註24）。

所属時期のうち，上限は前出朝田第2号円形周溝墓と築山古墳南棺出土例に求められて，前者は「陶邑のＴＫ216併行」の高杯と共伴し，後者は「五世紀中葉に近い頃」に比定されている。下限は，筑紫野市・八熊6号墳出土例とみられ6世紀末葉に比定されている（註25）。

形態は三島氏の分類の「甲型」に限られているが，「頭部の突起部」に遊環＋連結金具あるいは連結金具のみを連接する例が新たに知られており，前者には山口市・朝田第1号横穴古墳出土例（註26），後者には前出朝田第2号円形周溝墓出土例があり，乙植木3号墳出土例も上記のいずれかに属する。

佩用の位置は，装着状態を示す出土例によれば既述のように頭・胸部と思われる。先述した連接金具は吊り下げるためのと思われ，しかも6世紀初頭までに所属する鑷子にのみ認められるもので，祖型が腰佩にあることを示唆するとみられるが，佩用の位置は明らかにこれと異な

る。朝田第1号横穴古墳のように棺外（棺側の排水溝中）に副葬されている例もあるが，いずれにしても腰部出土例は，現時点では知られていない。着装に際しては，三島氏が指摘されたように「突起部の小孔」あるいは遊環に紐が通されたものと思われるが，下山古墳例では「管玉とともに貫ねたとも推察され」ている。とすれば，同例では頸飾の中心飾としての役割をも荷っていたことになる。

本器が化粧具の一つであることから，装着者を女性に限定できるか否かが問題となる。下山古墳では「成人女性」に伴なっており，築山古墳南棺出土例でもその可能性がある（註27）。遺物による性別特定の可否は重要であり，留意すべき点と思われる。

6　「赤焼き」の土器について

2号墳出土土器の一部（TM5，KA1・2）と，4号墳出土土器の一部（TU1，KI1～4）とは，須恵的な成形・調整手法をとりながら焼成においてこれと著しく異なっており，これらの土器は「赤焼き」の土器と呼ばれる一群にあたるとみられる。

王塚古墳出土のこの種の土器について，高島忠平氏は，「赤褐色硬質の土器」で「一般の須恵器と同様にロクロ成形によっているが，胎土，底部の調整手法に相違がある。従って須恵器の偶然の熱変とはいいきれない。この「赤焼き」土器の存在は，この種の土器が比較的多く分布する九州において，一般の須恵工人とは異なった系統の工人集団の存在，朝鮮半島からの製陶技術移入の多元性を推測しうる興味ある事実であるのかもしれない」とその見解を述べておられる（註28）。

この種の土器を，範囲を広げて須恵器に似て非なるもので土師器とも異なる土器と大雑把に規定すると，その内部では須恵器に比して低火度焼成である点で共通しながらも，焼成度，成形・調整手法上等ではかなりの差異が見受けられる。焼成度では，A一黄灰色を呈し軟質，B一赤褐色を呈して硬質，の二者があり，手法上でも，1一須恵器のそれと大略同様であるが細部に小異がある，2一成形・調整用器具は同一とみられるが手法上でかなりの隔たりが認められる，に二分される。上記だけでも4種があり，これら全てを同列に扱うことの可否はなお検討の余地があるが，単なる焼き損じとは割り切れない識別すべき一群の土器が存在することは事実である。

これらの土器の製作者達の成形・調整の熟練度が須恵器工人に比して格段に劣ることは，この種の土器に須恵器特有のシャープさに欠けるものが多いことでも明らかであるが，彼らの致命的な欠陥はむしろ焼成技術面での拙劣さにあると思われる。従って，この種の土器を「製陶技術移入の多元性」に基く生産物と意義づけるよりも，むしろ須恵器生産におけるギルド的閉鎖性がもたらした副産物と評価すべきではあるまいか。現時点では，この種の土器を集中的に生産・使用する地域は特定されておらず，これは上記の推測を傍証すると思われる。

ともあれ，現実には焼成不良の須恵器との弁別にかなりの困難もあり，須恵器窯跡出土の焼

成不良品との対比による識別法の確立が急がれる。

7　古墳における古式須恵器のあり方について

今回の調査によって良好な古式須恵須恵器についての資料が得られたので，上記について検討を加え，そこから帰納される二，三について触れてみたい。

2号墳南西側墳丘裾部における土器群の出土状態は，再三述べたように単一時期に属して基本的には散乱状態にあるとしてよく，葬送儀礼進行中の原位置にあるのではなく終了後に破砕・遺棄されて埋め戻されたとの感を受ける。特に容器類は，甕等の小形器種をも含めて，意識的な破砕・破片撒布が強く印象づけられる。これに対して杯類（含土師器）は，故意に破砕したと見られる例は比較的少なく，並置あるいは重ねられた傾向が看取されて様相を異にする。杯は容器と飲食器との二面性をもつが，須恵器杯では蓋が身に被せられた状態で出土した例は皆無，換言すれば確実に容器として用いられた状態を示すものはなく，これは蓋と身とのセット関係を確実に認定できるものがないことと符合する。この事実は，本墳出土の須恵器杯が蓋をも含めて飲食器として使用されたことを示唆するとみられる。土師器杯も，B・C群上部出土の二三については容器である可能性を残すが，下部出土例については須恵器杯と全く同様と思われる。

壺・甕類には清水あるいは濁酒等の飲料を，高杯には食物をそれぞれ容れ，これらは鉄製工具類を並置したC群付近を中心として据え置かれたものと推定される。儀礼の全体像は不明であるが，いったん死者へ供献されたこれらの飲食物は，儀礼のある段階で参列者が手にした飲食器（杯）に注がれ盛られたのであろう。そして儀礼の最終段階で容器・飲食器を故意に破砕・遺棄し，これらの土器片群の上に土砂が盛られて儀礼が完結したと見做されるのである。

従って，本墳出土の土器群は，死者へ飲食物を供献するための容器と儀礼執行に不可欠な飲食器とに大別され，葬送儀礼に参会者による飲食行為という新しい要素が加わったと考えられる。

次に，古式須恵器を伴なう他の古墳における出土状態を通じてそれらのもつ多様な性格について検討してみたい。

小稿で扱う古式須恵器とは，大略6世紀初頭頃までに所属する須恵器を指す。一般に当該期では，器種・数量とともに貧弱つまり杯・高杯・甕・壺・甕のうちのいずれか一個あるいは数種数個にとどまる傾向があり，この意味で，二重甕・鈴付高杯等の特殊器形を含む多器種を多量に伴なう2号墳は特異な存在といえる。

以下，明確な事例のみに限定して列挙するが，出土位置は，墳丘外（墳頂部外表），封土内（上部・裾部），主体内，主体外と多様である。この他に，墳丘外裾部・周溝内からの出土例も知られているが，原位置を移動している場合が多く，小稿では一応除外する。なお，主体は3例を除けばいずれも古式の横穴式石室あるいは横口式石棺である。

●

墳頂部外表

嘉穂郡頴田町・きょう塚（箱式石棺）では，「墳頂中心部に，……径1メートル足らずに割石が葺石状にかたまっていた。……この割石群にまじって須恵器壺1個体分の破片七と土師器の細片1個が発見された」（註29）。時期は「古墳時代中期末（五世紀後葉）」に比定されている。

封土内上部

行橋市・稲童21号墳（西に開口する竪穴系横口式石室）では，「石室南側の封土上部において，石室床面を構成する玉砂利及び石英粒の混じった赤色封土中から墓前祭に関係のある須恵器片（Ⅰ）が若干発見され」，「5世紀中葉から後半代」に比定されている（註30）。

田川市・セスドノ古墳（西に開口する単室横穴式石室）でも不明確ではあるが，同傾向にあるとみられる。同墳では，封土の各所から土器片が出土しているが，「特に表土に近い第5層目（最上層＝筆者註）に弥生・土師器片が多く，第4層目に須恵器片が比較的に多い」傾向があるという（註31）。なお後述するように石室内からも須恵器が出土されている。

封土内裾部

北九州市小倉北区・東宮ノ尾第5号墳（略東西方向の「石棺系石室」）では，「墳丘西側裾部から土師器の壺形土器と須恵器の杯セットが原位置を保って供献された形で発見された」。「須恵器第Ⅰ型式後半に比定される」（註32）杯4セットのうち，3セットは蓋が被せられて明らかに容器としての出土状態を示すが，爾余は内面を上にして置かれている。

京都郡犀川町・山鹿古墳（「古式の単室横口式石室」）では，「石室南側の封土内から」「埋葬に際して故意に破砕して埋められた」状態で出土し，「第1様式後半期」（註33）比定されている。

主体内

前出田川市・セスドノ古墳では，「奥壁南隅」から蓋付小壺が出土し，内部には勾玉・丸玉が納められていた。同器は舶載品と推定され，古墳の年代は「6世紀前半」に比定されている。

京都郡苅田町・番塚（西に開口する単室横穴式石室）では，「容器類は杯1個が奥壁近くに存した外は全て石室内羨門側におかれていた」。器種は既述各墳とは異なって極めて豊富で「杯2個，蓋杯2組，高杯1個，大壺1個，人形器台1個，壺付大形器台1個，水鳥形鐙1個」に達し，この他に土師器壺，甕各1個を含む（註34）。埋葬遺体は2体で，「杯と壺の一部，鐙」を第Ⅰ型式に，以外は第Ⅱ型式に比定されている（註35）

熊本県玉名郡菊水町・船山古墳（横口式家形石棺）では，杯1組と提瓶1個が棺内出土品のリストに登録されているが，他の夥しい豪華な副葬品と同様に詳細な出土位置は不明である（註36）。

●

主体外

遠賀郡芦屋町・夏井ケ浜箱式石棺では，「石棺蓋石上から高杯の破片の出土があり，その他石棺に密接して広口壺と甕が出土した。広口壺内部には，鉄斧・鋤先・工具類が収納されて」おり，「第Ⅰ形式から第Ⅱ形式への過渡的形態に」比定されている（註37）。

上記諸例のうち，墳頂部外表および封土内上部に納める例は，前代の葬制の内にその祖型が求められて古式の様相を帯びるとみてよい。箱式石棺を主体とするきょう塚はその典型であり，竪穴系横口式石室を主体とする稲童21号墳は，墓制に新しい要素を導入しながらも葬制上では前代の残影を強く留めていると理解される。古式須恵器の所属する時期は大部分の地域では横穴式石室の導入期にあたっており，墓制の変革が葬制の変化を促進し，自ずと新しい墓制に適合すべく儀礼の場も墳頂部から裾部へと移動したとみられる（註38）。

次にこれらの須恵器の性格であるが，基本的には葬送儀礼用具と副葬品とに大別できる。葬送用具としての須恵器は，墳丘内・外，主体外出土の全てを主体内出土の一部とがそれにあたり，きょう塚・稲童21号墳・東宮ノ尾第5墳・山鹿古墳・乙植木2号墳・夏井ケ浜箱式石棺（註39）・番塚例がそれに該当する。これは，さらに，死者への供献用容器と儀礼参列者が使用した飲食器とに二分される。

飲食物供献の形態をとりながらも，墳頂部外表・封土内上部からの出土例は甕1個を埋置するに限られる傾向があり，相対的に多種・多量の須恵器から構成される裾部および石室内出土例とは明瞭な差異がある（註40）。つまり，墳頂部の甕には飲料が容れられた可能性はあるが，器種によって判断する限りでは，儀礼に食物供献が伴なってはいないのである（註41）。飲食物供献は，甕に杯・高杯が加わってはじめて完結するとみられ，とすれば，器種の組合せは，儀礼の変遷を考えるうえで重要な意義をもつと評価される。

小林行雄博士は，「横穴式石室の内部から発見する土器の位置と数とによって，古代の儀礼を正しく復元しようとすることは，じつはまだ困難なのであった。それにもかかわらず，四壁の巨石の重圧感が，この世ならぬ異境の連想をさそう横穴式石室の中で，葬送儀礼の過程として捧げ，土器にいれてならべた供物の数とを，死者のためであるという意識から，転じて死後の食物と考えるようになる思想の推移は，きわめて自然におこりうることであったと考える」とされている（註42）。

古代北九州人の死あるいは死者に対する観念について，軽々しくこれを論ずることはできないが，新しい墓制の導入直後であることと，器種・数量ならびにそのあり方からみて，古式須恵器に納められた飲食物は，一般的意味での供物と見做される（註43）。けれども，一方で供献の内容物が飲料のみから飲食物へと拡大し，他方では儀礼の場が墳頂部外表・封土内上部から石室内あるいは封土内裾部へと，特に後者へ移動するという推移が認められる。しかも，死者を中心とする思想・儀礼が必しも深化せず（註44），乙植木2号墳例のように，儀礼の過程

になんらかの思想的背景のもとに生者たる参列者による飲食行為が含まれる例すら登場してくるのであり，横穴式石室の導入がもたらした波紋の大きさを窺える。

続く6世紀代のあり方は，かつて指摘したように（註45），石室内に多量に置く例と墓道肩部あるいは裾部等の石室外に集中する例とが併存する等多様である。後者については，思想的には古式須恵器段階でのそれと同様と思われるが，地域性をも含めてなお検討の余地があり，いずれ稿をあらためて論じたい。

副葬品としての確実な出土例は，セスドノ古墳1例に限られるが，同例では他の副葬品を納める容器として用いられている。須恵器自体の副葬をそれと認定することは，小林博士が指摘されたように供献土器との弁別上かなりの困難を伴なう場合があるが，番塚の「奥壁近くに存した」杯一個と乙植木1号墳の壺の2例がその可能性をもつ。乙植木2号墳石室内出土の有蓋直口壺についてはいずれとも判断し難い。

註　1　この場合，旧表土の腐植土（Fig.11の斜線部分）から掘りこまれた排土のブロックは，必ずひっくり返された状態で盛土されるという規則性が認められる。Fig.11でドットを付する部分がそれで，各ブロックは長さ4.50cm前後と大き目である。

2　右側壁については，破壊によるバランスの崩れの可能性も想定されるが，天井石及びパッキングの状態からみて，当初からのものと思われる。

3　この種の土器について，高島忠平氏は「赤焼き」の土器と呼称され，見解を述べられている。これについては，後章にて少しく触れてみたい。①高島，西弘海「寿命王塚古墳出土土器」<奈良国立文化財研究所年報1971>，②高島「王塚古墳」『嘉穂地方史』1973

4　九州歴史資料館勅務岩瀬氏の御教示による。氏からは土器整理についても多大の御協力をいただいた。

5　文化課橋口達也氏の鑑定による。

6　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」

7　渡辺正気『筑前国朝倉郡狐塚古墳』<福岡県文化財調査報告17—1>

8　下記文献による所が多い。田淵実夫『石垣——ものと人間の文化史』1975

9　調査参加者は筆者と，川述公紀・日高正幸両君の計3名である。

10　竪穴系横口式石室についての筆者の見解は，下記文献中に既に述べている。南鮮との関係を含めて別稿を予定しており，小稿では敢えて取り上げないこととする。
①「第12・9号墳の石室構造について」『片山古墳群』<福岡県文化財調査報告書46>1970所収。②「平原古墳群の調査」<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ>1972所収。

11　八女郡広川町・鈴カ山1号墳石室では玄室長（3.4m）の2倍（6.8m）が石室全長となっており 玄室長：前室長：羨道長は2：1：1（3.4：1.7：1.7m）となっている。同時に，奥壁は墳丘の中心（正確には主軸方向での）にはなく，墳丘径は1.7mの7倍（11.9m）に

近いとみられる。

拙稿「鈴ケ山1号墳」註10—②文献所収

12 「陶邑の変貌」<古代の日本5>1970

13 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』1966

14 註13文献　図版33—26・27，図版34—28

15 同上文献図版35—20

16 註12文献に同じ

17 『蒲田遺跡』<福岡市埋蔵文化財調査報告書33>1975

18 当該期の窯跡の調査によって決すべきであるが，甕と杯との間に感じられる古・新の二相が直ちに時間差を意味するものではないと考える。また，器高113cmに達する大甕の存在からみて，大部分が周辺で製作されたと思われ，従来比較的新しいとみられていた須恵の町名の由来の再検討をも含めて，これらの製作地があらためて問題となる。

19 註13に同じ

20 寺師見国・三島格「鏡及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」<人類学研究7—1・2>1960

21 小稿では，註20文献中の記載に基いた。

22 小田富士雄「築山古墳」『中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査』<大分県文化財調査報告15>1968

23 木永博憲「第2号円形周溝墓」『朝田墳墓群1』<山口県埋蔵文化財調査報告32>1976

24 筆者も，かつて片山12号墳出土例についてこれを「毛抜形鉄器」として扱ったことがある（註10—①文献所収）。直後に三島格氏より御教示を得え，不勉強を恥入った次第であった。転用されたことが明らかである場合にのみ，「毛抜形鉄器」の名称を用いるべきであろう。

25 酒井仁夫「八熊6号墳」<九州貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ>1976所収

26 柿本春次「第1号横穴古墳」註23文献中に所収。ただし，「古墳築造時に破壊した墳墓に副葬されていたものを再副葬したものとも考えられる」とされているのはいかがであろうか。

27 註22文献によれば，南棺の被葬者は3体で，頭位を東とする2体のうち1体は女性であり，「東南隅にはその他の鉄器があった」いう。

28 小稿では註3—②文献を引用した。

29 渡辺正気『きょう塚古墳発掘調査報告』<福岡県文化財調査報告21>

30 山中英彦『福岡県行橋市稲童古墳群第2次調査抄報』1965

31 花村利彦「セスドノ古墳」<郷土田川27>1968

32 山中英彦『東宮ノ尾古墳群』<北九州市文化財調査報告書14>1974

33 本墳についての引用は，下記文献から行なった。小田富士雄「福岡県京都郡山鹿古墳の須恵器九州古式須恵器集成（六）」<九州考古学16>1962

34 渡辺正気・松岡史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」<日本考古学協会第24回総会，研究発

表要旨>1959

35　小田富士雄「九州の須恵器序説 -編年の方法と実例（豊前の場合）」<九州考古学22>1964。

因みに，氏は第Ⅰ型式を5世紀後半に，第Ⅱ型式を八女市岩戸山古墳の時期に充てられている。

36　梅原末治『玉名郡江田船山古墳調査報告』<熊本県史蹟名勝天然紀念物調査報告1>

筆者は，1975年10月に実測の機会を得た。両器種の形態・成形は，ともに異例に属する。なお提瓶の存在は従来当該期には出現していないとされているだけに，その意義があらためて問われる必要がある。実見にあたり御高配いただいた東京国立博物館亀井正道先生に心から御礼申し上げます。

37　小田富士雄編『夏井ケ浜古墳』<芦屋町文化財調査報告書1>1971

38　墓制の変化の背景には，死あるいは死者に対する思想の推移があり，従って儀礼の場の移動の思想的契機が解明されなければならないが，小稿では事実の指摘にとどめた。

39　註37文献では，「棺外に副葬された」と報告されている。副葬品は原則として主体内に置かれるべきものであり，また農・工具類を伴出した乙植木2号墳例をも勘案して，小稿では儀礼の過程で供献されたものとして取り扱っている。

40　土師器のみに限られる佐賀県唐津市・横田下古墳は，上記引用諸墳よりも少しく年代的に遡るとみられるが，石室内におけるあり方は基本的には軌を一にする。つまり，「土師器は，第二号石棺（2体埋葬＝筆者註）の枕許即ち東側壁近くに並べてあって一部は棺外まであったらしく，十六個の高杯と八個の坩は遺骨数またはその倍数を示している。…何か葬祭供献の形式を暗示する。」（松尾禎作「横田下古墳」<佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告10>1951）のであって，単なる副葬品ではなく飲食物の供献に伴なう容器とみられる。

41　容器に納めない場合も理論的には想定されるが，小稿では一応その可能性を除外している。

42　小林行雄「黄泉戸喫」。本稿では『古墳文化論考』1976に拠った。

43　多種・多量の土器を石室内へ納めた番塚の場合でも，その出土位置は，棺内・側にあるのではなく「石室内羨門側」に集中している。

44　これらの須恵器は，故意に割られた状態で出土することがある。死者に対する供献のための容器を意識的に破砕すべき必然性はない。故意に破砕する行為は，儀礼変遷のある段階（総体的には古式）では儀礼の一過程に含まれていたとみられる。この背景には，死者に対するある種の忌れに基く場合とか葬送儀礼に用いた土器を日常生活で再使用しない――ケガレの観念とでもいうべき感覚に基づく場合等が想定されて看過できない。従って，割られた須恵器は厳密には供献用容器ではなく一種の儀器とみられ，割らない場合とは思想的背景を異にすると考えられる。

45　拙稿「鈴カ山1号墳」註10―②文献所収

図　　版

1．乙植木1～3号墳遠景

2．乙植木2～4号墳遠景

1．乙植木１号墳石室全景（西から）

2．乙植木１号墳石室全景（東から）

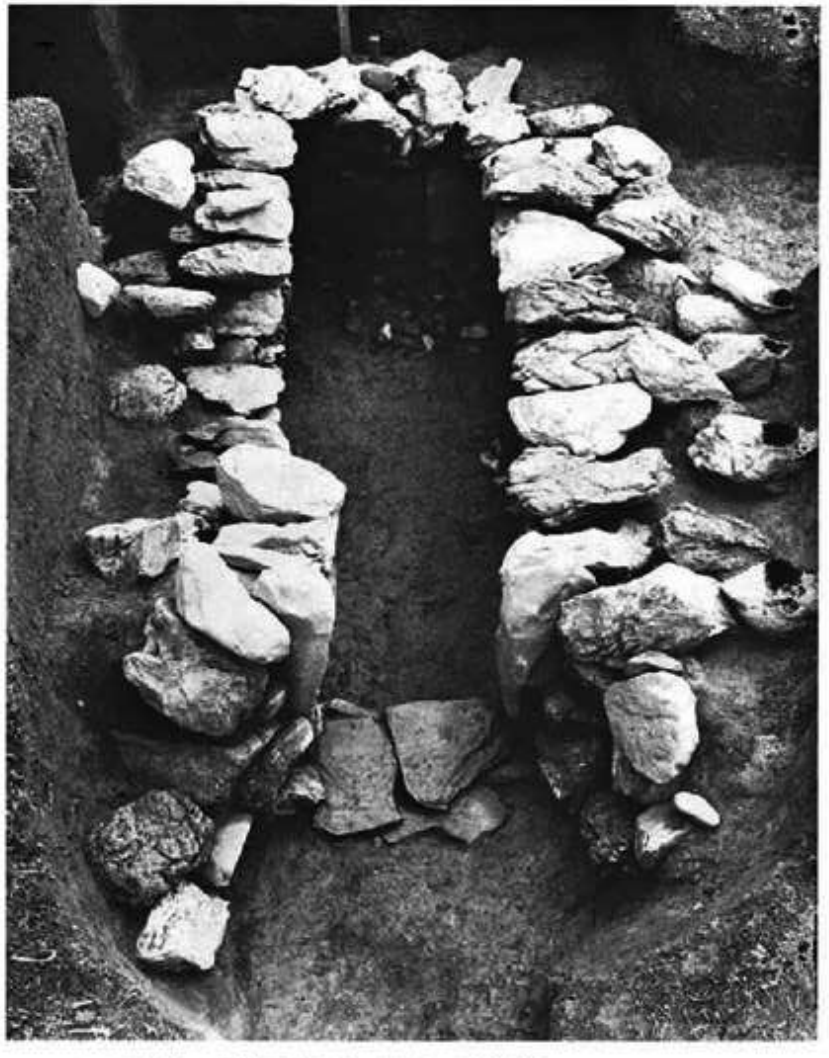
1．乙植木１号墳石室左側壁

2．乙植木１号墳石室右側壁

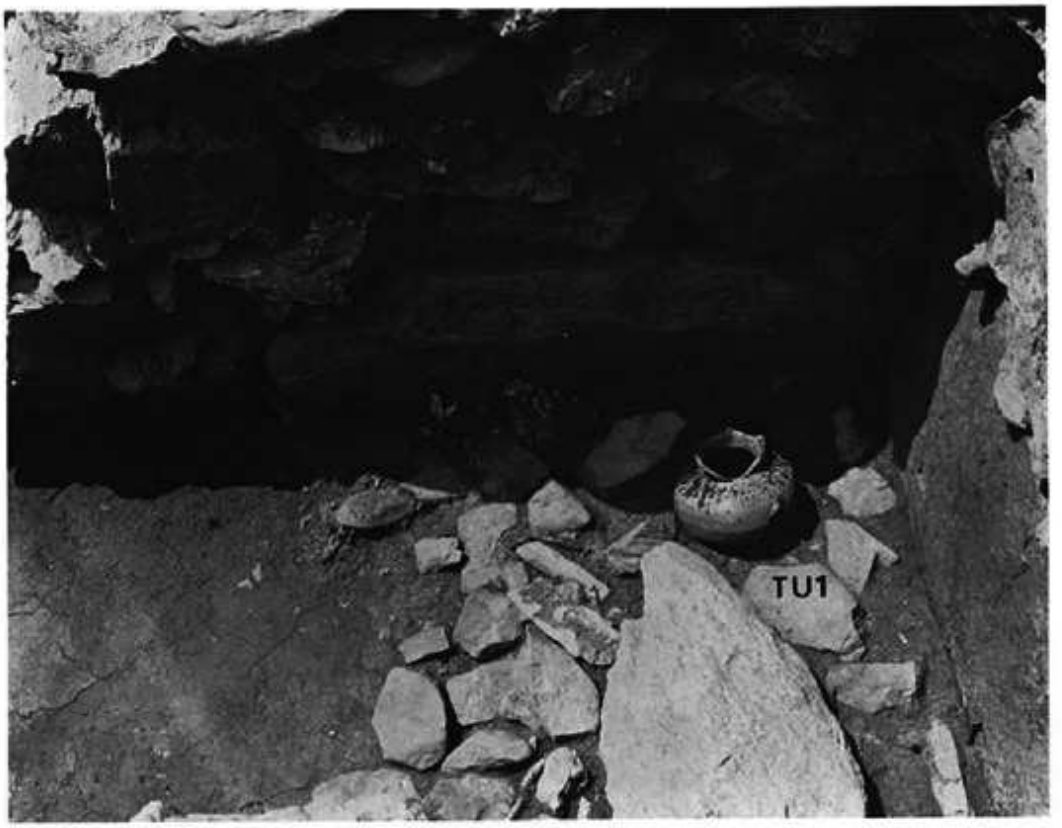
1．乙植木1号墳石室奥壁

2．乙植木1号墳石室閉塞石

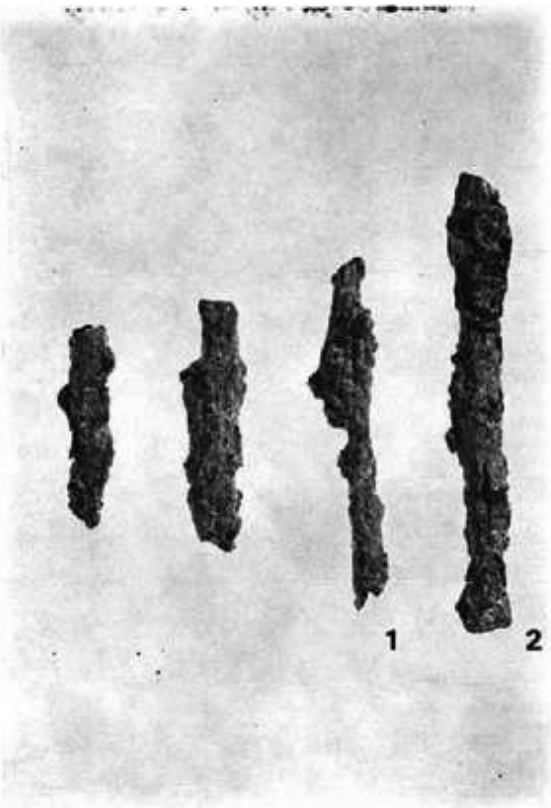
1．乙植木１号墳閉塞石遺存状態



2．乙植木１号墳石室全景（閉塞石除去後）



1．乙植木１号墳石室遺物出土状態



2．乙植木１号墳出土遺物

2．乙植木２号墳石室全景（西から）

1．乙植木２号墳石室全景（東から）

1．乙植木２号墳左側壁全景

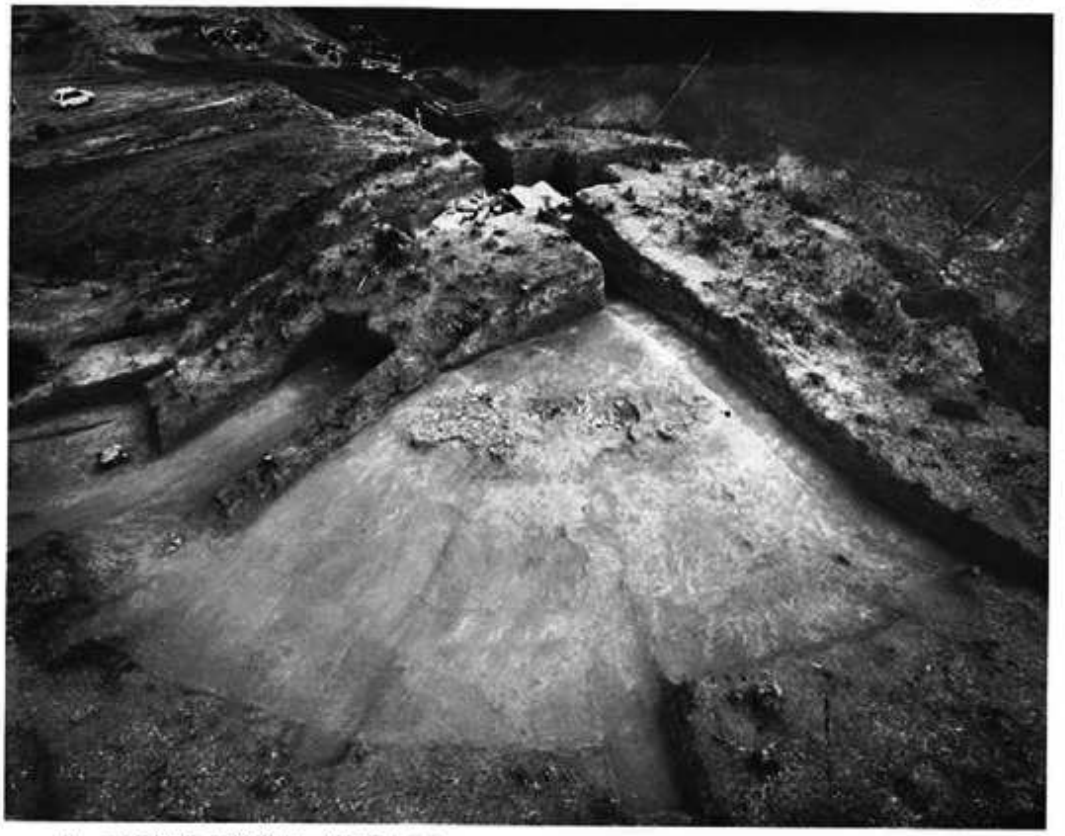
2．乙植木２号墳横口部閉塞状況（室外から）

1．乙植木2号墳横口部（石室内から）

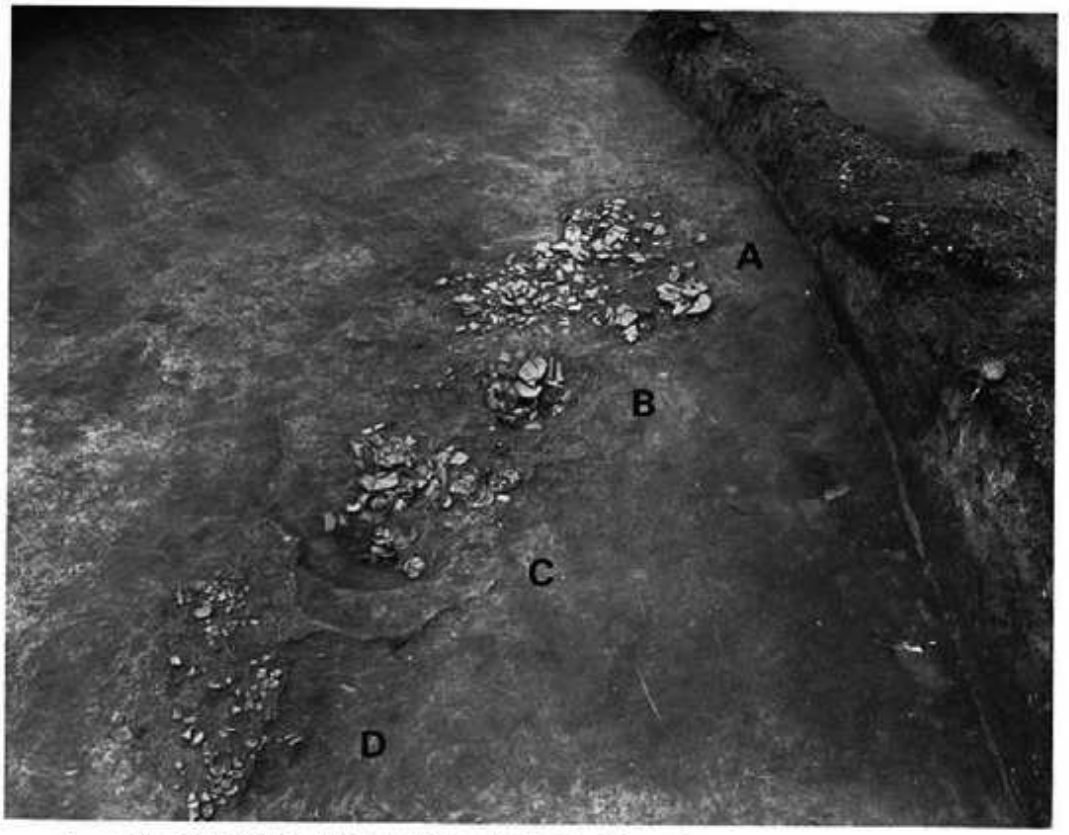
2．乙植木2号墳横口部（室外から）

1．乙植木２号墳左袖石付近（楯石除去後）

2．乙植木２号墳左袖石前面土器出土状態



1．乙植木２号墳全景（南西から）



2．乙植木２号墳墳丘南西側土器出土状態全景（東から）

1．乙植木２号墳墳丘南西側土器出土状態

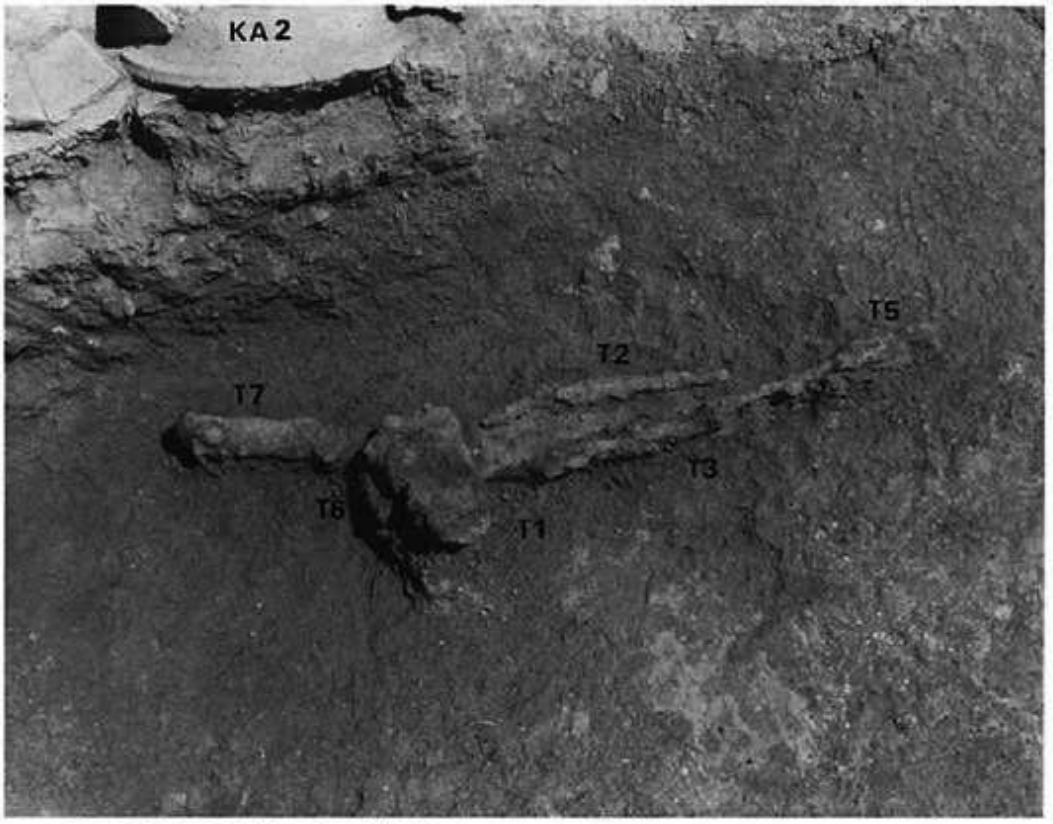
2．乙植木２号墳墳丘南西側　A群　土器出土状態

1．乙植木2号墳墳丘南西側　B群　上部土器出土状態

2．　同　上　下部土器出土状態

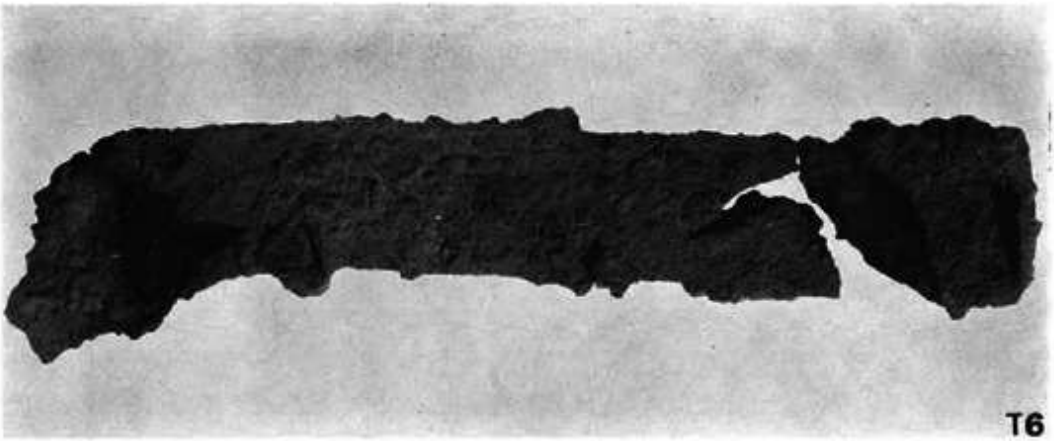
1．乙植木2号墳墳丘南西側　C群　上部土器出土状態

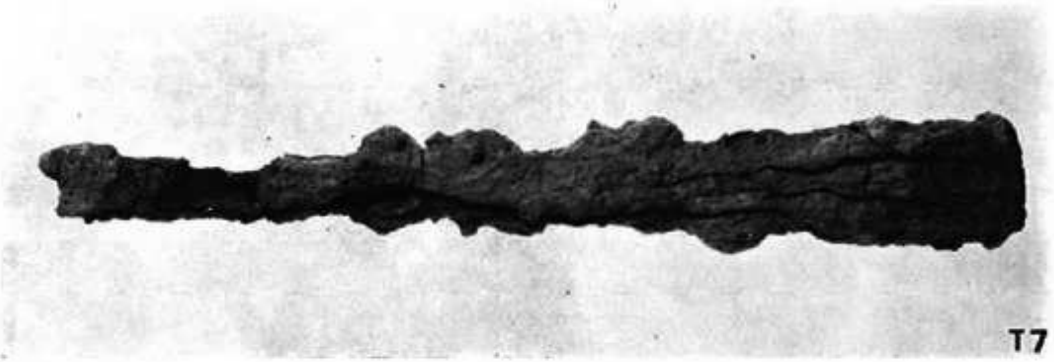
2．　同　上　下部土器出土状態



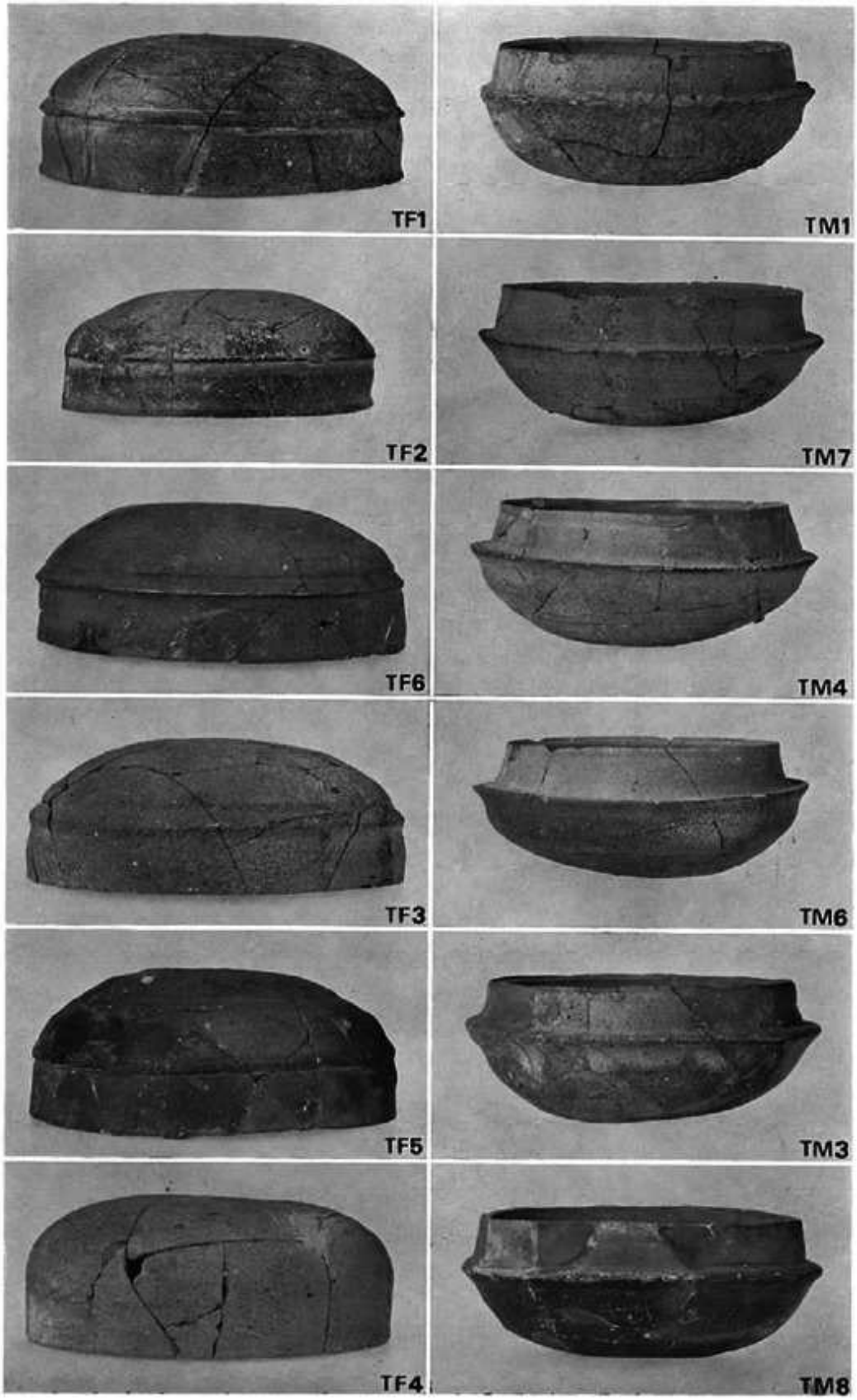
1．乙槙木2号墳墳丘南西側鉄製工具出土状態

2．乙槙木2号墳墳丘南西側D群土器出土状態

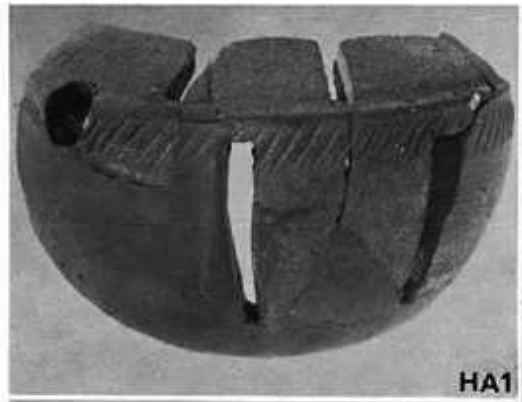




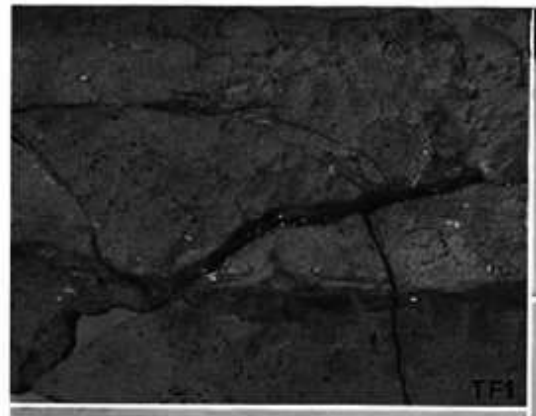
乙植木2号墳出土鉄製工具



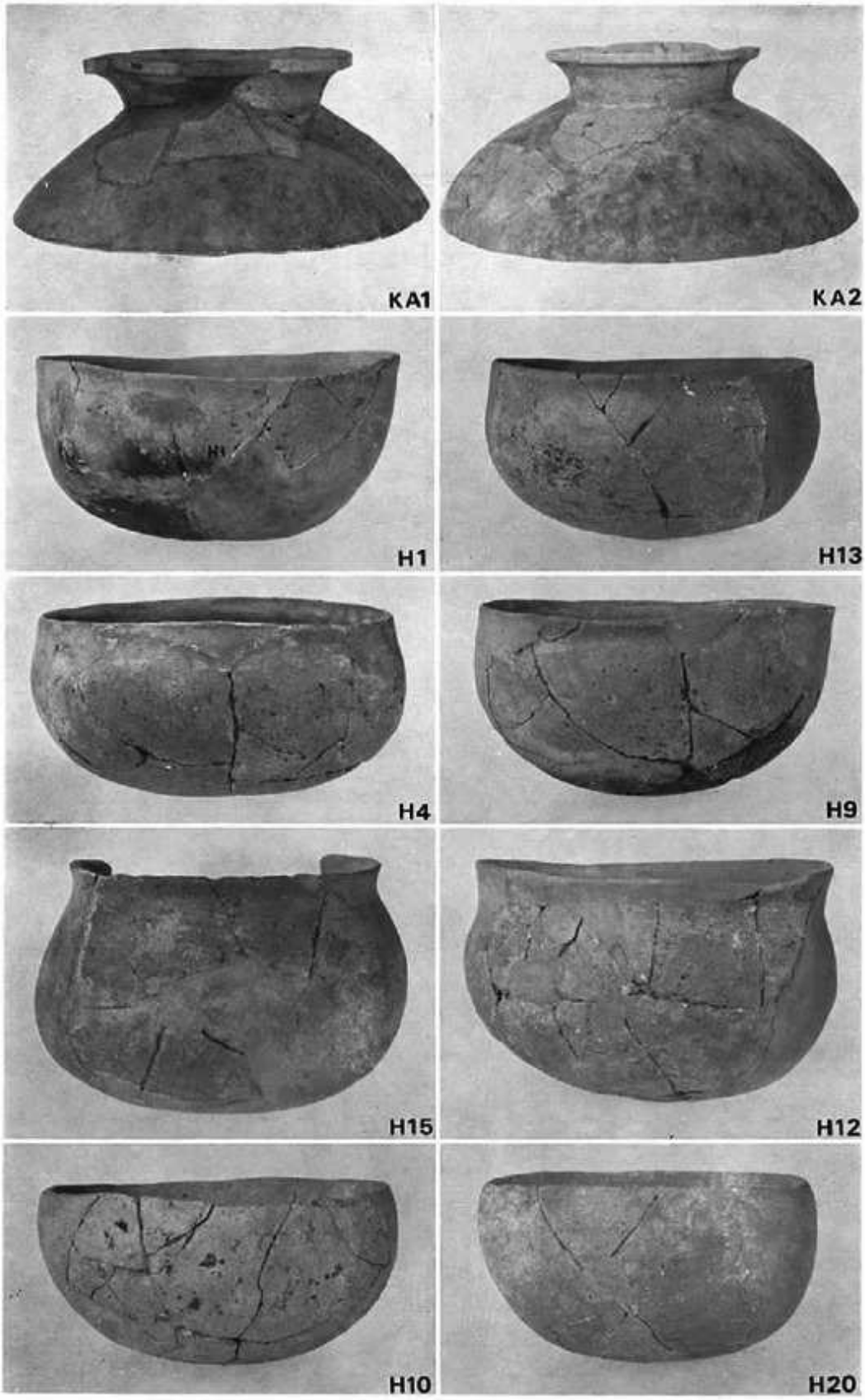
乙植木2号墳出土須恵器（1）



乙植木２号墳出土須恵器（２）

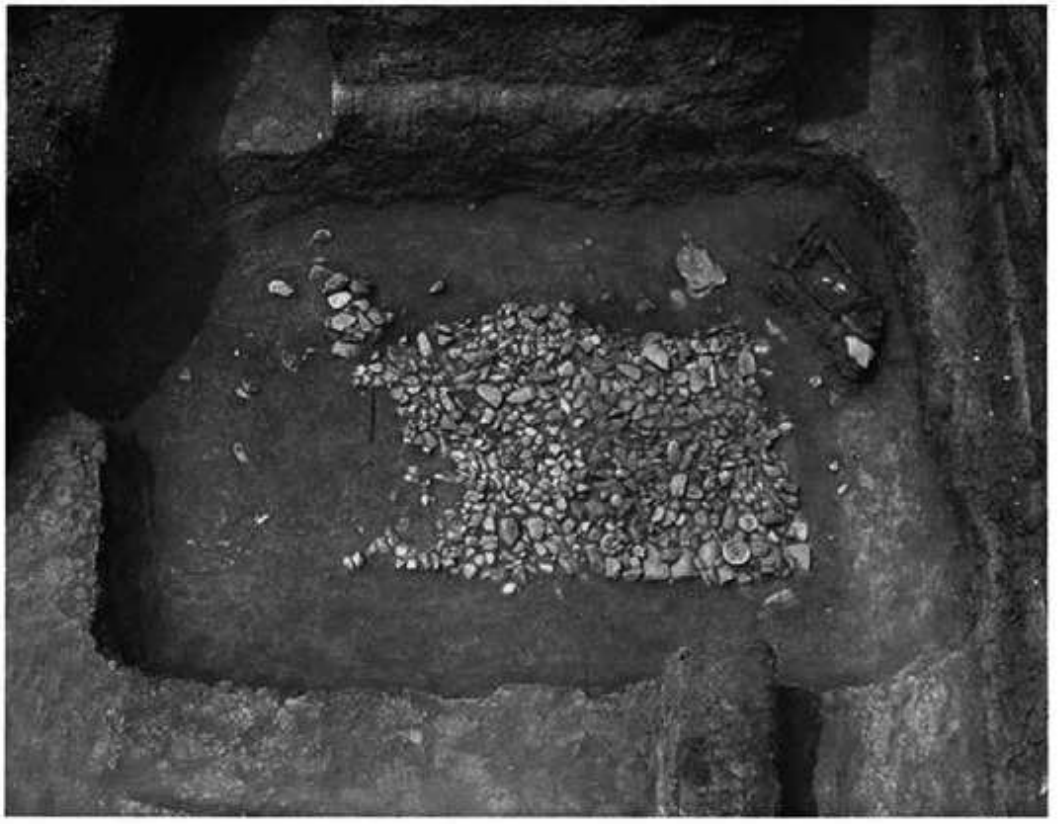


乙植木２号墳出土須恵器（３）



乙植木2号墳「赤焼き」土器・土師器

1．乙植木3号墳石室全景（南から）



2．乙植木3号墳遺物出土状態（南から）

1．乙植木３号墳遺物出土状態（西から）

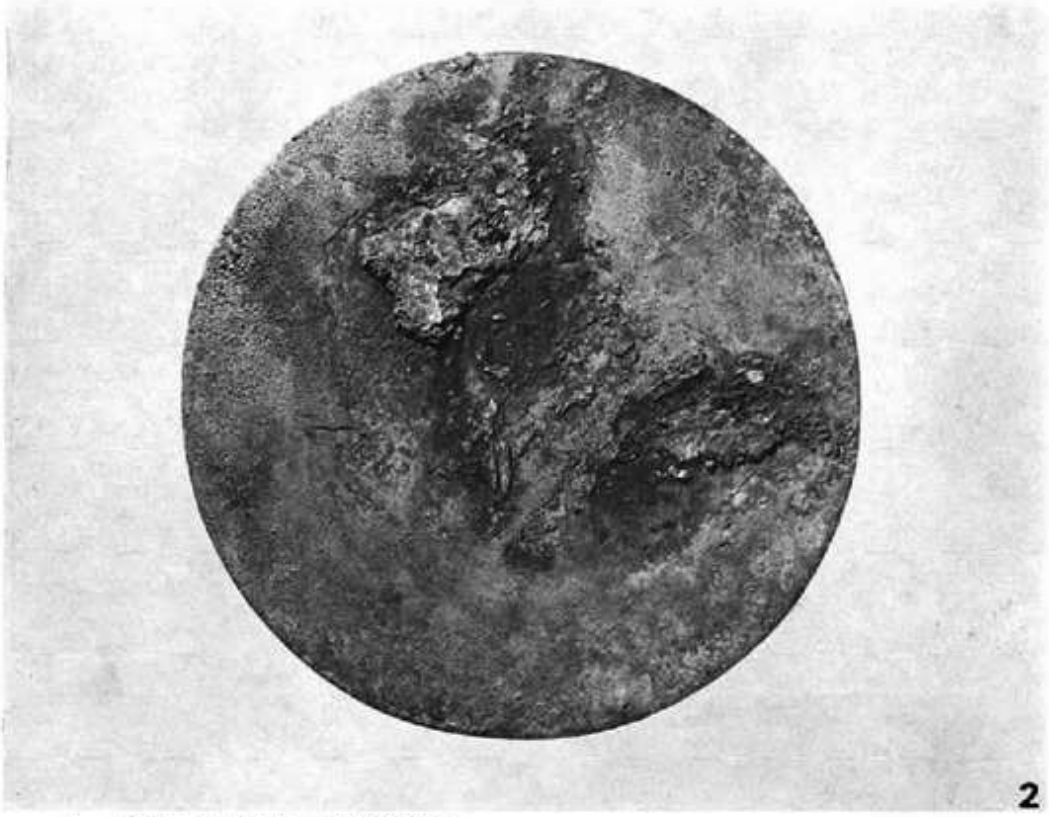
2．乙植木３号墳鏡出土状態（南から）

1．乙植木3号墳手斧鏃出土状態

2．乙植木3号墳刀・剣出土状態

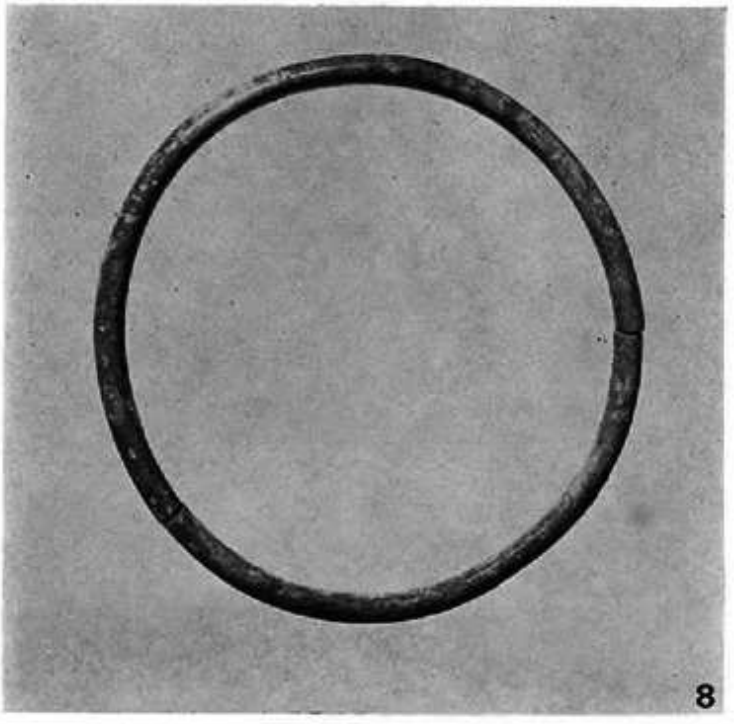
乙植木3号墳出土変形文鏡（上実大）

1．乙植木３号墳出土変形文鏡鏡縁布銹着状態（拡大）

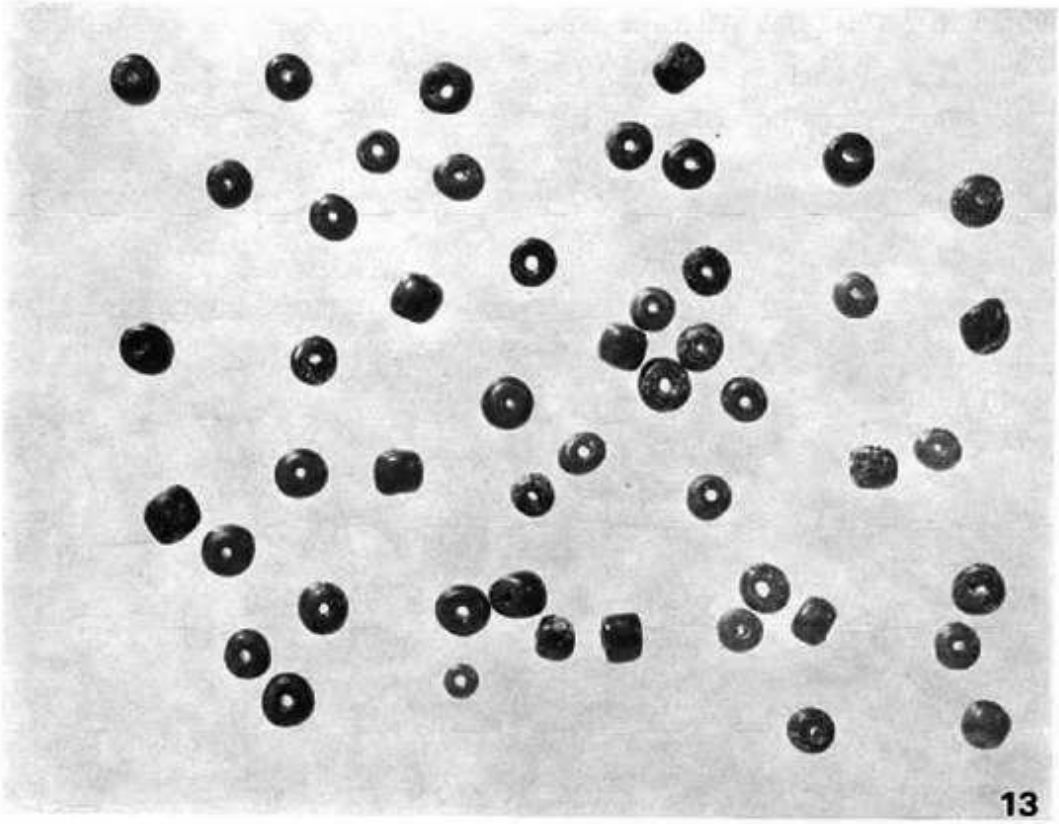


2．乙植木３号墳出土変形文鏡鏡面

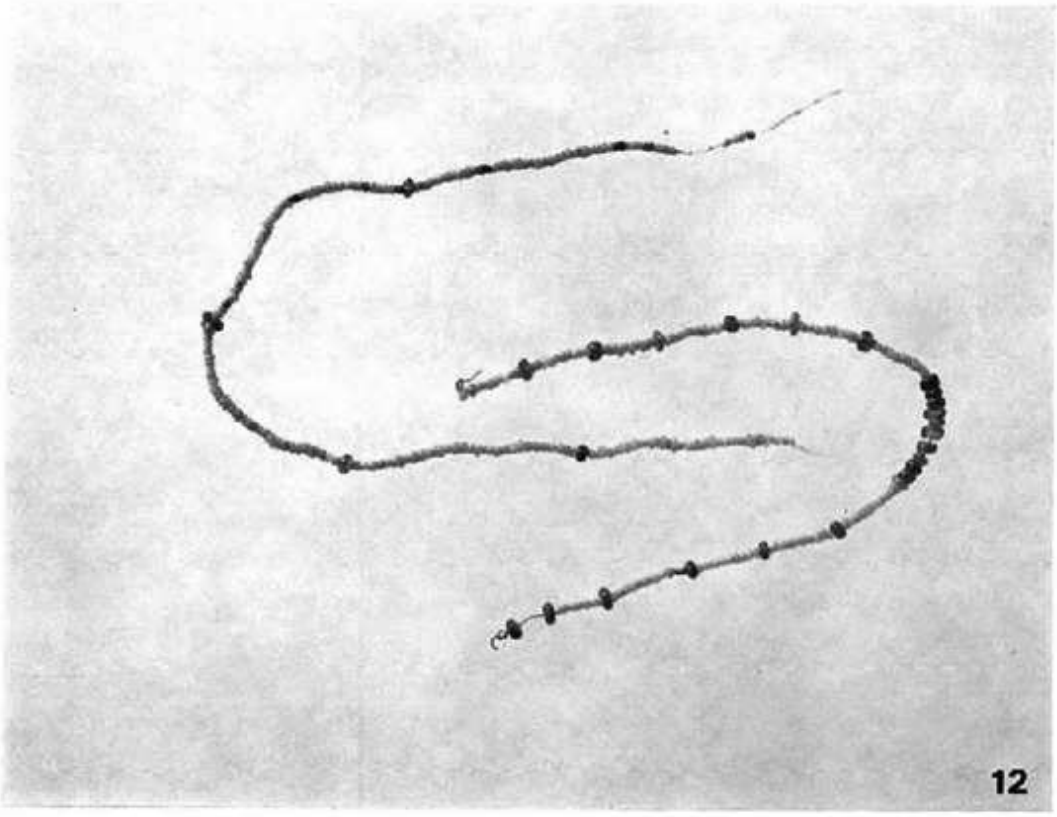
1．乙植木３号墳出土珠文鏡（実大）



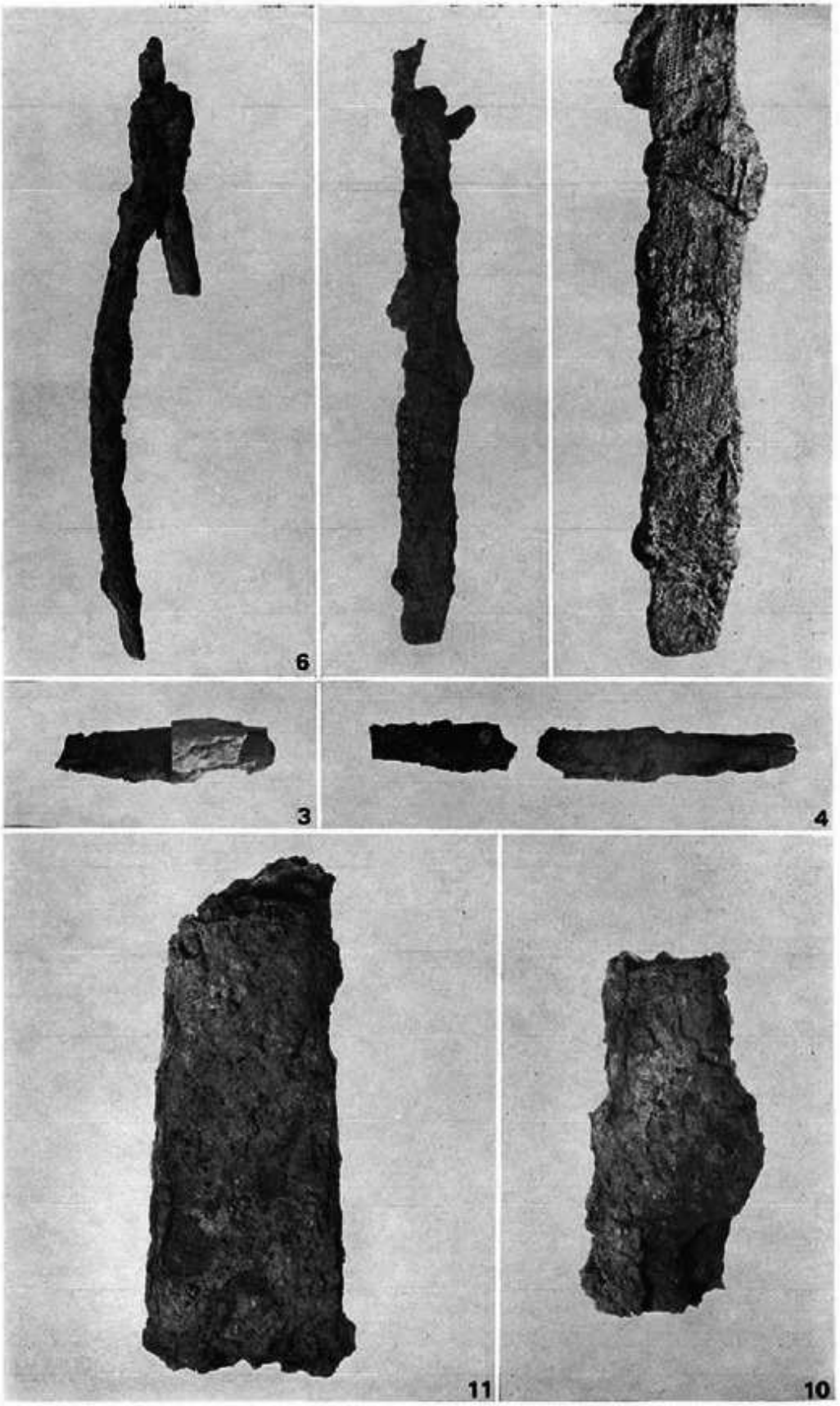
2．乙植木３号墳出土銅釧（実大）



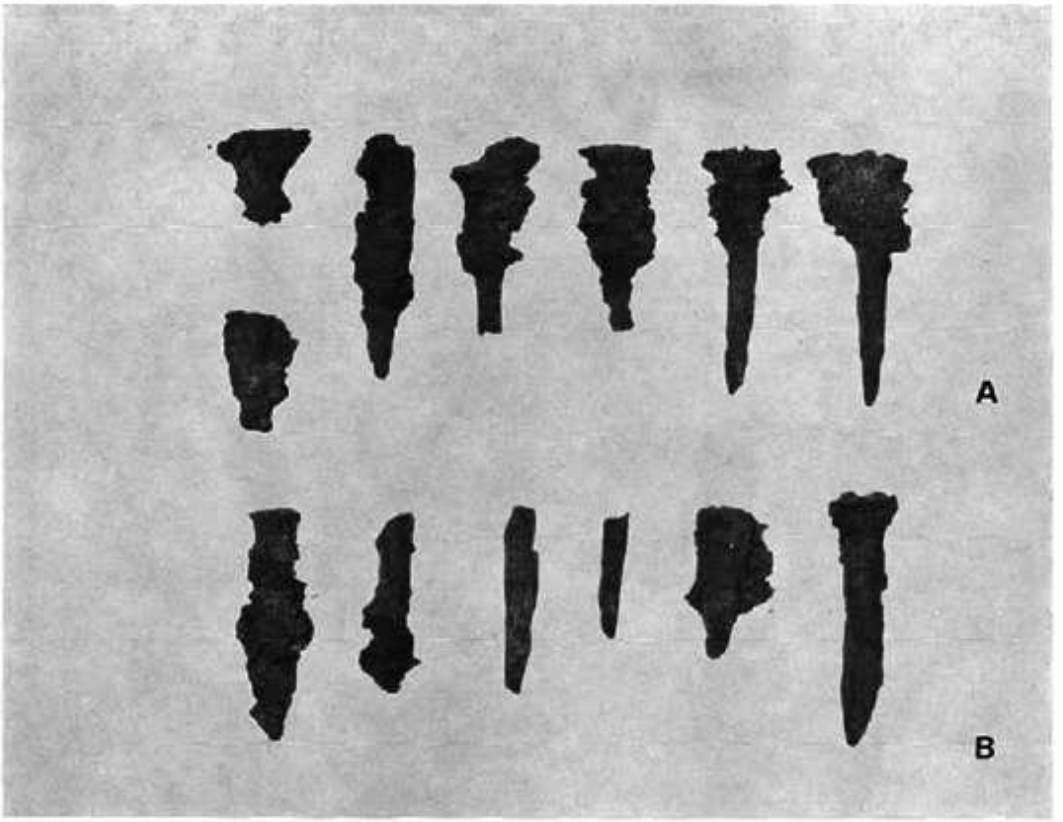
1．乙植木3号墳出土小玉



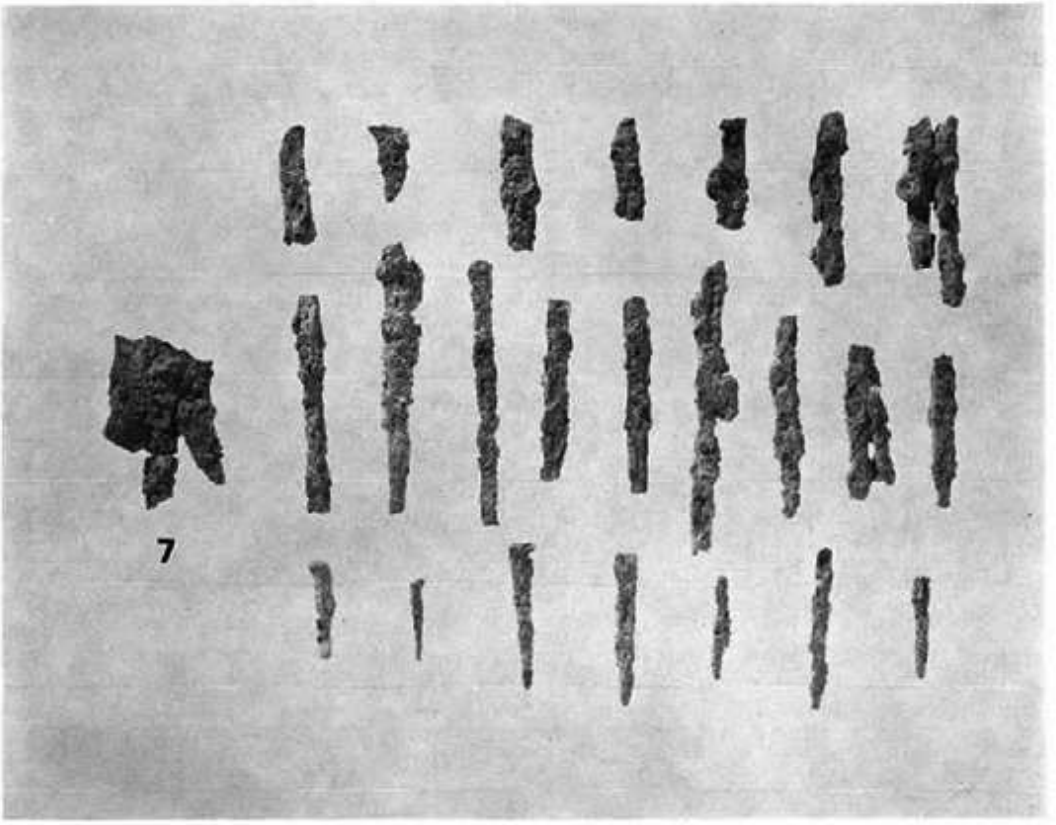
2．乙植木3号墳出土粟玉



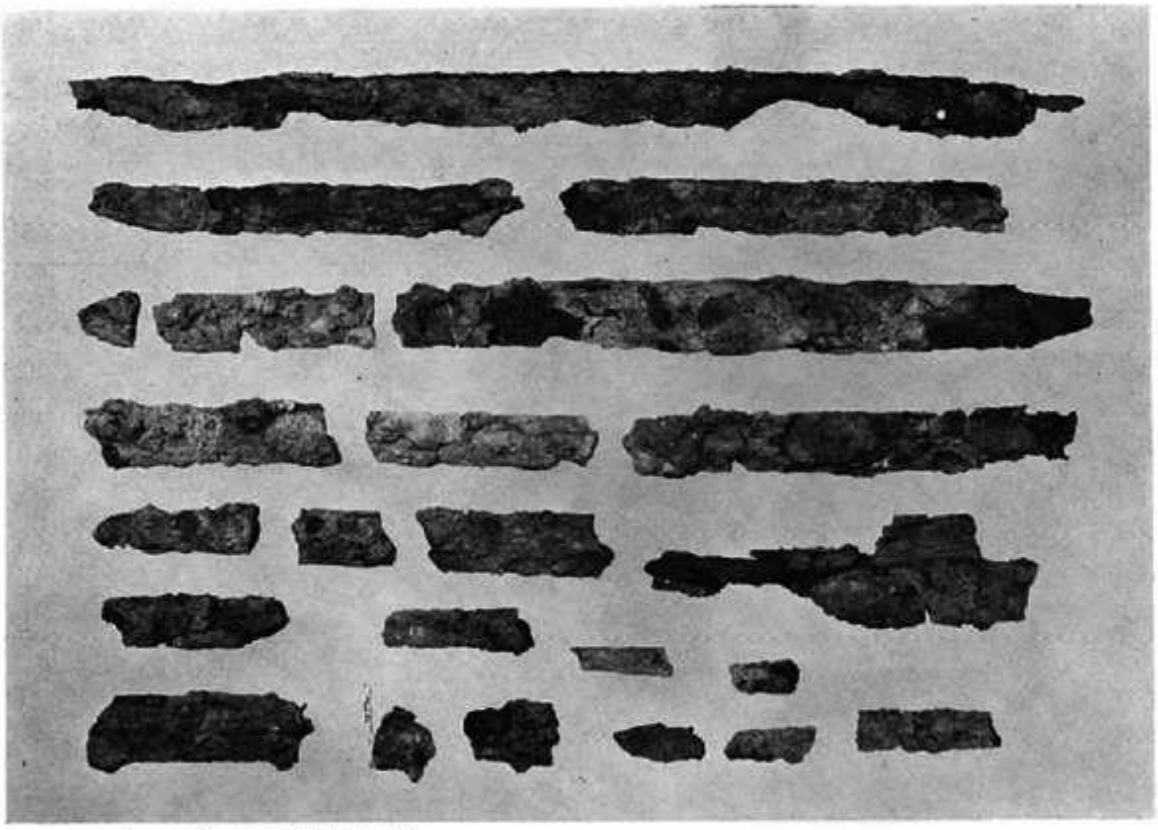
乙植木3号墳出土鉄器



1．乙植木３号墳出土釘



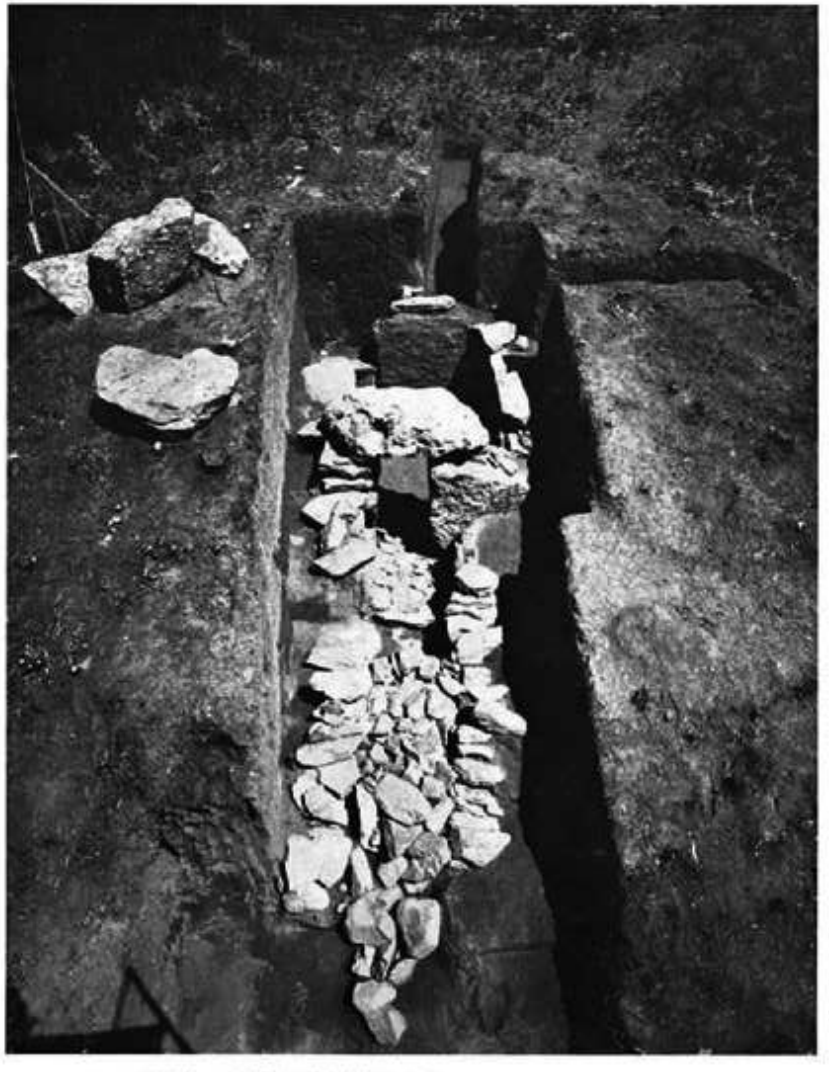
2．乙植木３号墳出土鉄鏃



1．乙植木３号墳出土刀剣

2．乙植木３号墳出土須恵器

1．乙植木4号墳全景（北から）



2．乙植木4号墳全景（南から）

1．乙植木４号墳全景（南から）

2．乙植木４号墳全景（閉塞石除去後）

1．乙植木4号墳奥壁

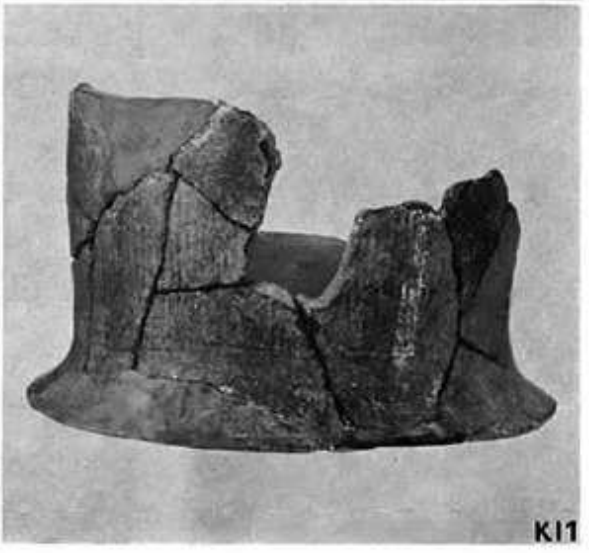
2．乙植木4号墳奥壁基部根締状態

1．乙植木4号墳閉塞石

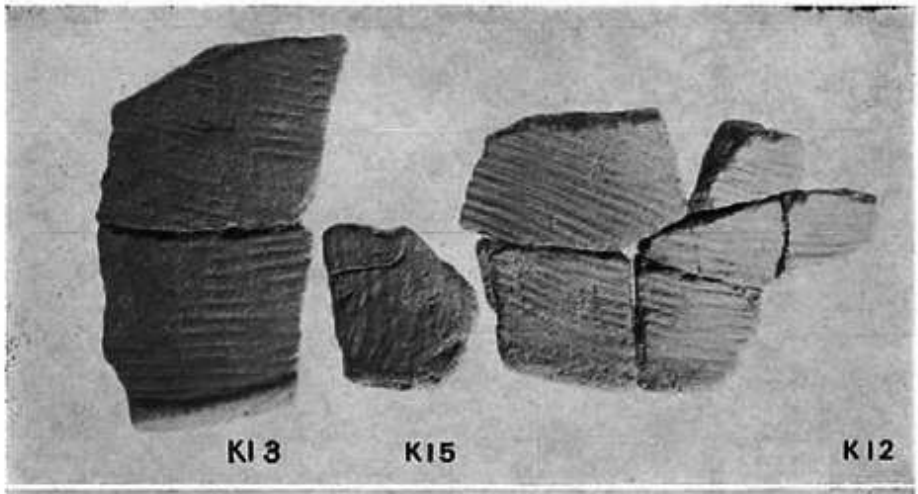
2．乙植木4号墳閉塞石最下段

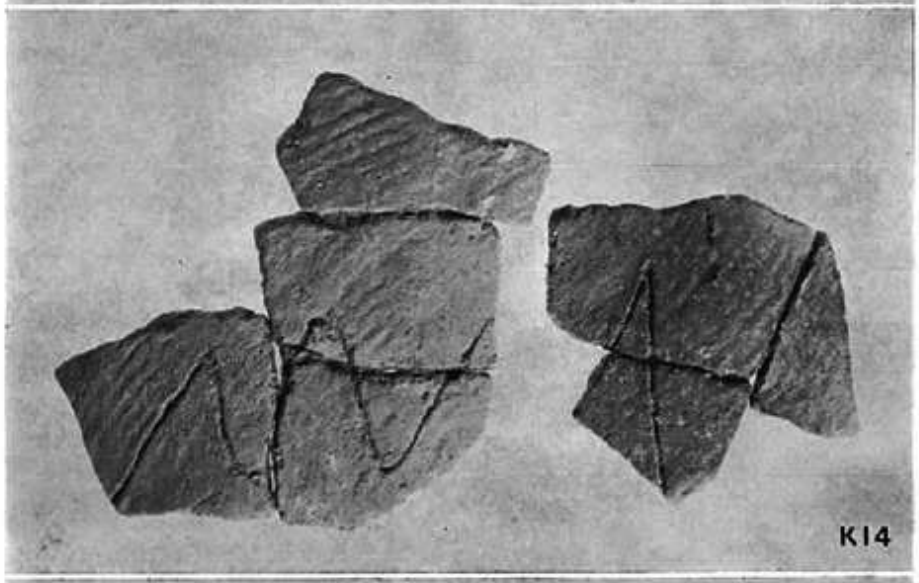
1．乙植木4号墳右袖石基部根締状態

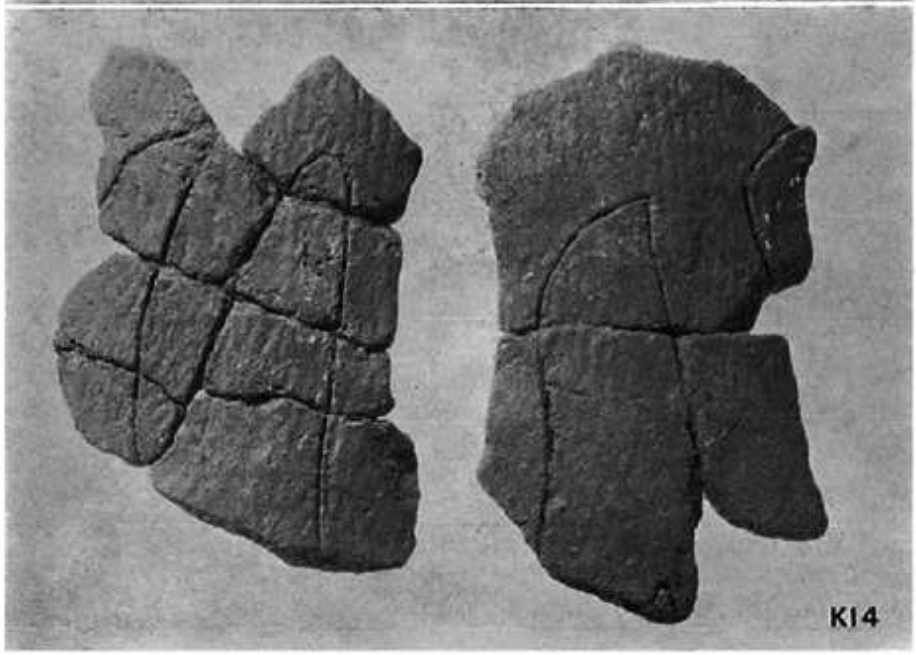
2．乙植木4号墳閉塞石前面馬蹄出土状態



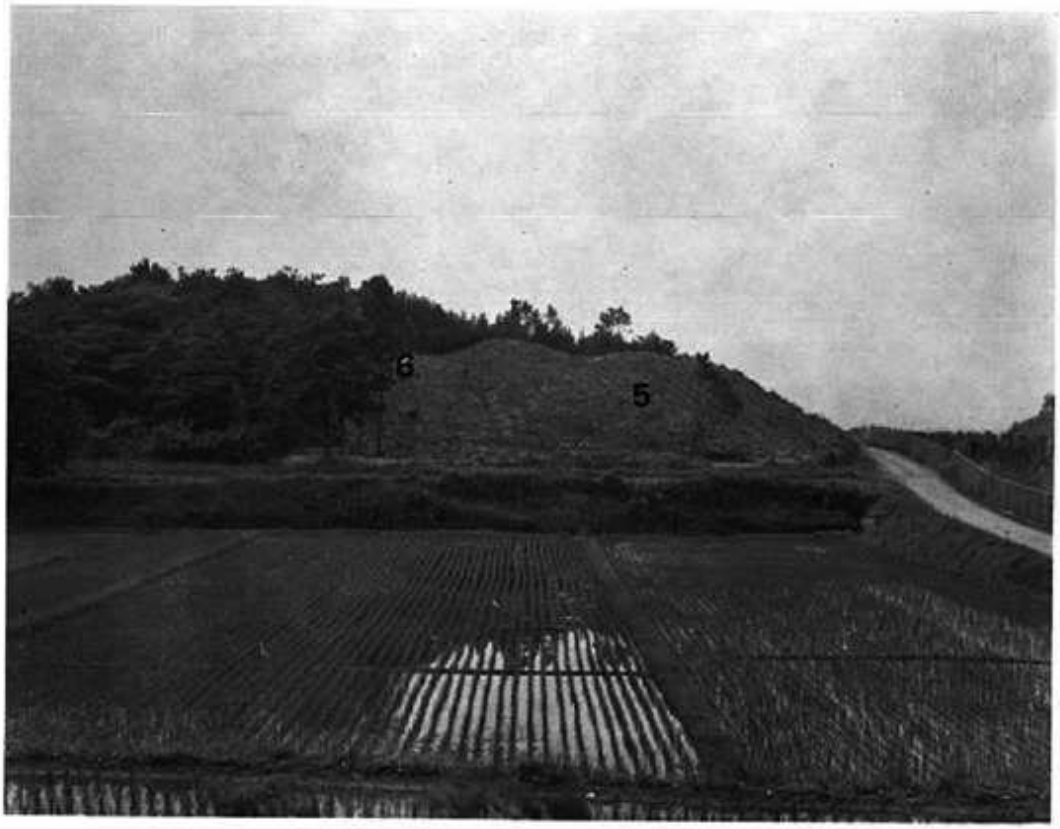
乙植木4号墳出土遺物



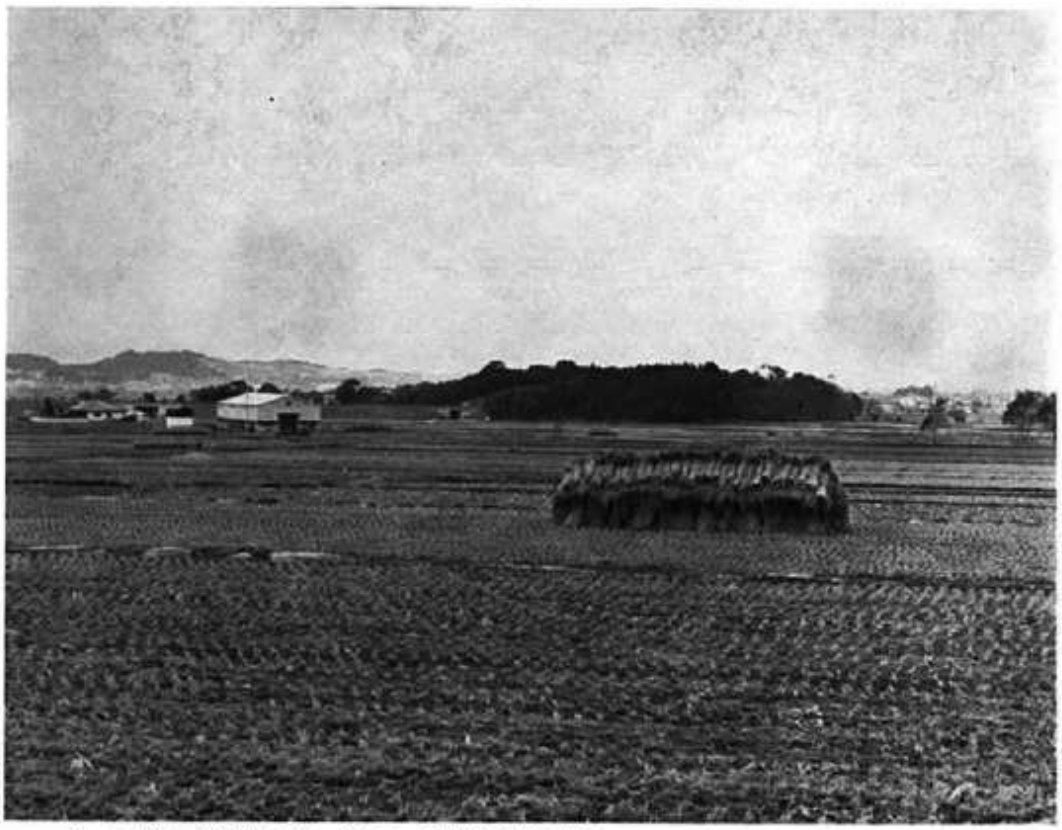




乙植木4号墳出土器台



1．乙植木5・6号墳遠景　北から（東側切通し間は縦貫道）



2．乙植木古墳群全景　東から（縦貫道開通後）

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―X―

昭和52年1月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷　株式会社チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号